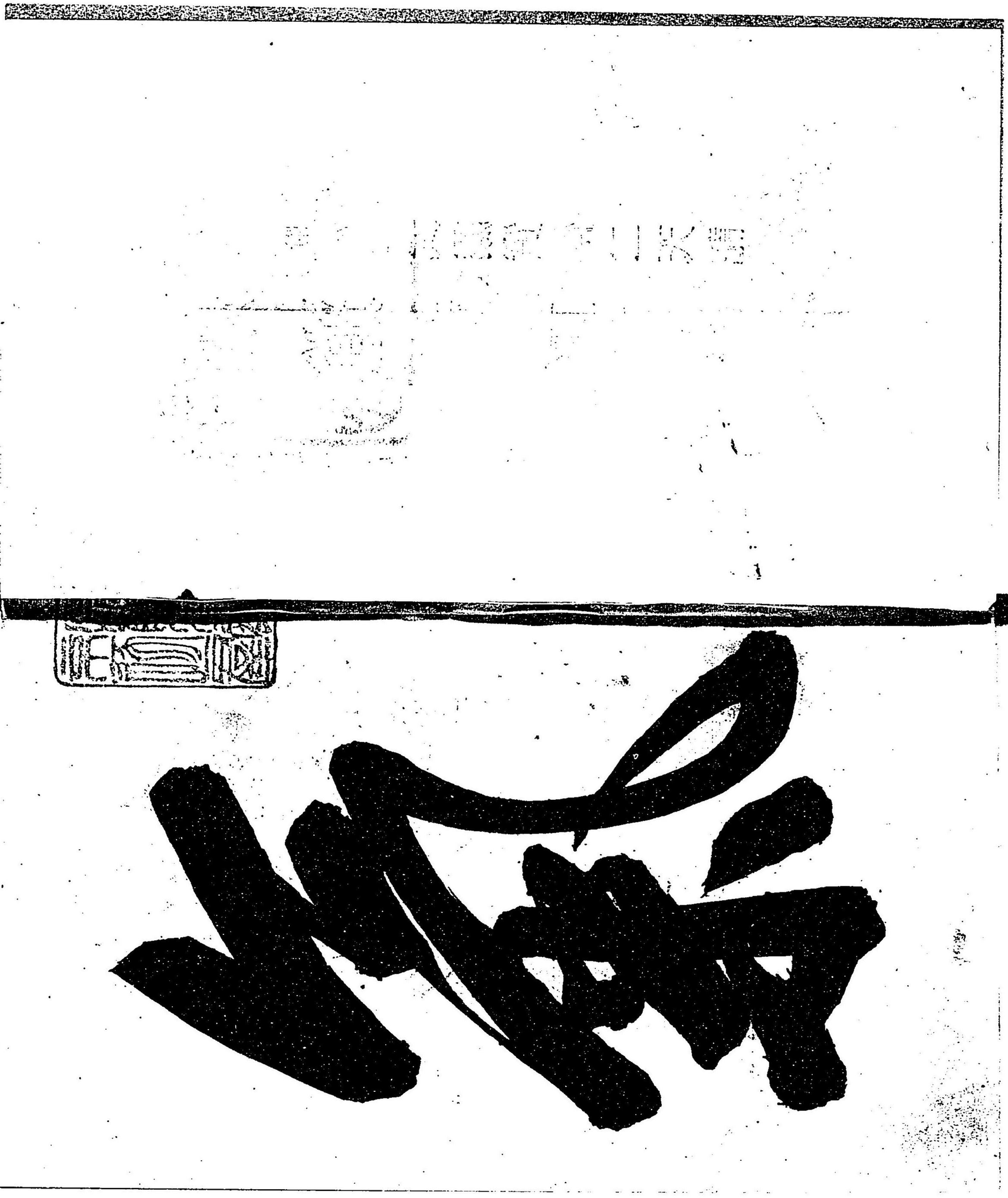
劍道秘要 全

附錄 武藏實傳二天記

宮本武藏著 範士 三橋鑑一郎註

武德誌發行所藏版

明治
42 9 28
內交



88-329

例言

一近來柔道に關する書の陸續刊行せらるゝに關はらず、劍道に關する書籍の出版極めて稀なるは何故なりや、是れには種々の原因あるべしと思はるゝが、就中其重なる理由は柔道家中には比較的少壯にして今日の新教育を受けたる人々多く、隨て是等の人が進んで自己が研究せる事柄を世に公にして、後進の誘掖に資せんとするも、今一つは柔道は劍道に比すれば稍單純にして之を文書に著はすこと劍道程困難ならざるべし、然るに劍道家中固より新教育を受けたる壯年者少なからずと云へども、所謂斯道の達人、一流の先輩に至りては大概老大家にして、是等の先生は自己が從來刻苦練修せる斯道の奥妙を容易に世に公にするを憚るの情あり、是は必ずしも其道の世間に偉はるゝを惜むの意にはあらざれども、斯道に忠實なるより其道を尊敬するの念厚く幾分之を神祕にするの感念あるは至極尤もなる事にして、輕々に世に吹聽せざる覺悟は寧ろ愼重の考へなるやも知るべからず、是等も劍道の書の出版多からざる一原因な

國會圖書館藏書

88-329

例言

一近來柔道に關する書の陸續刊行せらるゝに關はらず、劍道に關する書籍の出版極めて稀なるは何故なりや、是れには種々の原因あるべしと思はるゝが、就中其重なる理由は柔道家中には比較的少壯にして今日の新教育を受けたる人々多く、隨て是等の人が進んで自己が研究せる事柄を世に公にして、後進の誘掖に資せんとすると、今一つは柔道は劍道に比すれば稍單純にして之を文書に著はすこと劍道程困難ならざるにも由るべし、然るに劍道家中固より新教育を受けたる壯年者少なからずと云へども、所謂斯道の達人、一流の先輩に至りては大概老大家にして、是等の先生は自己が從來刻苦練修せる斯道の奥妙を容易に世に公にするを憚るの情あり、是は必ずしも其道の世間に傳はるを惜むの意にはあらざれども、斯道に忠實なるより其道を尊敬するの念厚く幾分之を神祕にするの感念あるは至極尤もなる事にして、輕々に世に吹聽せざる覺悟は寧ろ愼重の考へなるやも知るべからず、是等も劍道の書の出版多からざる一原因な

るべし、而して今一つは古來劍術の流派は之を柔道に比すれば、其數非常に多く、殆ど數百を以て數ふべく、現今盛に行はれつゝあるものにても、尚數十家を下らざる可し、而して其術も亦柔道よりは遙かに複雜なれば、之を文書に著はさんことは頗る困難にして容易に筆を着け難し、是等の事情よりして劍道に關する書は柔道に關するものよりも其出版多からざるもの歟、ヨシ其原因の孰れにあるにせよ、今日の如く廣く世に行はれつゝあるにも關はらず、斯道の研究上後進の參考に適當なりと思はるゝ著述の刊行乏しきは事實にて、甚だ遺憾の次第と云ふ可し、蓋し本書の出版は多少此欠乏を補ひ世の需用に應ぜんが爲めの微意に出たるなり

一劍道を學ぶの參考書として先づ本書を選びたるは、本書が有名なる宮本武藏先生の自著なるは勿論、其眞蹟は熊本の前田家に現存して極めて正確のものなると、且は其の記述するところ當に技術の上に付て叮嚀親切なるのみならず、能く根本的に斯道の妙境を述べ讀者をして能く技術の曲折を知ると同時に、劍道に就て直に本來の面目に接得せしむるに足るものあればなり

一諸家各々傳授書なるものあり、傳授書とは便ち其流派々々の奥義を口述せるものにして、云はゞ門弟子に傳授する時の箇條書樣のものなり、如何にも其門下の子弟に對して免許口述する箇條書としては其れにて可なるべきも、之を一般に世に公にし、斯道の研究に資せんとするには、條文の稍神秘的なると且は簡易に過ぐるを以て適切ならず、左れど諸家の傳授書は一面より見れば一種の信仰箇條とも云ふべきものにして、之を敷演講述して門人以外の何人にも知り易からしむる事は、以前に在りては甚だ爲すを憚かる事なりしなるべく、是亦從來劍道に關する著述の世間に多からざる一の理山と見るを得べし

一宮本武藏の如何なる人物なるかに就ては、本書を見れば自ら明瞭なるべし、劍道の妙は云ふに及ばず、其の終身婦女を近けず、士の一藝一能あるもの爭ふて　祿を侯伯に求むる時代に在りて、獨り超然として勢利の外に立ち、自ら獨行道一篇を著はして志を云ひ、晩年道を春山禪師に問うて得るところあり　跡を風月に托して半生を過したる如き、其の高風雅懷以て先生が單に一劍客者流に同じからざるものあるを知るべく、

隨て其の人物の如何を推想すべし

一本書の價値に就ては是は評論の範圍外なり、何となれば其は一に見る人の力量如何に由る事にして、連城の璧も凡眼には一箇の燕石と選ぶところ無ければなり、但本書が技術の曲折以外直に斯道の根元に溯りて、第一義諦の妙境を探り「誠心誠意」を以て道の至極と爲し「一心」を以て萬理に應ずるの活潑地を說き示したるは、何人も一讀首肯するところなるべし、蓋し先生の本領は必ずしも蠅頭蚊脚の末に在らざるに似たり

一本書の用語は二百年以前の當時の日用語を其まゝ用ゐたる處多く、今日の所謂言文一致體に稍々近き體裁とも見るべきものあり、故に今日の文法語格を以てしては、頗る解し難きもの多く間々文章を爲さゞるところあり、然れども先生は固より學者にもあらず、文章家にもあらず、又初めより字者らしく、文章家らしき考へを以て此書を書記したるに非ざる事は先生の自序によるも明かなり、本書論述の趣意は五十年の實驗上より得來りたる二刀一流の流義に就て、極めて平易率直に殆ど思ふまゝを筆に著はして二三の門人等に書き與へたるに過ぎざるものなれば、文法上の少なからざる誤謬欠點は此書の眞價と全く沒交渉なる事を知らざる可らず

一前項の如く本書は文法語格上の誤謬決して少からずと云へども、其を一々訂正せん乎、全然本書の體裁を一變して、今日の文章と同じ體裁のものと爲さゞる可らず、其れにては寧に本書の妙味を損するのみならず、却て先生が當時の俗語を交へ平易を主として言文一致體に書記したる本意にも違ふことゝなるが故に、一に原文に從ふて敢て漫りに更改せず、但「量」と「領」と、「理」と「利」と、「義」と「儀」との誤りの如き、或は「地形」を「地行」と書し「滄海」を「惣海」と書したる等の如き明白なる誤字は、見當るに隨て大概之を改めたりと云へども、尚遺漏多かるべし、總じて是等は必ずしも原文の誤りとは限るべからず、或は傳寫の際筆者偶然の誤字も必ず少なからざるべし

一原文は假名書き非常に多く、通讀の際困難を感すること少なからず、例せば「くうてんろうかく」の如き、「だうたうがらん」の如き是れなり、是等は「宮殿樓閣」「堂塔伽藍」の本字に改めたり、其他之に類するもの極めて多く「於」の如き原文は悉く「たいて」と假名書したるを今皆「於て」に改めたり、要するに通讀に不便のものに限り、大概本字

に改めたるも、尚原文のまゝになしたるもの甚だ多し

一凡そ書を讀むには自ら一種の讀書眼あるを要す、然らざれば之を讀むも尚讀まざるに同じ〳〵何等の効益なかるべし、所謂讀書眼とは他なし心の工夫是れなり、古人云ふ、目讀千篇は心讀一篇に如ずと、心讀とは工夫を云ふなり、書を讀むに尚も此の反省々察の工夫を缺かば初めより讀まざるに同じ、本書の如き亦然り、唯文字の末に泥み言句の間に拘々たらば二刀一流の精神は遂に得るところ無く、而して先生の本意も隨て徒爾に歸せんとす、豈惜しからずや、此書を見るもの宜敷反覆玩べし

明治四十二年九月

自序

兵法ノ道二天一流ト號シ數年鍛練ノ事初メテ書物ニ顯サント思フ、時寛永二十年十月上旬ノ頃九州肥後ノ地岩戸山ニ上リ天ヲ拜シ觀音ヲ禮シ佛前ニ向ヒ、生國播磨ノ武士新免武藏守藤原玄信歳ツモツテ六十、我若年ノ昔ヨリ兵法ノ道ニ心ヲカケ十三ニシテ初メテ勝負ヲ爲ス、其ノ間新當流有間喜兵衛ト云フ兵法者ニ打勝チ、十六歳ニシテ但馬國秋山ト云フ兵法者ニ打勝ツ、二十一歳ニシテ都ニ上リ天下ノ兵法者ニ會ヒ數度ノ勝負ヲ決スト雖モ勝利ヲ得ザルト云フコトナシ、其後國々所々ニ至リ諸流ノ兵法者ニ行逢ヒ六十餘度マテ勝負ヲナストイヘ共一度モ其利ヲ失ハズ、其程歳十三ヨリ二十八九マデノ事ナリ、我三十ヲ越テ過去ヲ思ヒ見ルニ兵法ニ至極シテ勝ニハ

アラズ、オノヅカラ道ノ器用有テ天理ヲハナレザル故カ、又ハ他法ノ兵法不足ナル所ニヤ、其後尚モ深キ道理ヲ得ント朝鍛夕練シテ見レバ自ラ兵法ノ道ニ合フ事我五十歳ノ頃ナリ、夫ヨリ以來ハ尋ヲ入ベキ道ナクシテ光陰ヲヲクル、兵法ノ理ニマカセテ諸藝諸能ノ道ヲ學ベバ萬事ニ於テ我ニ師匠ナシ、今此書ヲ作ルト云ヘ共佛法儒道ノ古語ヲモカラズ、軍記軍法ノ古キコトヲモ用ヒズ、此一流ノ見タテ實ノ心ヲ顯ス事天道ト觀世音ヲ鏡トシテ十月十日ノ夜寅ノ一天ニ筆ヲトヅテ書初ルモノ也

夫れより以下云々の一節宮本武藏先生の本領にして亦本書の主意此に外ならざるを見るべし。先生劍道の妙は實相圓滿にして圭角なく痕跡なく直に道の本體に歸着するを以て主と爲すに在り、道の本體とは他なし誠の一字なり、直の一字なり、唯此の一字は是れ本書の始中終を通じて一貫々通せる生命なり、五法、六道、三心、三構歸するところは誠の一字に外ならず、先生歳十二歳より眞劍の勝負を以て其名聲を知られ一生涯六十餘度の立合に遂に一度も敗を取らず、能く王侯の尊を屈し天下の豪傑を風靡して二刀一流の流風一世に振ひ、後代に傳ひ、今に至りて衰へざるものは獨り劍道の德のみならんや、元和偃武以來劍道の盛なること古今稀なるところなり、一流一派を立て門戸を張り子弟を敎授するもの天下到る處に其跡を絕たず而して其の術の妙を極めたるもの亦決して少なからず、飯篠長成齋の神陰流に於ける伊東友景入道の一刀流に於ける、塚原佐土の卜傳流に於ける、柳生宗矩の柳生流に於ける、皆斯道の先達、斯界の明星なり、其他支派末流の徒に至りては數ふるに遑あらず、然りと云へども其人去りて其名今に存するもの幾何ぞ、其名存するも其の名聲門流の盛にして在世の時と齊敷今に至りて衰へざる我武藏先生の如きもの果して幾人ありや、之に依て之を觀るに先生の德の能く今日の如くなる所以は獨り其の劍道の精妙古今に獨歩、天下に冠絕するのみならず、必ずや其の人品性行の大に普通の劍客者と異なるものあるに由らずんばあらず

本書の趣意は先生直に自己平生の學ぶところを以て丁寧反覆後進を誘液して斯道を傳へんとするに在るを以て、即ち文學の修飾を施さず、辭句の彫琢を用ゐざるは勿論、其の說〳〵ところも所謂る佛法儒道の古語をもからず、軍記軍法の古き事をも取らず、全〳〵先生自得の旨趣を陳ぶるに在り、此は自ら其由來を記して本書の亀も世に衒ひ、人に諛ふものに非ざることを明すなり

夫兵法ト云フ事武家ノ法ナリ、將タル者ハ取ワケ此法ヲ行ヒ卒タルモノモ此道ヲ知ベキ事ナリ、今世ノ中ニ兵法ノ道儘ニ辨ヘタリト云武士ナシ、先ヅ道トシテ世ニ顯ハレシルハ佛法トシテ人ヲ助クル道、又儒道トシテ文學ノ道、醫者ト云ヒテ諸病ヲ治スル道、歌ハ歌道者トシテ和歌ノ道ヲ教ヘ、或ハ數寄者弓術者、其他諸藝諸能マデモ思ヒ〳〵ニ稽古シ心々ニ好クモノナリ、兵法ノ道ニハ好ク人稀ナリ、先ツ武士ハ文武二道ト云フ二ツノ道ヲ嗜ムコト最モ肝要ナリ、大形武士ノ平常思フ心ヲ計ルニ武士ハ唯死スルト云道ヲタシナム事ト覺ル程ノ儀ナリ、死スル道ニ於テハ武士バカリニ限ラズ、出家ニテモ女ニテモ百姓以下ニ至ルマデ凡ソ義理ヲ知リ恥ヲ思ヒ、死スル處ト思ヒ切ル事ニハ其差別ナキモノナリ、武士ノ兵法ヲ行フ道ハ何事ニ於テモ人ニ優ルヽ所ヲ本トシテ或ハ一身ノ切合ニ勝ヲ、或ハ數人ノ戰ニ勝ヲ、主君ノ爲メ我身ノ爲メ名ヲ揚ケ身ヲ立ント思フベシ、是レ兵法ノ德ナリ、又世ノ中ニ兵法ノ道ヲ習フトモ實ノ時ノ役ニハ立ツマジキト思フ心有ベシ、其義ニ於テハ何時ニテモ役ニ立ツヤウニ稽古シ、萬事ニイタリ役ニ立ツヤウニ教フル事是兵法ノ實ノ道ナリ

正保二年五月十二日

新免宮本武藏玄信

二刀一流

劍道祕要

五輪之書

宮本武藏著

天日本武德會範士　三橋鑑一郎補註

地之卷

夫兵法ト云フ事武家ノ法タリ將タル者ハ取分ケ此法ヲ行ヒ卒タル者モ此法ヲ知ルベキ事ナリ、今世ノ中ニ兵法ノ道慥ニ辨ヘタルト云フ武士ナシ、先ヅ道ヲ顯ハシテアルハ佛法トシテ人ヲ助クル道、又儒道トシテ文ノ道ヲ糺シ醫者トシテ諸病ヲ治スル道、或ハ歌道者トシテ

和歌ノ道ヲ教ヘ或ハ數寄者弓法者、其外諸藝諸能マデモ思ヒ〳〵ニ稽古シ、心々ニ好クモノナリ、兵法ノ道ニハ好ク人マレナリ、先ヅ武士ハ文武二道ト云ヒテ二ツノ道ヲ嗜ム事是道也、縦ヒ此道不器用ナリトモ武士タルモノハ己レ々々ガ分際程ハ兵法ヲバ勤ムベキ事ナリ、大形武士ノ思フ心ヲ忖ルニ武ハ只死ヌルト云フ事ヲ覺ユル程ノ儀ナリ、死スル道ニ於テハ武士バカリニ限ラズ、出家ニテモ女ニテモ百姓以下ニ至ル迄義理ヲ思ヒ恥ヲ思ヒ死スルベキヲ思ヒ切ル事ハ其差別ナキモノナリ、武士ノ兵法ヲ行フ道ハ何事ニ於テモ人ニスグルヽ所ヲ本トシ、或ハ一身ノ切合ニ勝ヲ、或ハ數人ノ戰ニ勝ヲヽ主君ノ爲メ我身ノ爲メ、名ヲ揚ケ身ヲ立ントト思フ、是レ兵法ノ德ヲ以テナリ、又世ノ中ニ兵法ノ道ヲ習ヒテモ實ノ時ノ役ニハ立ツマジキト思フ心アルベシ、其儀ニ於テハ何時ニテモ役ニ立ヤウ稽古シ万事ニ至リ役ニ立ヤウニ教フ事、是兵法ノ實ノ道也、

一兵法ノ道ト云フ事

漢土和朝マデモ此道ヲ行フモノヲ兵法ノ達者ト云ヒ傳ヘタリ、武士トシテ此法ヲ學バズト云フ事アルベカラズ、近來兵法者ト稱シテ世ヲ渡ル者アリ是ハ劍術一通リノ事ナリ、近年常陸國鹿島香取ノ社人ドモ明神ノ傳ヘトシテ流々ヲ立テ國々ヲ廻リ人ニ傳ル事近キ頃ノ儀ナリ、古ヨリ十能六藝トアル内ニ利方ト云ヒテ藝ニワタルト云ヘ共既ニ利方ト云ヘバ劍術一通リニ限ルベカラズ、劍術一篇ノ利マデニテハ劍術モ知リガタシ、勿論兵ノ法ニハ叶ベカラズ(一)世ノ中ヲ見ルニ諸藝ヲ賣物ニシタテ我身ヲ賣物ノヤウニ思ヒ、諸道具ニ付テモ賣

（一）世ノ中ヲ見ルニ云云ノ一段ヨク〳〵注

意シテ見ルベシ藝道ナ寶物ニスルコト古今モ其人甚タ多シ歎ズベキノ至リナリ）

物ニコシヲユル心、花實ノ二ツニシテ花ヨリ實ノ少キ所ナリ、取分ケ此兵法ノ道ニ色ヲカザリ花ヲサカセ術ヲテヲヒテ或ハ一道場或ハ一道場ナド云テ此道ヲヲシヘ、又此道ヲ習フテ利ヲ得ント思フ事所謂ナマ兵法大疵ノ本トハ是ナルベシ、凡人ノ世ヲ渡ル事士農工商ト四ツノ道アリ、一ツニハ農ノ道、農民ハ色々ノ農具ヲ設ケ四季轉變ノ心得暇ナクシテ春秋ヲオクル事是農ノ道ナリ、二ツニハ商ノ道、酒ヲ造ルモノハ夫々ノ道具ヲ求メ其善惡ノ利ヲ得テ渡世ト爲スヽ何レモ其身々々ニカセギ其利ヲ以テ世ヲ渡ル事是商ノ道ナリ、三ツニハ士ノ道、武士ニ於テハ樣々ノ兵具ヲ拵ヲエ、一々兵具ノ德ヲ辨ヘタランコソ武士ナルベケレ、兵具ヲモ嗜マズ其具々々ノ利ヲモ覺エザル事武家ノタシナミノ淺キモノ歟、四ツニハ工ノ道、大工ノ道ニ於テハ種々樣々ノ道具ヲ拵ヲエ、其具々々ヲ能ツカヒ覺エ、規矩ヲ以テ其差圖ヲ糺シ、暇ナク其ワザヲヲシテ世ヲ渡ルナリ、是レ士農工商四ツノ道ナリ、今兵法ヲ大工ノ道ニタトヘテ云ヒ顯ハスナリ、大工ハ大イニタクミト書クナレバ兵法ノ道モ大イナル匠ミニ依テ大工ニ云ナゾラヘテ書キ顯ハスナリ、兵法ヲ學バント思ハヾ此書ヲ思案シテ師ハ針、弟子ハ糸トナツテ紹エズ稽古アルベキ事ナリ、

夫れ劍道は生死の道なり、劍は檢なり非違を防遏するを主とす、換言すれば劍は身を護るの具にして人を斬るの具にあらずと云へども、一身の危難を防ぎ我生命の全きを得んと欲すれば亦人を斬るの止むを得ざるに至るは勢ひの免れがたきところなり、之に於てか劍は身を護ると同時に他を斬るものなり、既に他を斬らんとするに於ては其事實に人の生死に關す、其の道たるや極めて眞面目ならざるべからざるは

勿論なり然るに世に所謂劍術者と稱するもの往々にして斯道を賣物にして專ら華技を衒ひ、或は色を飾り譽を求め技の巧拙を第二にして只管世に媚び利を貪らんことを欲するものあり、實に痛歎の至りにして是れ必ずしも今の世に限らず、既に遠く二百餘年前斯道の極めて盛なる時代卽ち武藏先生の時よりして此の如きの弊害ありたるなり、先生之を慨して此に深く之を戒しめ置かれたり

一兵法ノ道大工ニ喩ヘタル事

大將ハ大工ノ頭領トシテ天下ノ規矩(カヂ)ヲツキマヘ其國ノ規矩(カヂ)ヲ知ル事頭領ノ道ナリ、大工ノ頭領ハ堂塔伽藍ノ墨金(スミガヂ)ヲ覺エ宮殿樓閣ノ差圖ヲ知リ、人々ヲツカヒ家ヲ取建ルコト大工ノ頭領モ武家ノ頭領モ其義同ジコトナリ、家ヲ建ルニ木配リヲスル事直ニシテ節モナク見ツキノ宜キヲ表ノ柱トシ、少シ節有リトモ直ニツヨキヲ裏ノ柱トシ、縱ヒ少シ弱クトモ節ナキ木ノ見樣ヨキヲバ敷居鴨居戸障子トツレソレニツカヒ、節有リトモ歪(ユガ)ミタリトモツヨキ木ヲバ見分ケ能ク吟味シテ使用スルニ於テハ其家久シク崩レガタシ、又材木ノ內ニシテモ節多ク歪ミテ弱キヲバ足代トモナシ後ニハ薪木トモ爲スベキコトナリ、頭領ニ於テ大工ヲツカフ事其上中下ヲ知リ、或ハ床廻リ或ハ戸障子、或ハ敷居鴨居天井以下ソレ〳〵ニツカヒテ、惡キニハ根太ヲハヲセ尙惡キニハ楔ヲ削ヲセ、人ヲ見ソケテツカヘバ其捗行テ手ギワ善キモノナリ、捗行キ手ギワヨキト云所、モノゴトニ氣ヲユルサザルコト大勇ナリ、氣ノ上中下ヲ知ルコト、勇ミヲ付ルト云事、無體ヲ知ルト云フ事、斯樣ノコト共頭領ノ心持ニアル事ナリ、兵法ノ理亦斯ノゴトシ、

一兵法ノ道士卒タル者ノ事

士卒ハ恰モ大工ニシテ、手ヅカラ其道具ヲ磨ギ、イロ〳〵ノセメ道具ヲコシラヘ、大工ノハコニ入テ持ケ、頭領ノ云付ル所ニ從ヒテ柱虹梁ヲモ手斧ニテ削リ、床棚ヲモ鉋ニテ削リ、透シモノ彫リ物ヲモシテ能規矩(カネ)ヲ糺シ、スミ〳〵マデモ手ギワヨク仕立ル所大工ノ法ナリ、大工ノ業手ニカケテヨク仕覺ヱ、墨金(スミガネ)ヲヨク知レバ後ハ頭領トナル物ナリ、大工ノ嗜ミ宜キモノハ道具ヲヘ常ニ磨クコト肝要ナリ其道具ヲ取テ手棚、机、又ハ行灯、俎板、鍋ノ蓋マデモ達者ニスルノ業ナリ、士卒タルモノ亦此ノゴトクナリ、此道ヲ學バント思ハヾ書顯ス所ノ條々能ク心ニ入テ吟味アルベシ、

一此兵法ノ書五巻ニ仕立ツル事

五ツノ道ヲワカチ一巻々々ニシテワ火風空ノ五巻トシテ書顯スナリ、

第一地ノ巻　兵法ノ道ノ大體、我ガ一流ノ見立、剣術一通リニシテハ誠ノ道ヲ得ガタシ、大イナル所ヨリ小キ所ヲ知リ、淺キヨリ深キニ至ル直ナル道ノ地形ヲ引均スニヨッテ初ヲ地ノ巻ト云ヒ名付クナリ、

第二水ノ巻　水ヲ本トシテ心ヲ水ニナスナリ、水ハ方圓ノ器ニ從ヒ一滴トナリ滄海トナル、水ニ碧潭ノ色アリ、清キ所ヲ用ヰテ一流ノ事ヲ此巻ニ書顯スナリ、剣術一通リノ理定カニ見分ケ一人ノ敵ニ自由ニ勝トキハ世界ノ人ニ皆勝ツ所ナリ、一人ニ勝ト云フ心ハ千萬ノ敵ニモ同意ナリ、將タルモノ、兵法小サキヲ大ニナスコト尺ノ金ヲ（誰カ云フ剣ハ是一人ノ敵ト是レ剣ノ形ヲ知テ剣ノ意ヲ

以テ大佛ヲ建ルニ同ジ、ケ樣ノ儀コマヤカニハ書分ケガタシ一ヲ以テ萬ヲ知ルコト兵法ノ利ナリ、一流ノ事此水ノ卷ニ書シルスナリ、

（知ラザルノ過チナリ）

第三火ノ卷　此卷ニ戰ヒノ事ヲ書シルスナリ、火ハ風ニ隨テ大小トナリケヤケキ心有ニヨッテ合戰ノ道一人ト一人トノ戰ヒモ同ジ道ナリ、心ヲ大キクナシ意ヲ小サクナシテ能ク吟味シテ見ルベシ、大イナル所ハ見エ安シ、小キ所ハ見エガタシ、其仔細多人數ノ事ハ心一ツニテ變ル事早キニヨッテ小キ所ハ却テ知リ得ガタシ、能吟味アルベシ、此火ノ卷ノ一早キ間ノ事ナルニヨリテ日々ニ手馴レタル常ノコト、思ヒ心ノ替ラヌ所兵法ノ肝要ナリ、シカルニヨッテ戰ヒ勝負ノ所ヲ火ノ卷ニ書顯スナリ、

第四風ノ卷　此卷ヲ風ノ卷トシルスコト、我ガ一流ノ事ニハアラズ、世ノ中ノ兵法其流々ノ事ヲ書ノスル所ナリ、風ト云フニ於テハ昔ノ風今ノ風、其家々ノ風ナドアレバ世間ノ兵法其流々ノシワザヲ定カニ書顯ハス是風ノ卷ナリ、他ノ事ヲ能ク知ズシテハ自ノワキマヘ成ガタシ、日々ニ其道ヲツトムルヲ云フ共心背キテハ其身ハ善シト思フトモ直グ成ル所ヨリ見レバ實ノ道ニハアラズ、實ノ道ヲ究メザレバ始メ少シノ心ノ歪ミモ後ニハ大ニユガムモノナリ、物事ニ餘リタルハ足ラザルニ同ジ、ヨク吟味スベシ、他ノ兵法劍術バカリト世ニ思フコト尤ナリ、我兵法ノ利ワザニ於テハ各別ノ儀ナリ、世間ノ兵法ヲ知ラシメン爲ニ風ノ卷トシテ他流ノ事ヲ書顯スナリ、

第五空ノ卷　此卷空ヲ書顯スコト、既ニ空ト云フ時ハ何ヲカ奥ト云

ヒロト云ハン、道理ヲ得テハ道理ヲハナレ、兵法ノ道ニ自然ト自由有テ自然ト奇特ヲ得、時ニアヒテハ拍子ヲ知リ、オノヅカラ打、オノヅカラアタル事是皆空ノ道ナリ、自然ト實ノ道ニ入事ヲ空ノ巻ニシテ書トゞムルモノナリ、

凡そ地水火風空五法の事、一應兵法修行の順序を書き著はしたるものにして必ずしも固執すべきにあらず、先生の所謂「構へありて構へ無し」と云ふもの即ち斯道の奥義にして其の妙境に至りては實相即ち無相、無相即ち有相なれば恰も鏡花水月の如く、影あれども捕ふる能はず形あれども物に着かず、手に剣を忘れ剣も亦手を忘る、唯是れ圓滿玲瓏たる中天の明月のみあり皎々として空にかゝるを見る、一心の働くところ一人能く萬人に敵すれば、萬人亦以て一人と對すべし、苟も斯道を學ぶもの能く此意を得て二刀一流の極意に達すれば剣を使ふに於て思ひ半に過ぐるものあらん、去れども初心のものに在りては固より順序に依らざるべからず、山に登るに一歩を麓に投じ漸く上りて漸く高く、遂に絶頂に至りて初めて四望廣濶天地の大觀を極むることを得るが如く、道を學ぶの順序亦此の如きのみ、初めより心を高遠に馳せ偏に堂奥に入らんとして急ぐとも、門戸より入るにあらざれば敷居を越ゆがたし、敷居を越ゆれば何によりてか堂に進み奥に至ることを得んや、

一此一流二刀ト名クル事

二刀ト云出ス處武士ハ將卒トモニ直ニ二刀ヲ腰ニ付ル役ナリ、昔ハ太刀(ダチ)刀(カタナ)ト云フ、武士タルモノ、此兩刀ヲ持ツ事コマカニ書顯スニ及バズ、我朝ニ於テ知ルモシラヌモ腰ニ帶ル事武士ノ道ナリ、此二ツノ利ヲ知ラシメンタメニ二刀一流ト云ナリ、鑓長刀ヨリシテハ外ノ物ト云フテ武具ノ内ナリ、一流ノ道初心ノ者ニ於テ太刀刀兩手ニ持テ道ヲ志シ習フ事實ノ所ナリ、一命ヲ捨ル時ハ道具ヲ殘サズ役ニ立テズ腰ニ納メテ死スル事本意ニアルベカラス、

然ドモ兩手ニ物ヲ持ツ事左右トモニ自由ニハ叶ヒガタシ、太刀ヲ片手ニテ取リナラハセン爲ナリ、鑓長刀大道具ハ是非ニ及バズ、刀脇差ニ於テハイヅレモ片手ニテ持ツ道具ナリ、太刀ヲ兩手ニテ持ヲテアシキ事ハ第一馬上ニテ惡シ、カケ走ルトキ惡シ、沼、フケ、（「フケ」ハ深田ナリ）石原、險シキ道、人ゴミニ惡シ、左ニ弓鑓ヲ持ヲ其外何レノ道具ヲ持テモ皆片手ニテ太刀ヲ使フモノナレバ、兩手ニテ太刀ヲ構フルコト實ノ道ニアラズ、若シ片手ニテ打コロシガタキ時ハ兩手ニテモ打留ルベシ、手間ノ入ル事ニテモ有ルベカラズ、先ヅ片手ニテ太刀ヲ振リナラハセン爲ニ二刀トシテ太刀ヲ片手ニテ振リ覺ユル道ナリ、人毎ニ初テ取時ハ太刀重クシテ振リマハシガタキモノナレドモ、其ハ太刀ニ限ラズ萬初メテ取付ル時ハ弓モ彎キガタシ長刀モ振リガタシ、何レモ其道具々々ニ慣レテハ弓モ力ツヨクナリ、太刀モ振リツケヌレバ道ノ力ヲ得テフリヨクナル、太刀ノ道ト云フ事早ク振ルニアラズ、第二水ノ卷ニテ見ルベシ、太刀ハ廣キ所ニテフリ脇差ハセバキ所ニテフルコト先ヅ道ノ本意ナリ、此一流ニオイテハ長キニテモ勝ヲ短キニテモカツニ依テ太刀ノ寸ヲ定メズ、何ニテモ勝事ヲ得ル心一流ノ道ナリ、太刀一ツ持タルヨリモ二ツ持テ善キ所、多勢ト一人シテ戰フ時、又取リ籠リ者ナドノ時ニヨキコトアリ、ケ樣ノ儀今委シク書顯スニ及バズ一ヲ以テ萬ヲシルベシ、兵法ノ道行ヒ得テハ一ツモ見エズト云フ事ナシ、ヨク〳〵吟味有ベキナリ、

一兵法二刀ノ利ヲ知ル事

此道ニ於テ太刀ヲフリ得タル者ヲ兵法者ト世ニ言傳ヘタリ、武藝ノ

道ニ於テ弓ヲ能ク射レバ射手ト云ヒ、鑓ヲ遣ヒ得テハ鑓遣ヒト云ヒ、鐵砲ヲ得タル者ハ鐵砲打ト云フ、然ルニ於テハ太刀ノ道ヲ覺エタル者ヲ太刀遣ヒ、脇差遣ヒト云ハンコトナリ、弓鐵砲鑓長刀皆是武家ノ道具ナレバ何レモ兵法ノ道ナリ、然レドモ太刀ヨリシテ兵法ト云事道理ナリ、太刀ノ德ヨリシテ世ヲ治メ身ヲ治ムル事ナレバ太刀ハ兵法ノ起ル處ナリ、太刀ノ德ヲ得テハ一人シテ十人ニ必ズ勝ツ事ナリ、一人ニシテ十人ニ勝タバ百人ニシテ千人ニ勝ヲ、千人ニシテ萬人ニ勝ツ、然ルニヨッテ我ガ一流ノ兵法ハ一人モ萬人モ同ジ事ニシテ武士ノ法ヲ殘ラズ兵法ト云所以ナリ、道ニ於テ儒者佛者數寄者亂舞者、是等ノ事ハ武士ノ道ニテハナシ、其道ニアラズト云フ共道ヲ廣ク知レバ物毎ニ出アフテ通ゼザル事ナク、何レモ人間ニオイテ我道ヲ能研ク事肝要ナリ、

一兵法ニ武具ノ利ヲ知ルト云フ事

武具ノ利ヲワキマユルニ何レノ道具ニテモ折ニフレ時ニシタガヒ役ニ立ツモノナリ、脇差ハ坐ノセマキ所、敵ノ身側ニヨリテ其利多シ、太刀ハ何レノ所ニテモ大カタ其ノ利アリ、長刀ハ戰場ニテハ鑓ニヲトル心アリ、刀ハ先手ナリ長刀ハ後手ナリ、同ジ位ノマナビニシテハ刀ハ少シツヨシ、鑓長刀モ場處ニヨリ詰リタル所ニテハ其利少シ、取籠リ者ナドニモ然ルベカラズ、只戰場ノ道具ナルベシ、合戰ノ場ニシテハ肝要ノ道具ナリ、去レドモ唯坐敷ニテノ利ヲ覺エ細ヤカニ思ヒ實ノ道ヲ忘ルヽニ於テハ役ニ立ヌガタカルベシ、弓ハ合戰ノ場ニテカケヒキニモ出合ヒ、鑓ワキ其外物キワ〳〵ニテ早ク取合スル

モノナレバ野合ノ合戦ナドニ取分ケ宜キモノナリ、當世ニ於テハ弓ハ申スニ不及、諸藝花多クシテ實スクナシ、サヤウノ藝能ハ肝要ノ時役ニ立ガタシ、其利少ナシ、城廓ノ内ニシテハ鐵砲ニシクコトナシ、野合ナドニテモ合戦ノハジマラヌ内ニハ其利多シ、戦既ニ始マリテハ不足ナルベシ、弓ノ一ツノ徳ハ放ツ矢人ノ目ニ見エテ吉シ、鐵砲ノ玉ハ目ニ見エザル處不足ナリ、此儀能ク吟味アル可キコトナリ、馬ノ事強クコタヘテ癖ナキ事肝要ナリ、總テ武具ニ付テハ馬モ大カタニアリキ、刀脇差モ大カタニ切レ、鑓長刀モ大カタニトホリ、弓鐵砲モ強クソコ子ザルヤウニ有ベシ、道具以下ニモ片分ケテ好ク事アルベカラズ、（刀ナレバ弓ト唯一ツノ道具チノミ片ヨリテ好ムベカラズトノ意ナリ）餘リタルコトハ足ヌト同ジ事ナリ、人眞似ヲセズトモ我身ニシタガヒ武道具ハ手合ウヤウニ有ベシ、將卒トモニ物ニ好キ、物ヲ嫌フコトアシ、、工夫肝要ナリ、

凡そ武具の大小長短は何れも一長一短ありて、必ずしも長きを善しとも短きを悪しとも定めがたし、而して其の利害得失は武具其物に在りと云はんより寧ろ之を使ふ人に在りと云ふ方適當なるべし、何となれば人には身體の大小と力の強弱とあれば、屈強の體格にして力の強き人は其れに應じて武具も長大なるを使ふに自由なるべく、之に反して丈高からず力も弱き人は武具も隨て長大ならざるものを使用すべき道理なればなり、而して力の強弱と身體の大小の外に技術上より習ひ得たる得意不得意もあるべし、其は屈強の人にして好んで小太刀を用ふるもあるべく、又餘り強からざる人にして好んで大劍長鎗を使ふ人もあるべし、要は其人々の好みに應じて用ふるこそ自然の道理なるべきを以て、初より何尺何寸など一定せんとするは總て僻事と知るべきなり、武藏先生の如きは此理を以て、武具は常に其場合を見て使ふが故に毫も一定せるもの無きが如し、譬へば場處

の狭隘なる時は短かきものを用ゐ、廣さところは長きものを持ち、又敵多人數なる時は兩刀を揮ひ、一人々々の時は或は手頃の棒など有合せのものを手當り次第に用ゐたるが如し、要するに武具の大小長短は一に手に合ひ身に應じたるこそ善けれ、是れ先生の劍道が物に拘はらず枘子定規に陷らず、一に心の妙用を主とする所以なり、

一兵法ノ拍子ノ事

物毎ニツキ拍子ハ有モノナレドモ取分ケ兵法ノ拍子鍛練ナクテハ及ビガタキ所ナリ、世ノ中ノ拍子人目ニ能ク顯ハレテ有ル事亂舞ノ道、伶人管弦ノ拍子ナド是ミナ能クアフ所ノ拍子ナリ、武藝ノ道弓ヲ射鐵砲ヲハナシ馬ニ乘ル事マデモ拍子調子ハアリ、諸藝諸能ニ至テモ拍子ヲ背クコトハ有ルベカラズ、又空成ル事ニ於テモ拍子ハアリ、武士ノ身ノ上ニシテ奉公ニ身ヲ仕上ル拍子、仕下ル拍子、ハズノアフ拍子（ハズハ皆ニテ氣合ノ合フコトナリ）ハズノナガフ拍子アリ、或ハ商賣ノ道分限ニ成ル拍子、分限ニテモ其絶ル拍子、道々ニ付テ皆拍子ノ相違アル事ナリ、物毎ニサカユル拍子、衰フル拍子等ヨク〳〵分別スベシ、兵法ノ拍子ニ於テ樣々アルコトナリ、先ヅ合フ拍子ヲ知テ違ウ拍子ヲワキマヘ、大小遲速ノ拍子ノ中ニモ當ル拍子ヲ知リ、間ノ拍子ヲ知リ、背ク拍子ヲワキマヘズシテハ兵法確カナラザル事ナリ、兵法ノ戰ニ其敵々ノ拍子ヲ知リ、敵ノ思ヒヨラザル拍子ヲ以テ勝ツ所ナリ、何レノ卷ニモ拍子ノ事ヲ專ラ書シルスナリ、其書付ノ吟味ヲシテ能ク鍛練アルベキモノナリ、

拍子と云ふ事は劍道に取りて極めて大切の詞なり、拍子とは今日にて云ふ機會の事なり、卽ちはずみの事なり、何事にても物の機會はあるものなり、事を爲すに此の

機會に乘じはずみに付込みて爲せば爲しやすきが如く、劍道にては殊に此の拍子即ち機會を知りて機に乘ずる事肝要なり、武藏先生の爲すところを見るに何時にても此機會を心掛けられたる如し、例へば洛北に於て吉岡又七郎の多勢と戰ひたる時の如き、先きに清十郎傳七郎と戰ひたる時は先生期に遲れて至り、敵の待くたびれたる處に不意に斬込んで勝を制し、又七郎の時は約束の時刻より早く至りて我より敵を待ち受け、敵の前に遲れたるを思ふて油斷して居る處を、闇中より突出して先づ其の膽を奪ひて一擧に勝利を博せるなど、又後に佐々木岸流と勝負を決したる時も、巧みに敵を怒らして唯一擊の下に勝利を得たるなど、今より思ふに皆先生が機會を利用しはずみを打たるものと云ふべし、而して此の機會は獨り自然と來る場合もあるべしと云へども、先生は多く自ら此の機會を造り出す事に心を用ゐられたるものなり、今の劍道を學ばんものも此理を知ると知らざるとは技術の上に於て大なる損得あるべし、能く〳〵考ふきべ事なり、

右一流ノ兵法ノ道、朝ナ〳〵夕ナ〳〵勤メ行フニヨリテ自ラ廣キ心ニナリテ、多分一分ノ兵法トシテ世ニ傳ルトコロ初テ書キ顯ス事、

地水火風空是レ五卷ナリ、我兵法ヲ學バント思フ人ハ道ヲ行フ法アリ、第一ニヨコシマナキコトヲ思フ、第二ニ道ヲ鍛練スル處、第三ニ諸藝ニサワルトコロ、第四ニ諸職ノ道ヲ知ルコト、第五ニ物事ノ損得ヲワキマユル事、第六ニ諸事目キヽヲシ覺ユル事、第七ニ目ニ見エヌ處ヲサトル事、第八ニ僅カナル事ニモ氣ヲ付ル事、第九ニ役ニ立ヌコトヲセザル事、大カタ此ノ如キ理ヲ心ニカケテ兵法ノ道鍛練スベキナリ、此道ニ限テ直ナル處ヲ廣ク見立ザレバ兵法ノ達者トハナリガタシ、此法ヲマナビ得テハ一身ニシテ二十三十ノ敵ニモ負ベキ道ニアラズ、先ヅ氣ニ兵法ヲ絶ヤサズ直ナル道ヲ勤メテハ手ニ

テモ打勝ヶ、日ニ見ル事モ人ニ勝ヶ、又鍛練ヲ以テ惣體自由ナレバ身ニテモ人ニ勝ヶ、又此道ニ慣レタル心ナレバ心ヲ以テモ人ニ勝ツ、道ヲ學ビテ此ニ至ル時ハ如何ニシテモ人ニ負クルコトアル可ラズ、又大キナル兵法ニシテハ善人ヲ持事ニ勝ヶ、人數ヲツカフ事ニ勝ヶ、身ヲ正シク行フ道ニ勝ヶ、國ヲ治ムル事ニ勝ヶ、民ヲ養ナフ事ニ勝ヶ、世ノ禮法ヲ行ナフニ勝ツ、何レノ道ニ於テモ人ニ負ケザル所ヲ知リテ身ヲ助ケ名ヲ助クルトコロ是レ兵法ノ道ナリ、

以上は五法中の地の巻なり、地は一切萬事萬物を載せて能く雨露浸潤の德を以て成育を遂げしむるものなり、凡そ劍道を學ばん程のもの先づ此の巻の意を能く心得なば其他は自から手に入り心に解くべし、第一には誠心誠意を專らとすべき事なり、

即ち書中先生の所謂「第一ニヨコシマ無キコトヲ思フ」とは是れなり、元來兵は奇道なれば時により處に隨ひ計略を以て敵を陷れ若くば勝を取ること必ずしも惡からずといへども、其の計略なるものも兵法上の計略にして、苟も士として心に愧づるが如き卑怯陋劣なる振舞ひある事は斷じて許さゞる處なり、稽古を爲すにも正々堂々堂敵に勝つ事を心掛けずして、初めより相手をだます、すかす、いつはる等の惡策詐謀をのみ用ゐんとするは尤も不可なる事なり、彼の碁を圍むものに付て見るに、初めより定石を守り定法によりて一歩一石敵を攻むれば勝を期せずして自然と勝つものなるに、若し定石によらず突飛なる無理を敷き定石にあらざる石を下し、相手の眼を眩まして奇利を博し奇功を奏せんと思へば、何時の間にやら自分の手許空虛となりて、敵を破らん破らんと思ふ中に却て敵に破らるゝものなり、劍道の理亦此の如し肝心の本心を忘れて手の先や竹刀の先を以て小刀細工的に相手をぺてんにかけんとするが如きは武士道の上より云ふも頗る不都合の次第にて、決して兵法の道理に叶ふものと云ふべからず、

水之巻

兵法二天一流ノ心、水ヲ本トシテ利方ノ法ヲ行フニヨリ之ヲ水ノ巻トシテ一流ノ太刀筋此書ニ書顯スモノナリ、此道何レモ細ヤカニ心ノ儘ニハ書分ガタシ、假令ニ詞ハ續カズト云トモ理ハ自カラ聞ユベシ、此書ニ書ツケタル處一コト〳〵ニ一字々々ニシテ思案スベシ、大カタニ思ヒテハ道ノ違フ事多カルベシ、兵法ノ理ニオイテ一人ト一人トノ勝負ノヤウニ書付タル所ナリ共、萬人ト萬人トノ合戰ノ理ニ心得大イニ見立ルトコロ肝要ナリ、此道ニ限ツテ少シナリトモ道ヲ見違ヘ道ノ迷ヒアリテハ惡道ニオツル者ナリ、此書付バカリヲ見テハ兵法ノ道ニ及ビ難シ、此書ニ書付タルヲ我身ニ取リテノ書付ト心

得、見ルト思ハズ習フト思ハズ、贋物ニセズシテ卽ヤ我劍ヨリ見出シタル理ニシテ常ニ其身ニナリテ能々工夫スベシ、

劍は一人の敵とは古來よく云ふ處なれども是は唯其物のみに付て云ふ事也、如何にも一人は千人に敵すべからず、千人は萬人に敵すべからずと云へども、是は畢竟極端の說のみ、劍道は決して一人の敵にはあらず、古人も一心以て萬法に應ずべしと云へり、苟も此心を以て劍を學ばゞ一人の敵は能く千萬人の敵と稱するも不可なし、魏の文盛は一人にて敵の大兵を追ひ退ぞけ、張飛は當陽の長板坡にて唯一騎能く曹瞞の大軍を喰止めたり、我朝にても楠正成は數百の兵を以て東軍の五十萬を防ぎ、曾て一度も敗を取らざる例あり、文盛も張飛も若敵兵一度にかゝらば勿論免るゝ事あるべからざるは明白の道理なれども、唯一人に遮ぎられて進んで一度にかゝらざる所是れ文盛張飛が一心膽力の然らしむるところ、能く敵兵を壓伏するに依る、劍道も亦此の如く、一心の誠を鍛ひ、斯道の妙境に至れば眼中元より一も無く十も無く、

百千萬も無く、一身是れ膽、一劍是れ萬丈の鐵壁たるべし、去れば古哲も苟も浩然の氣を養へば天下に敵なしと云へるは此心なり、

一兵法心持ノ事

（是等ノ語能ク〳〵心得ヘテ反覆玩味シテ味フベシ）

兵法ノ道ニオイテ心ノ持樣ハ常ノ心ニカハル事ナカレ、常ニモ兵法ノ時ニモ少モカハラズシテ心ヲ廣ク直ニシ、キツクヒッパラズ少モタルマズ、心ノカタヨヲヌヤウニ心ヲ直中ニ置テ心ヲ靜ニユルガセテ、其ユルギノ刹那モユルギヤマヌヤウニ能々吟味スベシ、靜ナルトキモ心ハ靜カナラズ、如何ニ疾キ時モ心ハ少モハヤカラズ、心ハ體ニツレズ體ハ心ニツレズ、心ニ用心シテ身ニハ用心ヲセズ、心ノ足ラヌコトナクシテ心ヲ少シモ餘ラセズ、上ノ心ハヨワクトモ底ノ心ヲツヨク、心ヲ人ニ見分ケラレザルヤウニシテ小身ナルモノハ心ニ大イ成事ヲ殘ラズ知リ、大身ナルモノハ心ニ小キコトヲヨク知リテ、大身モ小身モ心ヲ直ニシテ我身ノ量ヲ辨ヘ、心ノウチ濁ラズ廣クシテヒロキ處ヘ智惠ヲ置ベキナリ、智惠モ心モヒタト研クコト專ラナリ、智惠ヲ磨ギ天下ノ理非ヲワキマヘ、物事ノ善惡ヲ知リ、萬ノ藝能其ノ道ニワタリ、世間ノ人ニ少シモダマサレザル樣ニシテ後兵法ノ智惠成ルナリ、兵法ノ智惠ニ於テ取分ケガフ事アル物ナリ、戰ノ場萬事セワシキ時ナリトモ兵法ノ道理ヲ極メ動キナキ心能々吟味スベシ、

禪家に不動心の語あり、其は讀で字の如く心の動かざる事なり、世人多く心を動かさずと云ふ、然れども是は未だその妙境に至らざるが故なり、心を動かすまじと思ふ心やがて動かすなり、兵法の妙は動かさずにあらずして動かざるなり、同じ事のや

うなれども天地霄壤の相違と心得べし、宮本先生の本意二刀一流の至極全く此の一節に在り、先づ心の持やうを云ふて「常ノ心ニ變ル事無シ」と云ふもの一語斯道の骨髄を喝破せり、多くの劍術者は劍を取て敵に對する時は大概常の心と變はるものなり、其は第一負けまじと思ひ、第二勝たんと思ひ、第三遁れ功名を爲さんと思ひ、第四衆人より譽められんと思ふなど平常の心持とは大に違ふなり、斯る心得にては到底斯道の奥妙には至り難し、斯く心の變はるは卽ち心の動くにて未熟の證據なり

然らば動かずと云ふて恰も頑石の如く少も活動せざるかと云ふに是れ大に然らず、心若し石の如く動かずんば果して何の役をか爲さんや、八面應酬とて八方に應じて活動し、右と云へば右、左と云へば左、上下四方に轉じて自由自在に動くこそ心の働きなり、故に動かずと云ふ事は頑石の如く土塊の如く働き無しと云ふ意にてはなし、平たく云へば轉倒せぬ事なり、更に分るやうに云へば如何なる場合にも周章ず、騒かず、悠々として餘裕あることなり、譬へば尚水の如し、水は平日風無き時は湛然として平靜に鏡の如くなれども、一朝風起りて水面を撲たんか、千波萬波洶湧澎湃として奔馬の如く活動止まざるなり、是れ水の水たる所以なり、古語には之を不動なるが故に動ならざる事無しとも、又無相なるが故に相ならざる事無しとも、或は實相卽無相、動卽不動とも、又た動に卽して不動あり、實相に卽して無相ありとも云へり「靜カナル時モ心ハ靜カナラズ如何ニ疾キ時モ心ハ少シモ疾カラズ」と先生の云はれたるは全く此の事なり、而して此の動卽不動、實相卽無相の妙境に至る事は唯一の誠のみ、心のまことなり、「心ヲ直中ニ置テ」と云ふもの此意を示すなり學者宜敷熟讀玩味して斯道の妙諦を覺るべし、

一兵法ノ身ナリノ事

身ノナリ、顔ハ俯(ウツ)ムカズ、仰ガズ、傾カズ、ヒズマズ、(ヒズムトハユガムコトナリ故ニヒズマズハユガマヌナリ)目ヲ見出サズ、額ニ皺ヲヨセテ目ノ玉ノ動カザルヤウニシテ、瞬キヲセズ、眉間ニ皺ヲヨセテ目ヲ少シスクメルヤウニシテウラヤカ

ニ見ル顔、鼻スジ直ニシテ、少シ頤(オトガヒ)ヲ出ス心ナリ、首ハ後ロノ筋ヲ直ニ頸(クビ)ニ力ヲ入テ兩ノ肩ヲサゲ、脊筋ヲロクニ(ロクハ正立ナリ)尻ヲイダサズ、膝ヨリ足ノ先マデ力ヲ入テ、腰ノ屈マザル樣ニ腹ヲハリ、楔ヲシムルト云テ脇差ノ鞘ニ腹ヲ持タセ、帶ノクツロガザルヤウニ爲ス可シト云フ教ヘアリ、總テ兵法ノ身ニオイテ、常ノ身ヲ兵法ノ身トシ兵法ノ身ヲ常ノ身トスルコト肝要ナリ、ヨク〳〵吟味スベシ、

一兵法ノ眼付ト云フ事

眼ノ付ケ樣ハ大キニ廣ク付ルナリ、觀見ノ二ツアリ、觀ノ目ツヨク、見ノ目ヨワク、遠キ所ヲ近ク見、近キ所ヲ遠ク見ルコト兵法ノ專ナリ、敵ノ太刀ヲ知リ、卿カ敵ノ太刀ヲ見ズト云事兵法ノ大事ナリ、工夫アルベシ、此眼付小サキ兵法ニモ大ナル兵法ニモ同ジ事ナリ、目ノ玉動カズシテ兩脇ヲ見ルコト肝要ナリ、ケ樣ノ事急ガシキ時俄ニワキマヘガタシ、此書付ヲ覺エ常住此眼付ニナリテ、何事ニモ眼付ノカハラザル處能々吟味有ベキモノナリ

一太刀ノ持樣ノ事（△太刀ハ如何ニシテ持ツ乎）

太刀ノ取樣ハ大ユビ人サシユビヲ浮ケル心ニモチ、丈高指ハシメズユルマズ、藥指小指ニテ十分シムル心ニシテ持ナリ、手ノ內ニハクツロギノ有ル事アシ、、太刀ヲ持ト云テ持タル心バカリニテハ惡シ敵ヲ切物ナリト思ヒテ太刀ヲ取ベシ、敵ヲ切時モ手ノ內ニ變リナク、手ノ悚(スク)マザルヤウニ持ベシ、若シ敵ノ太刀ヲハル事、受ル事、アタル事、オサユル事アリトモ、大ユビ人サシ指バカリヲ少シ變フル心ニテ兎ニモ角ニモ切ト思ヒテ太刀ヲ取ベシ、試(タメ)シモノナド切時ノ手

ノ内モ兵法ニテ切時ノ手ノ内モ、人ヲ切ルト云手ノ内ニ變ル事ナシ、總ジテ太刀ニテモ手ニテモイツクト云事ヲ嫌フ、イツクハ死ル手ナリ、イツカザルハ生ル手ナリ（イツクハ居付クニテ固着シテ働キナキノ意ナリ）、能ク心付ベキモノ也

（△足ノ運ビヤウ如何）

一足ヅカヒノ事

足ノハコビヤウノ事ハ爪先ヲ少シウケテ踵（キビス）ヲ強クフムベシ、足ノ使ヒヤウ時ニヨリテ大小遲速ハアリトモ常ニアユムガ如シ、足ニ飛足、浮足、フミスユル足（足ノ固着チ然フナリ）トテ是三ツ嫌フ足ナリ、此道ノ大事ニ陰陽ノ足ト云フコトアリ是レ肝要ナリ、陰陽ノ足トハ片足バカリ動カサヌ物ナリ、キル時、引時、受ル時マデモ陰陽トテ右左〳〵トフムト足ナリ、返ス〳〵片足フムコトアルベカラズ、能々吟味スベキモノナリ

（△五方ノ構ヘトハ何ゾヤ）

一五方ノ構ノ事

五方ノ構（カマヘ）ハ上段中段下段、右ノ脇ニ構ル事、左ノ脇ニ構ユル事是レ五方ナリ、滿五ツニ分ツト云ヘドモ皆人ヲ切ラン爲メナリ、身ノ構ヘ五ツヨリ外ハナシ、何レノ構ヘナリトモ構フルト思ハズシテ切ル事ナリト思フベシ、構ノ大小ハコトニヨリ利ニシタガフベシ、上中下ハ體ノカマヘナリ、兩脇ハユウ（ユウハ用ナリ、働キノコトナリ）ノ構ナリ、左右ノ構ハ上ノツマリテ脇一方ツマリタル所ナドノ構ヘナリ、右左ハ所ニヨリテ分別有リ、此道ノ大事ニ曰ク構ヘノキワマリハ中段ト心得ベシ、中段ハ構ヘノ本意ナリ、兵法大キニシテ見ヨ、中段ハ大將ノ坐ナリ、大將ニツイデハ後四段ノ構ナリ、能ク吟味スベシ

（△太刀ハ）

一太刀ノ道ト云フ事

太刀ノ道ヲ知ルト云ハ常ニ我差ス刀ヲ指ニツニテ振ルトキモ、道筋ヨク知リテハ自由ニ振ルモノナリ、太刀ヲ早ク振ラントスルニヨッテ太刀ノ道逆フテ振リガタシ、太刀ハフリ能キ程ニ靜ニフル心ナリ、或ハ扇或ハ小刀ナド使フヤウニ早ク振ラント思フト惡シ、其レハ小刀キザミト云フテ人ノ切レザルモノナリ、太刀ヲ提ゲテハアゲヨキ道ヘ上ゲ、横ニフリテハ横ニモドリヨキ道ヘモドシ、如何ニモ大キニ肱ヲ延ベテ強クフルコト是太刀ノ道ナリ、我ガ兵法ノ五ツノ表ヲ遣ヒ覺ユレバ太刀ノ道定リテ振リヨキ所ナリ、能々鍛練スベシ

（△五ツノ表使ヒ分ケノ事　第一中段ノ構）

一五ツノ表第一ノ次第ノ事

第一ノ構ハ中段ナリ、太刀先ヲ敵ノ顔ニ付テ敵ニ行逢フ時、敵ノ太刀打カクル時右ヘ太刀ヲハヅシテ乘リ、又敵打カヽル時切先返シニテ打オトシタル太刀其ノマヽ、オキ、又敵ノ打カヽル時下ヨリ敵ノ手ハル是レ第一ナリ、總別此五ツノ表書付バカリニテハ合點ナリガタシ、五ツノ表ノ分ハ手ニ取テ太刀ノ道ヲモ知リ、刀筋ニテ我太刀ノ道ヲモ知リ、如何ヤウニモ敵ノ打太刀知ルヽトコロナリ、二刀ノ太刀ノ構ヘ五ツヨリ外ニアラズトスル所ナリ、吟味スベキナリ

（第二上段ノ構）

一表第二ノ次第ノ事

第二ノ太刀ハ上段ニ構ヘ、敵打カクル所一度ニ敵ヲ打ナリ、敵ヲ打ハヅシタル太刀其マヽ置テ、又敵ノウツ所ヲ下ヨリ掬ヒ上ゲテ打、今一ツウツモ同ジ事ナリ、此表ノ内ニ於テハ樣々ノ心持、イロ〳〵ノ拍子、此表ノ内ヲ以テ一流ノ鍛練ヲスレバ、五ツノ太刀ノ道コマヤ

カニ知テ如何ヤウニモ勝ツトコロ有リ、稽古スベキナリ

三十八

第三下段ノ構

一表第三ノ次第ノ事

第三ノ構、太刀ヲ下段ニ持ヤ提(ヒッ)サゲタル心ニテ敵ノ打カクル所ヲ下ヨリ手ヲ張ルナリ、手ヲ張ル處ヲ又敵其ノ張ル太刀ヲ打落サントスル所ヲ越ス拍子ニテ、敵打タル後ニノ腕ヲ横ニ切ル心ナリ、下段ニテ敵ノ打所ヲ一度ニ打トムル事ナリ、下段ノ構ヘヲ遅ブニ早キ時モ遲キ時モ出合フモノナリ、太刀ヲ取テ鍛練アルベキナリ

第四左脇ノ構

一表第四ノ次第ノ事

第四ノ構、左ノ脇ニ横ニ構ヘテ敵ノ打カクル手ヲ下ヨリ張ルベシ、下ヨリ張ルヲ敵打落サントスル其ノ手ヲ張ル心ニテ、ソノ儘太刀ヲ受ケ我ガ肩ノ上ヨリ筋カヒニ切ルベシ、是太刀ノ道ナリ、又敵ノ打カカル時モ太刀ノ道ヲウケテ勝ツナリ、能ク吟味アルベシ

第五右脇ノ構

一表第五ノ次第ノ事

第五ノ次第太刀ノ構ヘ、我右ノ脇ニ横ニ構ヘテ敵打カヽル所ノ位ヲ受ケ、我太刀下ノ横ヨリ筋カヒニ上段ニ振上ゲ上ヨリ直ニ切ベシ、是モ太刀ノ道能クシラシメンタメナリ、此表ニテ振ツケヌレバ(フリ颪ルレバナリ)重キ太刀モ自由ニフヲルヽナリ、此五ノ表ニ於テ細カニ書付ルコト能ハズ、我家ノ太刀一通リノ道ヲ知リ、又大形拍子ヲモ覺エ、敵ノ太刀ヲ見分ル事、先此五ツニテ不斷手ヲカラス(カラスハ熟練スルナリ)處ナリ、敵ト戰フ中ニモ此太刀筋ヲカラシテ敵ノ心ヲ受ケ、イロ〳〵ノ拍子ニテ如何ヤウニモ勝ツ所ナリ、能々分別スベシ

△有構無構

一有構無構ノ教ヘノ事

三十九

有構無構ト云フハ元來太刀ヲ構フルトイフ事アルベキ事ニアラズ、然ドモ五方ニ置事アレバ構ヘトモ成ベシ、太刀ハ敵ノ縁ニヨリ所ニヨリ形氣ニ隨ヒ、何レノ方ニオキタリトモ其敵切ヨキ樣ニ持心ナリ、上段モ時ニ從ヒ少シ下ル心ナレバ中段トナリ、中段モヲリニヨリ少シ上レバ上段トナル、下段モ折ニフレ少シ上レバ中段トナル、兩脇ノカマヘモ位ニヨリ少シ中ヘ出セバ中段下段トモナル心ナリ、然ルニヨツテ構ハアリテ構ハナキトイフ理ナリ、先ヅ太刀ヲ取テハ何レニシテナリトモ敵ヲ切ト云フ心ナリ、若シ敵ノキル太刀ヲ受ル、張ル當ル、ネバル、サハルナド云フ事アレドモミナ敵ヲ切ル縁ナリト心得ベシ、受ルト思ヒ、張ルト思ヒ、當ルト思ヒ、ネバルト思ヒ、サハルト思フニヨツテ切ル事不足ナルベシ、何事モ切ル縁ト思フ事肝要ナリ、能々吟味スベシ、兵法大キニシテ人數立ト云フモ皆合戰ニ勝ツ緣ナリ、能々工夫スベシ

是れ亦前に見えたる實相無相の意なり、凡そ劍道に限らず心一方に固着して自由の境を缺く時は其妙に至り難きものなり、左れば太刀の構へと云ふも是れ畢竟一應の事なり、上段も少しく下れば中段となるなるべく、中段も少し下れば下段となる、共の上中下の段は一に敵の模樣如何によりて活動するものなれば、變化縱橫應用無碍なるもの卽ち劍道の要なり、詰るところは相手を斃すに在り、彼と云ひ是と云ふも敵に勝んための用意に外ならざれば、一概に法に拘泥すべからずと云へども同時に亦法を捨つべからず

一敵ヲ打ニ一拍子ノ打ノ事

敵ヲ打拍子ニ一拍子ト云ヒテ敵ニアタル程ノ位ヲ得テ、敵ノワキマヘヌ内ニ心ニ得テ我身モウゴカサズ、心モ付ズ、如何ニモ早ク直ニ打

拍子ナリ、敵ノ太刀ヒカン、ハヅサン、ウタント思フ心ノナキ内ヲ打拍子是レ一拍子ナリ、此拍子能ク習ヒ得テ間ノ拍子ヲ早ク打事鍛練スベシ

此一拍子に打と云ふ事剣道の要訣と知るべし、一拍子とは平たく云へば唯一撃に當の敵を斃すを云ふ、所謂電光石火の一瞬間に目的を達するなり、獅子の獣を撲つや全力を雙の前足に籠め、飛躍一番唯一撃にして斃すを常とす、先生の最も得意とするところは此に在り、其の岸流と立合ひ吉岡と戦ひ又有間喜兵衛と勝負を決するを見るに、何れの場合も數合打合ひたる事曾て無く、何時も初度の一刀に勝敗を決するなり、其の早術實に目にも止まらぬ位ゐなるが、是れ先生の一拍子の術より得來りたるものなり、何事によらず事に臨みて逡巡するは男子の屑しとせざる所、況や剣道は生死の境ひなれば固より尋常遊戯の事にあらず、我勝つか然らざれば負けざるべからず、生くるか死するかの間に在り、何の遑ありて悠々緩々たるを得んや、一身の力を一時に籠め、吐嗟の一喝に一刀兩斷の目的を達するを肝要と爲すなり

一二ノ越シノ拍子ノ事

二ノ越ノ拍子、我打タントスルトキ敵早ク引キ、早ク張リ退ルヤウナル時ハ、我打ツト見セテ敵ノ張手タルム處ヲ打ツ、是二ノ越ノ打ナリ、此書付バカリニテハ中々打得ガタカルベシ、教ヘ受ケテハ忽チ合點ノユク處ナリ

△無念無想ノ打

一無念無想ノ打ト云フ事

○想ノ打

敵モ打出サントシ我モ打出サントス思フ時、身モ打身ニナリ心モ打心ニナツテ、手ハ何時トナク空（クウ）ニナリ、唯心ノ命ズルマヽ、知ラズ知ラズ打事、是レ無念無想トテ一大事ノ折ナリ、此打度々出合フ打ナリ、能々習ヒ得テ鍛練有ベキ儀ナリ

一流水ノ打ト云フ事

流水ノ打ト云フハ敵合ニナリテ競(セリ)合フ時、敵早クヒカン、早クハヅサン、早ク太刀ヲハリノケントスル時、我身モ心モ大キニナッテ、太刀ヲ我身ノ後ヨリ如何程モユルく〳〵トヨドミノ有ヤウニ大キニツヨク打事ナリ、此打習ヒ得テハ惶ニ打ヨキモノナリ、敵ノ位ヲ見分ルコト肝要ナリ

一縁ノアタリト云フ事

我打出ス時敵打留メン、ハリノケントスル時、我打一ツニシテアタヲヲモ打ヲ、手ヲモ打、足ヲモ打ッ、太刀ノ道一ツヲ以テ何レナリトモ打所是縁ノ打ナリ、此打能ク打ナラフベシ、何時モ出合フ打ナリ、細ク打合テ分別アルベキ事ナリ

一石火ノ當リト云フ事

石火ノ當リハ敵ノ太刀ト我太刀ト着合ウホドニテ、我太刀少シモ上ゲズシテ如何ニモ強ク打ナリ、是ハ足モツヨク、身モツヨク、手モツヨク、三所ヲモツテ早ク打ベキナリ、此打度々打習ハズシテハ打ガタシ、ヨク〳〵鍛練スレバツヨク當ルモノナリ

一紅葉ノ打ト云フ事

紅葉ノ打、敵ノ太刀ヲ打落シ太刀トリハナス心ナリ、敵前ニ太刀ヲ構ヘ、打ン、ハラン、受ケント思フ時、我打心ハ無念無想ノ打ニテモ又石火ノ打ニテモ、敵ノ太刀ヲ打ナツヨク打ナ、其儘後ヲハネル心ニテ切先下リニ打テバ敵ノ太刀必落ルモノナリ、此打鍛練スレバ打オトスコトヤスシ、能々稽古アルベシ

一太刀ニ代ハル身ト云フ事

身ニ代ハル太刀トモ云ベシ、總テ敵ヲ打ニ太刀モ身モ一度ニハ打ザルモノナリ、敵ノ打ツ縁ニヨリ身ヲバ先ニ打身ニナリ、太刀ハ身ニ介意（カヾ）ワズ打トコロナリ、若クハ身ハ搖（ユ）ルガズ太刀ニテ打事アレドモ、大カタハ身ヲ先ヘ打ヶ太刀ヲ後ヨリ打モノナリ、ヨク〳〵吟味シテ打習フベシ

一打ト當ルト云フ事

打ト云フ事當ルト云フ事二ツナリ、打ト云フ心ハ何レノ打ニテモ重ク受テ愷ニ打ナリ、當ルハ行當ル程ノ心ニテ強ク當リ忽ヶ敵ノ死スル程ニテモ是ハアタルナリ、打ト云フハ心得テ打トコロナリ、吟味スベシ、敵ノ手ニテモ足ニテモ當ルト云フハ先ヅ當ルナリ、當リテ

後ヲ強ク打ン爲メナリ、當ルハサヲル程ノ心、能ク習ヒ得テハ各別ノ事ナリ、工夫スベシ

一シユウコウノ身ト云フ事

即ヶ秋猴（シウコウ）ノ身ナリ、秋猴ノ身トハ、手ヲイダサヌ心ナリ、敵ヘ入身ニナリテ少シモ手ヲ出サヌ心ナリ、敵ノ打前身ヲ早ク入ル心ナリ、手ヲ出サムト思ヘバ必ズ身ハ遠クノクモノナルニヨツテ、總身ヲ早クウツリ入ル心ナリ、手ニテ受合ヒスル程ノ間ニハ身モ入ヤスキモノナリ、能々吟味スベシ

一シツカウノ入身ト云フ事

漆膠ナリ、此ノ入身ハ敵ノ身ニ我身能クツキテハナレヌ心ナリ、敵ノ身ニ入ル時カシラヲモ付、身ヲモ付、足ヲモ付、ツヨク付ク所ナリ

人毎ニ顔足ハハヤク入レドモ身ノ退クモノナリ、敵ノ身ヘ我身ヲヨクツケ、少シモ身ノ間ノナキヤウニ着クモノナリ、能々吟味有ベシ

一タケクラベト云フ事

タケクラベハ丈(タケ)クラベナリ、身ノ丈ヲ比ブル心ナリ、敵ヘ入コム時、我身ノ縮(チヾ)マザルヤウニシテ足ヲモノベ、腰ヲモノベ、頭ヲモノベテ強クイル、敵ノ顔ト顔トナラベ、身ノタケヲクラブルニ比ベカツト思フ程ニ丈高クナツテツヨク入ルトコロ肝要ナリ、能々工夫アルベシ

一子バリヲカクルト云フ事

粘(チバリ)ヲカクルナリ、敵モ打カケ我モ太刀ヲ打カクルニ、敵受クル時我太刀敵ノ太刀ニ付テ子バル心ニシテ入也、子バルハ我太刀敵ノ太刀ト離レガタキ心、餘リ強クナキ心ニ入ベシ、敵ノ太刀ニ付テ子バリヲカ

ケ入ル時ハ、イカホド靜ニ入テモ苦シカラズ、ネバルト云フ事ト、モツル丶ト云フ事、ネバルハツヨシ、モツル丶ハヨワシ、此事分別アルベシ

一身ノアタリト云フ事

身ノアタリハ敵ノキワヘ入込テ身ニテ敵ニアタル心ナリ、少シ我顔ヲソバメ、我左ノ肩ヲ出シ敵ノム子ニアタルナリ、我身ヲイカホドモツヨクアタル事、行合フ拍子ニテハズム心ニ入ベシ、此入ル事入リ習ヒ得テハ敵二間モ三間モハネノクルホド強キモノナリ、敵死入ルホドモアタルナリ、ヨク〳〵鍛練アルベシ

一三ツノ受ケノ事

三ツノ受ケト云フハ敵ヘ入込時、敵ノ打出ス太刀ヲ受ルニ我太刀ニ

テ敵ノ目ヲ突クヤウニシテ、敵ノ太刀ヲ我右ノカタヘ引ナガシテ受ル事、又ツキ受ト云フテ敵打太刀ヲ敵ノ右ノ目ヲ突クヤウニシテ首(クビ)ヲハサム心ニツキカケテ受ル處、又敵ノ打時ミジカキ太刀ニテ入ルニ、受ル太刀ハサノミカマハズ、我左ノ手ニテ敵ノツラヲ突クヤウニシテ入込ム、是三ツノ受ナリ、左ノ手ヲニギリテ拳子(コブシ)ニテ面(ツラ)ヲ突クヤウニ思フベシ、ヨク〳〵鍛練有ベキ者ナリ

一オモテヲサスト云フ事

オモテハ面ナリ、面ヲサスト云ハ、敵ト立合ヒナリテ敵ノ太刀ト我太刀ノ間ニ敵ノ顔ヲ我太刀先ニテツク心ナリ、敵ノ顔ヲツク心アレバ敵ノ身乗ル者ナリ、敵ヲ乗ラスルヤウニスレバイロ〳〵勝ツ所ノ利アリ、能々工夫スベシ、戦ノウチニ敵ノ身乗ル心アリテハ早ヤ勝ツ所ナリ、ソレニ依テ面ヲサスト云フ事忘ルベカラズ、兵法稽古ノウチニ此理鍛練アルベキモノナリ

一心ヲサスト云フ事

心ヲサスト云フハ戦ノウチニ、上ツマリ脇ツマリタル所ナドニテ切ル事入ルコトモ成ガタキ時、敵ヲツク事敵ノ打太刀ヲハズス心ハ、我太刀ノムネヲ直ニ敵ニ見セテ、太刀先ユガマザルヤウニ引取ツテ敵ノムネヲツク事ナリ、若シ我クタビレタル時カ、又刀ノキレザル時ナドニ此儀専ラ用ヰル心ナリ、能々分別スベシ

一喝咄ト云フ事

喝咄ト云フハ何レモ我打カケ敵ヲ追込ム時、敵マタ打カヘスヤウナル時、下ヨリ敵ヲ突クヤウニヒ上ゲテ返ヘシニテ打事、何レモ早キ拍

子ヲ以テ喝咄ト打、喝トツキアゲ咄ト打心ナリ、此拍子何時モ打合ノウチニハ專ヲ出合フ事ナリ、喝咄ノ仕様、切先アグル心ニテ敵ヲ突クト思ヒアグルト一度ニ打拍子、ヨク〳〵稽古シテ吟味アルベキ事ナリ

一ハリ受ト云フ事

ハリ受ト云フハ敵ト打合時トタン〳〵ト云フ拍子ニナルニ、敵ノ打所ヲ我太刀ニテハリ合セ打ナリ、ハリ合スル心ハサノミキツクハルニアラズ、又受ルニアラズ、敵ノ打太刀ニ應ジテ打太刀ヲハリテ、ハルヨリハヤク敵ヲ打ツ事ナリ、ハルニテ先ヲトリ、打ニテ先ヲトル所肝要ナリ、ハル拍子能ク合ヘバ敵何ト強ク打テモ、少シハル心アレバ太刀先モ落ルコトニアラズ、ヨク習ヒ得テ吟味アルベシ

一多敵ノ位ノ事

多敵ノクラヰト云フハ一身ニシテ多勢トタヽカフ時ノ事ナリ、我ガ刀脇差ヲヌキテ左右ヘヒロク太刀ヲ横ニ捨テ構ユルナリ、敵ハ四方ヨリカヽルトモ一方ヘ追ヒ廻ス心ナリ、敵カヽル位ヰ前後ヲ見分テ先ヘ進ムモノニハヤク行合ヒ、大キニ目ヲツケテ敵打出ス位ヲ得テ、右ノ太刀モ左ノ太刀モ一度ニフリナガヘテ、行ク太刀ニテ前ノ敵ヲ切リ、戻ル太刀ニテ脇ニスヽムル敵ヲ切ル心ナリ、太刀ヲフリナガヘテマツコト惡シ、早ク兩脇ノ位ニ構ヘ敵ノ出タル所ヲツヨク切込ミ追ヒクヅシテ、其儘又タ敵ノ出タル方ヘカヽリフリクヅス心ナリ、

如何ニモシテ敵ヲヒトヘニウヲツナギニ追ヒナス心ニシカケテ（ウヲツナギハ魚ツナギノ意ナリト知ルベシ）敵ノ重ナルヲ見テハ其マヽ間ヲスカサズツヨク拂ヒ込ム

△一身大敵ト戰フハ如何ニシテ宜敷カ

ベシ、敵アヒコム所ヘハシヌレバ捗行キガタシ、又敵ノ出ルカタ〳〵ト思ヘバ待ツ心アリテハカユキガタシ、敵ノ拍子ヲ受テクヅル、處ヲ知リテ勝ツ事ナリ、ヲリ〳〵アヒテヲアマタヨセ追込ミツケテ其心ヲ得レバ一人ノ敵モ十人二十人ノ敵モ心ヤスキ事ナリ

、能稽古シテ吟味アルベキナリ

凡そ剣を以て一人の敵とし、唯一人と相對のみの術ならば何ぞ貴ぶに足らん一人を以て萬人の衆に敵する事は理論としては兎に角、實際にはあり得べからざる事なり、左れば腕に千鈞を擧げ、武力を以ては萬軍の上に秀でたりし項羽の勇も、遂に韓信が十面埋伏の爲めには力盡き術窮して烏江の露と消えたり、去れば一剣を以て千萬人に敵せん事は事實叶ふべくもあらずと云へ共、唯一人のみを相手とするの術ならば頗る物足らざるなり、セメテは十人百人の敵には當り得る丈の手段を取らざる可らず、岩見十太郎は一人にして能く數十人の敵を斃して復讐の目的を達し、先生は一人にて吉岡の數十人を相手として、何の苦も無く勝利を得たり、之に由て見るに、縦令千萬人には敵せずとも、能く剣道に熟して、一念不動の妙境に至れば、十人百人の敵に向はん事は、少も恐るゝ事ある可らず、而も其れには其れだけの術無るべからず、血氣の勇にはやり、無考へにて敵中に飛込みなば、所詮勝利は覺束なし、是れ先生が、特に此の一節の説明を煩はされたる所以なり、讀者能く心を用ゐて、此の文意を研究せば、大に得るところあるべし

又曰く、小勢を以て大敵に當るの法、一人も千人も同じ事なり、上杉謙信は能く此手段を活用せるものと云ふべし、謙信、八千の手兵を提げて、關八州を蹂躙するや、電馳奔撃恰も猛虎の群羊を驅るが如し、一人として面を向くるものあらず、而して常に此の小勢を以て、北條、武田の數萬の大軍と戰ひ一度も敗を取らず、其の兵法他なし、全力を一方に集注して、先づ敵の一角を斬崩し、勢ひに乗じて追廻はし、更に敵の混亂に付入り、吐嗟の間に、遂に全軍を敗るに在り、此法此に云ふところと符合せ

り「二人ノ敵モ十人二十人ノ敵モ心ヤスキ」と云ふもの認言にあらざるを知るべし

一打アヒノ利ノ事

此打合ノ利ト云フ事ニテ兵法太刀ニテノ勝利ヲワキマユル所ナリ

コマヤカニ書シルシガタシ、ヨク稽古アツテ勝ツ所ヲシルベキモノナリ、大カタ兵法ノ實ノ道ヲ現ハス太刀ナリ、口傳アリ

一一ツノ打ト云フ事

此一ツノ打ト云フ心ヲ以テ惱ニ勝ツ所ヲ得ル事ナリ、兵法ヨクマナバザレバ心得ガタシ、此儀能鍛練スレバ兵法ノ心ノ自由ニナツテ思ウマヽニ勝ツ道ナリ、ヨク〳〵稽古スベシ

一直通ノ位トイフ事

直通ノ心ニ刀一流ノ實ノ道ヲ受テ傳ユル所ナリ、能々鍛練シテ此兵法ニ身ヲナス事肝要ナリ、口傳アリ

右書付ル所一流ノ劍術大形此巻ニ記シ置ク事ナリ、兵法太刀ヲ取テ人ニ勝ツ所ヲ覺ユルハ先ツ五ツノ表ヲ以テ五法ノ構ヲ知リ、太刀ノ道ヲ覺エテ總體ヤワラカニナリ心ノキヽ、出テ道ノ拍子ヲシリ、自然ト太刀モ手サヘテ身モ足モ心ノ儘ニホドケタル時ニ隨ヒ、一人ニ勝ヶ一人ニ勝ヶ、兵法ノ善惡ヲ知ル程ニ成リ、此一書ノウチヲ一ヶ條一ヶ條ト稽古シテ敵ト戰ヒ次第々々ニ道ノ利ヲ得テ、絶エズ心ニカケ急ゞ心ナクシテ折々手ニフレテハ德ヲ覺エ、何レノ人トモ打アヒ、其心ヲ知テ千里ノ道モ一足ツヽ、ハコブナリ、ユル〳〵ト思ヒ此ノ法ヲ行フ事武士ノ役ナリト心得テ、今日ハ昨日ノ我ニ勝ヶ、アスハ下手ニ勝ヶ、後ハ上手ニ勝ツト思ヒ、此書物ノゴトクニシテ少モ脇ノ道ヘ

心ノユカザルヤウニ思ウベシ、縦令何程ノ敵ニ打勝テモ習ヒニソムクコトニ於テハ誠ノ道ニハ有ベカヲズ、此理心ニ浮ミテハ一身ヲ以テ數十人ニモ勝ツ心ノワキマヘ有ベシ、然ル上ハ劍術ノ智力ニテ大分一分ノ兵法ヲモ得道スベシ、千日ノ稽古ヲ鍛トシ萬日ノ稽古ヲ練トス、能ク〳〵吟味アルベキモノナリ

凡そ是等の文意を玩味して、武藏先生の人物を想ひ見るべし、其の云ふところ、諄諄として、俗に云ふ、嚙んで哺めるが如し

思ふに、先生十二三歳の時より、劍道に意を寄せ、五十餘歳に至る迄、天下を周遊して道を求め業を研き、尚心に飽たらざるところあり、心歳と共に熟して圓滿温厚、所謂其人温然として玉の如くなりたるもの歟、況や心に期するところあり、肥の岩戸山に籠りて、神佛の加被を念じ、以て此の書を著はして後世に傳ふ、其意毫も名利を求むるにあらず、名聞を貪るにあらず、誠心誠意、斯道の爲めに範を後代に垂れ、道を天下に弘めんとするに外ならず、故に、初めより文章修辭に意なく、恰も門弟子に對して、口傳面授すると同じく、諄々として倦まず、實に親切丁寧を極めたり

二刀一流の極意は、五法の中、此の一節水の卷に盡きたり、而して肝要は、亦此の一節に在り「惣體柔カナル心ノキヘ、出テ道ノ拍子ヲ知リ自然ト手モサヘ〳〵」云々と云ひ「假令何程ノ敵ニ勝ツトモ習ヒニ背クコトニ於テハ誠ノ道ニ有ラズ」と云ふ如きは以て一流の本意、何れの邊に在るかを知るべし、水は平靜にして、變化無きに似たれども、一朝風あれば千波萬波隨て起り、高低起伏變化計るべからざるが如し、是れ水の德なり、五法の中、第一地の卷に於て、大體の土臺を築きたる上は、此の水の卷に於て縱横變化の理を盡し、一劍以て萬變に應ずるの術を研究すべし、而して其根本は誠の一字に在り、直の一字に在り、學者枝末に拘はりて、肝心の根本を忘るべからず

○火ノ卷

二刀一流ノ兵法、戰ノ事ヲ火ニ思ヒ取テ戰フ、勝負ノ事ヲ火ノ卷トシ

テ此巻ニ書顯スナリ、先ヅ世間ノ人毎ニ兵法ノ理ヲ小サク思ヒナシテ、或ハ指先ニテ手首五寸三寸ノ利ヲシリ、或ハ扇ヲ取テ肱ヨリ先ノ先、後ノ勝ヲ辨ヘ、又ハ竹刀ナドニテ僅カノ早キ利ヲ覺エ、手ヲキカセ習ヒ、足ヲキカセ習ヒ少シノ利ノ早キ所ヲ專ラトスル事ナリ、我兵法ニ於テ數度ノ勝負ニ一命ヲカケテ打合ヒ、生死二ツノ理ヲ分ケ刀ノ道ヲ覺エ、敵ノ打太刀ノ強弱ヲ知リ、刀ノ刃胸ノ道ヲワキマヘ、敵ヲ打果ス所ノ鍛練ヲ得ルニ、小サキ事弱キ事思ヒヨラザル所ナリ、コトニ六具固メテナドノ利ニ小サキ事思ヒ出ルコトニアラズ、サレバ命ヲハカリノ打アヒニ於テ一人シテ五人十人トモ戰ヒ、其勝ツ道ヲタシカニミルコト我道ノ兵法ナリ、然ルニヨッテ一人シテ十人ニカヘ、千人ヲ以テ萬人ニ勝ツ道理何ノ差別アランヤ、ヨク〳〵吟味アルベシ、去ナガラ常々ノ稽古ノトキ千人萬人ヲアツメテ此道爲習フ事ナル事ニアラズ、獨リ太刀ヲトッテモ其敵々ノ智略ヲハカリ、敵ノ強弱手タテヲ知リ、兵法ノ智德ヲ以テ萬人ニ勝ツ所ヲ極メ、此道ノ達者トナリ、我兵法ノ直道世界ニ於テ誰カ得ン、又ハ何レカ極メムト慥ニ思ヒ取テ、朝鍛夕練シテ研キヲホセテ後獨リ自由ヲ得、オノヅカラ奇特ヲ得、通力不思議有ルトコロ是レ兵トシテ法ヲ行フ息ナリ

一場ノ次第ト云フ事

場ノ位ヲ見分クル所、場ニオイテ日ヲ負ウト云フ事有リ、日ヲ後方ニナシテ構フルナリ、若シ所ニヨリ日ヲ後方ニスルコトナラザルトキハ、右ノ脇ヘ日ヲナスヤウニスベシ、座敷ニテモアカリヲウシロ

右脇トナスコト同前ナリ、後方（ウシロ）ノ場ツマラザルヤウニ左ノ場ナクツロゲ、右ノ脇ノ場ヲナツメテ構ヘタキ事ナリ、夜ニテモ敵ノ見ユル所ニテハ、火ヲ後方ニ負ヒ、アカリヲ右脇ニスルコト同前ト心得テ構ユベキモノナリ、敵ヲ瞰下（ミオロ）スト云フテ少シモ高キ所ニカマユル様ニ心得ベシ、座敷ニテハ上座ヲ高キ所ト思フベシ、扨戦ニナリテ敵ヲ追マワスコト我左ノ方ヘ追廻ス心、難所ヲ敵ノ後ロ（ウシロ）ニサセ、何レニテモ難所ヘ追掛ルコト肝要ナリ、難所ニテ敵ニ場ヲ見セズト云ヒテ、敵ニ顔ヲフラセズ油断ナクセリツムル心ナリ、座敷ニテモ敷居、鴨居、戸障子、椽ナド、又柱ナドノ方ヘ追詰ムルニテモ、場ヲ見セズト云フコト同前ナリ、何レモ敵ヲ追カクル方足場ノワルキ所、又ハ脇ニ構ヒノ有ル所、何レモ場ノ得ヲ用ヰテ、場ノ勝ヲウルトイフ心専ニシテ、能ク〳〵吟味シテ鍛練アルベキモノナリ、

兵法ノ道ヲ行フモノハ、常ニ其道ニ心ヲツケテ、座敷ニ居テモ其座ノ損得ヲ知リ、座ノ道具ニ付ケテモ其利ヲ得、又外面ニテモ山ヲ見テハ其山ノ利ヲ知リ、川ヲ見テハ其徳ヲ覚エ、沼フケ（フケハ深田ノコトナリ）マデモ兵法ノ利ヲ受ル心肝要ナリ

△機先ヲ制スルハ兵家ノ要缺ナリ

一三ツノ先ト云フ事

三ツノ先、一ツハ我方ヨリ敵ヘ掛ル先、之ヲケン（懸ナリ）ノ先ト云フナリ、一ツハ我モカヽリ敵モカヽリ合フ時ノ先、是ハタイ（待ナリ）ノ先ト云フナリ、又一ツハ敵ヨリ我方ニカヽル時ノ先、體々ノ先ト云フ是三ツノ先ナリ、何レノ戦初メニモ此三ツノ先ヨリ外ハナシ、先ノ次第ヲ以テハヤ勝事ヲ得ルモノナレバ、先ト云フ事兵法ノ第一

ナリ、此先ノ仔細様々アリトイヘドモ、其時ノ理ヲ利トシ、敵ノ心ヲ見、我兵法ノ智恵ヲ以テ勝事ナレバ、細ヤカニ書分ル事ニアラズ、第一懸ノ先、我カヽラントト思フ時静ニシテ居リ、俄カニ早クカヽル先、上ヲ強ク早クシ、底ヲノコス心ノ先、又我心ヲ如何ニ強クシテモ足ハ常ノ足ニ少シ早ク敵ノキワヘ寄ルト早ク揉ミ立ツル先、又心ヲハナツテ、初中後同ジ事ニ敵ヲ挫ク心ニテ、底マデツヨキ心ニ勝、是レ何レモ懸ノ先ナリ

第二待ノ先、敵我方ヘカヽリクル時、少モ介意ズ弱キヤウニ見セテ、敵ヲカクナリテツント強クハナレテ飛ツクヤウニ見セテ、敵ノタルミヲ見テ、直ニツヨク勝ツ事、コレ一ツノ先、又敵カヽリ来ル時、我モナホ強クナツテ出ル時、敵ノカヽハル拍子ノカハル間ヲ受ケ、ソノマヽ勝ヲ得ル事是待ノ先ノ利ナリ

第三體々ノ先、敵早クカヽルニハ我静ニツヨクカヽリ、敵近クナリテツント思ヒ切ル身ニシテ敵ノ餘裕ノ見ユル時、直ニツヨク勝ツ、又敵静ニカヽル時、我身浮キヤカニ少シ早クカヽリテ、敵近クナリテ一揉ミ揉ミ、敵ノ色ニシタガヒ、強ク勝ツ事是體々ノ先ナリ、此儀コマカニ書分ケガタシ、此書付ヲ以テ大略工夫アルベシ、此三ツノ先、時ニシタガヒ理ニシタガヒ、何時ニテモ我方ヨリカヽル事ニハアラザレドモ、同ジクハ我方ヨリ計リテ敵ヲ廻ハシタキ事ナリ、イヅレモ先ノ事兵法ノ智力ヲ以テ勝ツ事ヲ得ル心、ヨク〳〵鍛練アルベシ

本書中、先を取ること、先をかくる事に付て處々に説かれたり、是れ兵法の肝要にして、先生の最も意を用ゐられたるところなり、凡そ兵法に限らず、先を取ると甚だ

大切なり、之を碁に譬へんに、上手は常に先を取るなり、一目にても先を取る時は其一目終局迄付きまとふて、如何にしても離れざるなり、下手は先を取ること能はずして敗るゝものなり、殊に剣道に於ては、先を取ること極めて必要なるが、其先をかくるとは、詰り機先を制することなり、古人も先んずる時は人を制し、後るゝ時は人に制せらる、と云へるは全く此の道理なり、武蔵先生の勝負を決するを見るに、常に機先を制して勝を取るが如し、吉岡との戦ひと云ひ、岸流との試合と云ひ、何れも此の先をかけたるなり、而して其の先のかけ工合に付ては、本書に委敷陳べ顕はされたる通りなれば、能〳〵研究すべき事なり、先を取らんと思へば、我心一方に固着して居りては、到底働くべからず、故に我本心は常に、泰然自若として冷静に、能く心眼を以て敵の動静を見、苟も機の乗ずべき際あらば、少しも猶豫せず、電光石火の如く、吐嗟に打込むなり、古人の所謂、能く動くものは能く静かに、能く静かなるものは能く動くの眞理を悟了すべきなり、謙信、秀吉の兵を用ふる、多く此法に據れり、以て

一枕ヲオサユルト云フ事

枕ヲオサユルトハ、頭ヲアゲサセズト云心ナリ、兵法勝負ノ道ニ限ツテ人ニ我身ヲマワサシテ跡ニツク事悪シ、イカニモシテ敵ヲ自由ニマワシタキ事ナリ、然ルニヨツテ敵モ左様ニ思ヒ我モ其心アレドモ、人ノスルコトヲウケガハズシテハ叶ヒガタシ、兵法ニ敵ノ打トコロヲ止メ、ツクトコロヲ抑ヘ、フム所ヲモギハナシナドスル事ナリ、枕ヲ抑ユルト云フハ我ガ實ノ道ヲ得テ敵ニカヽリ合フ時、敵何事ニテモ思フキザシヲセヌ内ニ我是ヲ知リテ、敵ノウツト云フ其ノウノ字ノ頭ヲ抑ヘテ、後ヲサセザル心、是枕ヲ抑ユル心ナリ、縦令ヘバ敵ノカヽルト云フカノ字ヲ抑ヘ、トブト云フトノ字ノ頭ヲ抑ヘ、キル

ト云フキノ字ノ頭ヲ抑フル、ミナ以テ同ジ心ナリ、敵我ニワザヲナス事ニ付テ、役ニ立ザル事ヲバ敵ニ任セ、役ニタツホドノ事ヲバオサヘテ敵ニサセヌヤウニスル所兵法ノ専ナリ、是モ敵ノスルコトヲオサエン〳〵トスル心後手（ゴテ）ナリ、先我ハ何事ニテモ道ニ任セテワザヲナスウチニ、敵モワザヲセント思フ頭ヲ抑ヘテ、何事モ役ニタヽセズ、敵ヲコナス（コナスハ自由ニ敵ヲ引廻ハスナリ）所、是兵法ノ達者、鍛練ノ故ナリ、枕ヲ抑フル事能ク〳〵吟味有ベキナリ

「人ニ我身ヲマワサレ」と云ひ又「敵ヲコナス」と云ふ事肝要なり、能く〳〵研究すべし、マハサレルと云ふは、俗に引廻はすなど云ふて、自由にさるゝ事なり、コナスも同様の意にて、随意に即ち心の思ふまゝにする事なり、他人を我思ふまゝに扱ひこなすと云ふは、非常に困難の事の如くなれども、決して然らず、何事によらず下手が上手にかゝれば、自由自在にこなさるゝなり、幕下の相撲が、幕内の相撲に向へば自由にさるゝ如く、一段達へば仕方の無きものなり、剣道も亦此の如く、敵を自由に扱ふやうになれば、勝たずと云ふ事あるべからず、而して敵を自由に扱ふこと、第一其機を察すると云ふ事を知らざるべからず、此に枕を抑ふると云ふは、其の機を察し、機の出ばなを抑さへて、働かさぬやうにする事なり、左ればとて、又初めより抑さへんく〳〵と其ればかり心にかくるも悪し、詰るところ、冷静なる本心の活動力に待つべき事なり

一渡ヲ越スト云フ事

渡ヲ越スト云フハ、縦令バ海ヲ渡ルニ瀬渡（セト）ト云所モアリ、又ハ四十里五十里ト云フ長キ海ヲ越スヲモ渡リト云ナリ、人間ノ世ヲ渡ルニモ、一代ノウチニハ、渡ヲ越スト云フ所多カルベシ、船路ニシテ其渡ノ處ヲ知リ、船ノ位ヲ知リ、或ハ開キノ風ニタヨリ、或ハ追風（オヒテ）ヲモ受ケ、若

シ風變リテモ二里三里ハ櫓(ロカイ)ヲ以テモ港ニツクト心得テ、船ヲ乘取リ渡ヲ越スコトナリ、其心ヲ得テ、人ノ世ヲ渡ルニモ一大事ニカケテ渡ヲ越スト思フ心アルベシ、兵法戰ノウヘニモ、渡ヲ越スコト肝要ナリ、敵ノ位ヲウケ、我ガ身ノ達者ヲ覺エ、其理ヲ以テ渡ヲ越スコトヨキ船頭ノ、海路ヲ越スニ同ジ、渡ヲ越テハ又心ヤスキ所ナリ、渡ヲ越ト云フ事、敵ニヨワミヲ着ケ、我身先ニナリテ大形早ヤ勝所ナリ、大小ノ兵法ノ上ニモ、渡ヲ越スト云フ心肝要ナリ、能々吟味アルベシ

一景氣ヲ知ルト云フ事

景氣ヲ見ルト云ハ、大分ノ兵法ニシテハ、敵ノ榮エ衰ヘヲ知リ(盛衰ヲ知ルナリ)相手ノ人數ノ心ヲ知リ、其場ノ位ヲウケ、敵ノ景氣ヲ能ク見分ケ、我人數何ト仕カケ、此兵法ノ理ニテ、惜ニ勝ト云所ヲ呑込ミテ、先ノ位

ヲ知テ戰フ所ナリ、又一分ノ兵法モ、敵ノ流レヲ辨ヘ、相手ノ人ガラヲ見ウケ、人ノ强キ弱キ所ヲ見ツケ、敵ノ氣色ニケガフ事ヲシカケ、敵ノメリカリ(メリハ減リ、カリハ上リノ意ニテ、メリカリハ增減ナリ)ヲ知リ、其間ノ拍子ヲ知リテ、先ヲシカクル所肝要ナリ、物事ノ景氣ト云事ハ、我ガ智力强ケレバ必ズ見ユル所ナリ、兵法自由ノ身ニナリテハ、敵ノ心ヲ能ク計テ勝ツ道多カルベキ事ナリ、工夫有ベシ

一ケシヲフムト云フ事

劍ヲフムト云フ心ハ、兵法ニ專ラ用ユル義ナリ、先ヅ大キナル兵法ニシテハ敵、弓鐵砲ニテモハナシカクル時、我ハ其後ニカ、ランドスルニヨッテ、敵ハ更ニ又弓ヲツガヒ、鐵砲ニ藥ヲコメテ擊出スユヱ、コミ入ガタシ、我ハ敵ノ弓鐵砲ヲ放ツ內ニ早クカ、ルベシト云フ心ナリ、

早シカ、レバ矢モ番フ暇ナク、鐵砲ヲモ撃出スイトマ無ク、敵何事ヲモ施シ得ザル心ナリ、物事ヲ敵ノシカクルト、其儘其ノ理ヲ受テ敵ノスル事ヲフミツケテ勝ツ心ナリ、又一分ノ兵法モ敵ノ打出ス太刀ノ後(アト)ヘ打テバトタン〳〵トナリテ、捗ユカザル所ナリ、敵ノ打出ス太刀ハ足ニテフミ付ケル心ニシテ、打出ス所ヲ勝ツ、二度目ヲ敵ノ打得ザルヤウニスベシ(○)フムト云フハ足ニハカギルベカラズ、身ニテモフミ、心ニテモフミ、勿論太刀ニテモフミ付テ二ノ目ヲ敵ニヨクサセヒテ行當ル心ニテハナシ、其マ、後ニツク心ナリ、能ク〳〵吟味アルベシ

（△敵ヲ踏ムコト足ニ限ルベカラズ身ニテモ心ニテモ踏ムベシ）

一クヅレヲ知ルト云フ事

崩(クヅレ)ト云フ事ハ物毎ニアルモノナリ、其家ノクヅルヽ、身ノクヅルヽ、敵ノクヅルヽ事モ、時イタリ拍子ナガヒニナリテクヅルヽ所ナリ、大分ノ兵法ニテモ、敵ノクヅルヽ拍子ヲ得テ、其間ヲ抜サヌヤウ立追ニツル事肝要ナリ、崩ルヽ所ノ息(イキ)ヲヌカシテハ立カヘス所アルベシ、又一分ノ兵法ニテモ、戰フ中ニ敵ノ拍子ナカヒテ崩レメノツクモノナリ、其程ヲ油斷スレバ又立歸リ、(立歸リハ立直ルナリ)新ラシクナリテハ捗ユカザル所ナリ、其崩レ目ニツキ、敵ノ顔タテ直サヾルヤウニ惱ニ追カクル所肝要ナリ、追カクルハ直ニツヨキ心ナリ、(今ノ追撃ノ追ナリ)敵タテカヘサザルヤウニ打放スモノナリ、打放スト云フ事能ク分別アルベシ、ハナレザレバシタルキ心有リ、工夫スベキモノナリ

一敵ニナルト云フ事

敵ニ成ト云フハ我身ヲ敵ニナリカハリテ思フベキト云フコトナリ、世ノ中ヲ見ルニ盗ミナドシテ、家ノウチヘ取籠ルヤウナルモノヲモ、外ヨリハナカ〳〵ニ強ク思ヒ做スモノナリ、左レド又盗賊ノ身ニナリテ思ヘバ、今世ノ中ノ人ヲミナ相手トシテ遁ゲ籠リテセンカタナキ心ナリ、取籠ルモノハ雛子ナリ、之ヲ外ヨリ取圍ミ、打入ラントスルモノハ鷹ナリ、能々工夫有ベシ、敵ヲ強クノミ思ヒ做シテ恐ルルハ不覺ナリ、敵ノ心ニナリテ見レバ、却テ我ヲ恐レ居ルコトナルベシ、大キナル兵法ニシテモ、敵トイヘバ強ク思ヒテ大事ニカクルモノナリ、ヨキ人數ヲモチ兵法ノ道理ヲヨク知リ、敵ニ勝ツト云所ヲ能受ケテハ氣遣ヒスベキ道ニアラズ、一分ノ兵法モ敵ニナリテ思フベシ兵法ヨク心得テ道理ツヨク、其道達者ナルモノニアヒテハ、必ズ負クルト思フ所ナリ、能々吟味スベシ

彼を知り己を知るは古來兵家の套語なり、唯己のみを知て彼を知らざれば、思はざる失策を來すことあり、義經が風雨の夜に乘じ、僅々百騎に足らぬ手兵を提げて、屋島に渡りしは、梶原の評したる如く、如何にも無謀の猪武者に似たれども、是は甚實、梶原の愚にして、兵法を知らざるの不明に坐す、義經如何に血氣に逸ればとて、豈に十分備へある敵に向て、斯る無謀を敢てせんや、此時、平家は海の隔を頼み、且源氏を恐るゝこと甚敷、源軍來ると聞ては、兵の多少抔計るの遑なく、狼狽して敗走せん事は、義經の疾くに計り知る處なり、然るを、梶原は唯己れの小勢なるを知りて、敵の情況を計ること能はざるは、義經に比すれば遙かに劣れり、果して義經の計りしに違はず、源軍海を渡りて來ると聞くや、平家は驚き恐れて海に入りたるなり、「敵ノ心ニモナリテ見ヨ」とは此を云ひたるものにて、我敵を恐るれば、敵も又我を恐るべし、恰も強賊などの山塞に立籠りたらん如き、如何にも強かるべしと思へども、賊の身になり

て見たらば、四面を敵として取籠められたる事とて、其の我を恐るゝより、我の彼を恐るゝより一倍甚しかるべきなり、此理を知る時は、敵を一概に恐るゝは固より悪し、去れど一概に恐れざるも悪し、要は能く敵情を察し、機に臨み變に應じて、終局の勝利を占むるにあり

一四手ヲハナスト云フ事

四手ヲハナストハ（四手トハ敵ト我ト四ノ手ニテ互ニ張合トナリテ勝負ツカザル時ハ其手ヲ放スト云フ意ナリ）敵モワレモ同ジ心ニ張合フ心ニナルト思ハヾ、其儘心ヲナステヽ別ノ利ニテ勝ツ事ヲ云フナリ、大分ノ兵法ニシテモ、四手ノ心ニアレバ拵ユカズ、人ノ先ズル事ナリ、早ク心ヲステヽ敵ノ思ハザル利ニテ勝ツ事專ヲナリ、又一分ノ兵法ニテモ、四手ニナルト思ハヾ、其儘心ヲカヘテ敵ノ位ヲ得テ、各別變リタル利ヲ以テ、勝ヲワキマユル事肝要ナリ、能々分別スベシ

一カゲヲ動カスト云フ事

陰（カゲ）ヲウゴカスト云ハ、敵ノ心ノミエワカヌ時ノ事ナリ、大分ノ兵法ニシテモ、何トモ敵ノ位ノ見ワケザル時ハ、我カタヨリ強クシカクル樣ニ見セテ、敵ノ手ダテヲ見テハ、各別ノ利ニテ勝ツ事ヤスキ所ナリ、手ダテヲ見ルモノナリ、又一分ノ兵法ニシテモ敵後（ウシロ）方ニ大刀ヲ構ヘ、脇ニ構ヘタルヤウナル時、ハット打ンストスレバ、敵思フ心ヲ必ズ其ノ太刀ニ現ハスモノナリ、現ハレ知ルヽニ於テハ、其ノマヽ利ヲ受ケテ能々吟味アルベシ

一影ヲ抑フルト云フ事

影ヲ抑フルト云フハ、敵ノカタヨリ仕掛クル心ノミエタル時ノ事ナ

リ、大分ノ兵法ニシテハ、敵ノヲザヲセントスル所ヲ抑フルト云テ、我方ヨリ其利ヲ抑フル所ヲ、敵ニ強クミスレバ、強キニ抑ヘラレテ、敵ノ心カハル事ナリ、我モ心ヲナガヘテ、空ナル心ヨリ先ヲ仕掛テ勝ツ所ナリ、一分ノ兵法ニシテモ、敵ノ起ルツヨキ氣ザシヲ、利ノ拍子ヲ以テ止メサセ、止ミタル拍子ニ、我勝利ヲ受テ先ヲ仕掛クルモノナリ、能々工夫アルベシ

一移ラカスト云フ事

移ラカスト云フハ物毎ニアルモノナリ、或ハ眠リナドモウツリ、或ハ欠伸ナドノウツルモノナリ、時ノウツルモアリ、大分ノ兵法ニシテ、敵ウハキニシテ事ヲ急ク心ノ見ユル時ハ、少シモ其ニ介意ハザルヤウニシテ、何如ニモユルリトナリテ見スレバ、敵モ我氣ニウツサレテ其氣ザシタルムモノナリ、其移リタルト思フトキ、我方ヨリ空ノ心ニシテ、早ク強クシカケテ勝利ヲ得ルモノナリ、一分ノ兵法ニシテモ我身モ心モユルリトシテ、敵ノタルミノ間ヲ受テ強ク早ク先ニシカケ勝ツ所專ナリ、又ヨワリト云テ是ニ似タル事アリ、一ツハ退屈ノ心、一ツハ浮ツク心、一ツハ弱クナル心、能々工夫アルベシ

一ムカツカスルト云フ事

ムカツカスルト云ハ物毎ニアリ（ムカツクトハ俗ニムツトスル意ナリ立腹スル氣ナリ）一ツニハキハドキ心、二ツニハ無理ナル心、三ツニハ思ハザル心、ヨク吟味アルベシ大分ノ兵法ニシテモ、敵ノ心ヲムカツカスル事肝要ナリ、敵ノ思ハザル所ヘ仕掛ケテ、敵ノ心ノキハマラザル内ニ、我利ヲ以テ先ヲシカケテ勝ツ事肝要ナリ、又一分ノ兵法ニシテモ、初ユルリト見セテ、俄ニ

ツヨクカヽリ、敵ノ心ノハタラキニ隨ヒ息ヲヌカサズ、其儘利ヲウケテ勝ヲヲサムル事肝要ナリ、能ク〳〵吟味アルベシ

「ムカツカス」と云ふこと是亦兵法の一手段なり、ムカツクとは怫然として怒ることにて、何人にも怒る時は、心の平常を失ふ、心の平常を失ふ時は、其人必ず工夫の中正を誤ることあるは免れざるところなり、古人も怒るものは其情知るべく、笑ふものは計るべからずと云へり、如何にも其の通りにて、世間の人にても怒り易きものは寧ろ其人は善き人なり、何事にても怒らざる人こそ却て其心計られぬものなり、故に敵と對しては、如何にもして敵を怒らせ、ムツトさせ、其の機に乘じて勝利を得るは、兵法上の一手段たるなり、武藏先生の佐々木岸流と、舟島に於て勝負を決するや、全く此法を用ゐたり、其は約束の時刻に岸流は早くより來りて、待合はせども先生來らず、朝の八時頃より、正午に至りて流石に岸流ムツトシて怒るところに、先生漸く小舟に乘りて來りければ、岸流今は怺(コラ)へ兼ね、先生の舟より上り來るをも待たず、床机を離れてつか〳〵と水際に進み出で、何とて今迄晩きやと云ふなり、一刀を大上段に振冠りて打下せしを、先生も持たる櫂にて眞向を臨んで打下し、相撃となりたるが、岸流の打太刀は切先僅かに先生の鉢巻を切りたるのみにて、先生の爲めに英名空しく孤島の露と消え去りぬ、此時の事情を案ずるに、岸流は初めより、全く先生の手段に乘せられたるものにて、即ち「ムカツカ」せられたるなり、故に苟も劍道を學ばんとするものは、其心を平靜安著にして、如何なる場合にても、決して怒り腹立つ等の事あるべからず

一オビヤカスト云フ事

オビユルト云フコト物毎ニアルコトナリ（オビユルハ驚愕ナリ恐レ怺ク意ナリ）思ヒヨラヌ事ニオビユル心ナリ、大分ノ兵法ニシテモ敵ヲ劫（オビ）ヤカス事眼前ノ事ノミニアラズ、或ハ物ノ聲ニテモオビヤカシ、或ハ小ヲ大ニシテオビヤカスコト是レオビユル所ナリ、

其オビユル拍子ヲ得テ、其利ヲ以テ勝ベシ、一分ノ兵法ニシテモ身ヲ以テオビヤカシ、太刀ヲ以テオビヤカシ、聲ヲ以テオビヤカシ、敵ノ心ニナキコトヲフツト仕カケテオビユル所ノ利ヲウケテ、ソノマヽ勝ヲ得ルコト肝要ナリ、能々吟味アルベシ

一マブルヽト云フ事

マブルヽト云ハ（マブルハ塗ルナリ例ヘバ泥マブレトハ泥ヲ如シ混ジ入ルノ義アリ）敵我手近クナリテ、互ニツヨク張アヒテ、捗ユカザルト見レバ、其儘敵ト一ツニマブレアヒテ、マブレアヒタル其内ニ、利ヲ以テ勝ツ事肝要ナリ、大分小分ノ兵法ニモ敵味方互ニ心ハリアフテ、勝負ツカザルトキハソノマヽ敵ニマブレテ互ニワケナクナル、ヤウニシテ（敵味方ノ分別ナクナルヨウニシテ）其ウチノ德ヲ得、ソノウチノ勝ヲ知リ、ツヨク勝ツ事專ラナリ、ヨク〳〵吟味有ベシ

一カドニサハルト云フ事

角（カド）ニサハルト云フハ物毎ニツヨキ物ヲ押スニ其マヽ直ニハ押込ミガタキモノナリ、敵ノ人數ヲ見テ張リ出強キ處ノ角ニアタリテソノ利ヲ得ベシ、角ハ、ノメルハ弛（ユル）ブリ、（又鈍（ニブ）ルナリ）其ノメル內ニモ角々ニ心得テ勝利ヲ得ル事肝要ナリ、一分ノ兵法ニシテモ敵ノ體ノ角ニイタミヲツケテ體少シニテモヨワクナリ崩ルヽ體ニナリテハ勝ツ事ヤスキモノナリ、此事ヨク〳〵吟味スベシ

一ウロメカスト云フ事

ウロメカストハ、敵ニタシカナル心ヲ持セザルヤウニスル處ナリ、（ウロメカストハウロツカスノ意ナリ）大分ノ兵法ニシテモ、戰ノ場ニ於テ敵ノ心ヲ計リ我兵法

ノ智力ヲ以テ、敵ノ心ヲ迷ハセテ兎ノ斯ノト思ハセ、敵ウロメク心ニ成ル拍子ヲ得テ、慥ニ勝ツ所ヲワキマユルナリ、又一分ノ兵法ニシテ時ニ當リテ、イロ〳〵ノワザヲシカケ、或ハ打ト見セ、或ハツクトミセ、又ハ入リ込ムト思ハセ、敵ノウロメク氣ザシヲ得テ、自由ニ勝ツ所是レ戰ノ專ナリ、能ク〳〵吟味アルベシ

一三ツノ聲ト云フ事

三ツノ聲トハ初中後ノ聲ト云テ、三ツニ掛ケワクル聲ナリ、所ニヨリ聲ヲカクルト云フ事專ナリ、聲ハ勢ヒナルニヨリテ、火事ナドニモ掛ケ、風波ニモカクルモノナリ、聲ハ又勢力ヲ見スル物ナリ、大分ノ兵法ニシテモ、戰ノ初メニカクル聲ハ如何程モ嵩(カサ)ヲカケテ掛クベク、戰フ間ノ聲ハ調子ヲ引キテ底ヨリ出ル聲ニテカヽリ、勝テ後アト(ト)ニ大キニ強クカクル聲、是三ツノ聲ナリ、又一分ノ兵法ニシテモ敵ヲ動カサム爲メノ打トミセテ、頭ヨリエイト云聲ヲカケ、聲ノ後(アト)ヨリ太刀ヲ打出スモノナリ、又敵ヲ打テ後(アト)ニ聲ヲカクルコト、勝ヲ知ラスル聲ナリ是ヲ先後ノ聲ト云フ、太刀ト一度ニ大キニ聲ヲカクルコトナシ、若シ戰ノウケニ掛ルコトアレバ、是ハ拍子ニノル聲ニテ、引テカクルナリ、能々吟味アルベシ

一マギルヽト云フ事

マギルヽト(マギルヽハ紛ルヽニテ敵ノ眼ヲクラマスナリ)云ハ、大分ノ戰ヒニシテハ人數ヲ互ニ立テ合戰ノツヨキ時マギルヽト云フテ、敵ノ一方へ掛リ、敵クヅルヽト見バ捨テ又強キ方ニカヽル、大カタツヾラヲリニカヽル心ナリ、一分ノ兵法ニシテ敵大勢ヨスルニモ亦此心專ナリ、一方ヲ追崩シテハ又

一方ツヨキ方ニカヽリ、敵ノ拍子ヲ得テ、能キ拍子ニ左右トツヾヲヤリノ心ニ思ヒテ、敵ノ色ヲ見合テ掛ルモノナリ、其敵ノ位ヲ得、打通ルニ於テハ少シモ引心ナク強ク勝ツ利ナリ、一分ノ入身ノ時モ、敵ノツヨキニハソノ心アリ、マギル、ト云フ事、一足モヒク事ナシヲズ、マギレ行ト云フ心、能々分別スベシ

一ヒシグト云フ事

ヒシグト云フハ譬ヘバ敵ヲ弱ク見ナシテ、我強メニナツテ挫ギト云フ事專ラナリ、大分ノ兵法ニシテモ敵ニ人數ノ位ヲ見コナサレ、又ハ大勢ナリトモ敵ウロメキテ弱ミツク所ナレバ、頭ヨリカサヲカケテ挫ギ心ナリ、挫ギ事弱ケレバモリカヘス事有リ、手ノ中ニ握ツテ挫ギ心能々分別スベシ、又一分ノ兵法ノ時モ、我手ニ足ラザルモノ、又ハ敵ノ拍子違ヒテ、スサリメニ成ル時少シモ息オクレズ目ヲ見合セザル樣ニナシ、眞直ニ挫ギツクル事肝要ナリ、能々吟味有ベシ

一山海ノ變リト云フ事

山海ノ心ト云ハ、戰フ中ニ同ジ事ヲ度々スルコトアシキ所ナリ、同ジ事二度ハ是非ニ及バズ三度トスルハ甚ダ惡シ、敵ニワザヲシカクル（△敵ノ意表ニ出ルコトヲ忘ルベカラズ、敵海ト思ハバ山山ト思ハヾ海ト出ヅ可シ）ニ一度ニテ成ラザル時ハ今一ツモセキカケテ、其ノ利ニ及バズバ今度ハ別ニ異リタル事ヲフツト仕掛ケ、尙ソレニテモ捗ユカズバ又別ノ事ヲ仕カクベシ、然ルニヨツテ敵山ト思ハヾ海トシカケ、海ト思ハバ山トシカクル心兵法ノ道ナリ、能々吟味アルベキコトナリ

奇道は、兵家の許すところなれば、必ずしも正々堂々とのみ云ふべからず、敵の不意を襲ひ、思ひがけ無きところに出で、勝を取ること珍しからず、所謂「海ト思ハヾ山、

山ト思ハヾ海」と云ふ如く、意表に出ること肝要なるべし、剣を取て相對するや、小手を取ると見せて面を打ち、胴を打つと見せて、小手を打つ等は常の事なり、是れ卽ち山海の心と云ふ所以なり

一底ナヌクト云フ事

底ヲヌクト云ハ敵ト戰フニ其道ノ利ヲ以テ上ハ勝トミユレドモ心ヲタヘサヾルニ依テ、上ニテハマケ下ノ心ハマケヌ事アリ、其儀ニ於テハ我俄カニカハリタル心ニ成テ敵ノ心ヲタヤシ、底ヨリマクル心ニ敵ノナル處ヲ見ル事專ナリ、此ソコヲ拔ク事太刀ニテモヌキ、又身ニテモヌキ、心ニテモヌク所有リ、一道ニハ辨ユベカラズ、底ヨリ崩レタルハ我心ノコスニ及バズ、左ナキトキハ殘ス心ナリ、殘ス心アレバ敵崩レガタキ事ナリ、大分小分ノ兵法ニシテモ底ヲヌク所、能ク〳〵鍛練アルベシ

一新ニナルト云フ事

新(アラタ)ニナルトハ敵ト戰フ時、縺(モツ)ルヽ心ニナツテ拂ユカザル時、我氣ヲ振リ捨テ物事ヲ新ラシク初ムル心ニナリ、其拍子ヲ受テ勝ヲ辨ユル所ナリ、新ニ成ル事ハ何時モ敵ト我レキシム(キシムトハ圓滑ナラザル意ナリ)心ニナルト思ハヽ其儘心ヲ更ヘテ各別ノ利ヲ以テ勝ツベキナリ、大分ノ兵法ニオイテモ、新ニナルト云所ワキマユル事肝要ナリ、兵法ノ智力ニテハ忽ヲ見ユル所ナリ、ヨク〳〵吟味アルベシ

一鼠頭午首ト云フ事

鼠頭(ソトウゴ)午首(シユ)ト云フハ敵ト戰フ中ニ、互ニ細カナル所ヲ思ヒ合テ縺(モツ)ルヽ心ニナル時、兵法ノ道ヲツヲ思ヒテ、如何ニモ細カ

△鼠頭午首脇大心小、

ナル中ニ、俄ニ大ギナル心ニシテ、大ヲ小ニカユル事、兵法一ツノ心ダテナリ、平生ノ人ノ心モ、鼠頭牛首ト思フベキ所武士ノ肝心ナリ、兵法大分小分ニシテモ、此心ヲ離ルベカラズ、此事ヨク〳〵吟味アルベキモノナリ

膽は大なるべし、心は小なるべしとは、古來の格言なり、男子苟も世に立たんとせば、宜敷磊々落々日月の皎然たるが如くなるべし、切々瑣々として、小事に拘々たるは男子の本領にあらず、是れ婦人女子の爲すところなり、然りと云へども、膽大なるが故に小心翼々の戒しめを忘るべからず、土井利勝が一本の紙撚捻を拾ひ、翌年懐中より取出して、刀の柄を巻きたるは人の知るところなり、凡そ古今に渡りて男子らしき男子として、大閤秀吉の如くなるものは少なし、彼が歳末の禮に、安土城に進物として、城下より城門迄數百荷の吊臺を人夫に擔がせて、流石豪膽の信長を驚かしめたる事あり、海内を一統して、大明を征伐し、日本の天子を、大陸四百餘州の首都、北京に行幸せしめんと企てし程の大膽なれども、而も一面に於ては、又極めて細心、苟も爲さゞるところあり、賤ケ岳の役柴田勝家に備ふるや、十三砦を築きて之を抑へ、其の中川の敗報を聞くと齊敗、「八幡戰さには勝たるぞ」と叫びて、腰刀を抜きて躍り上り〳〵、馬に飛乗りながら、足の強きもの、三十餘人を呼出して、先きに走らしめ、沿道の民家に命じて、粥を煮て糧食に給し、豆を煮て馬を飼ひ、更に一處〳〵に、豫め驛馬を備へて、乗り代へ乗り代へ一夜に十三里を乗切り、果して大捷を得たるは其の細心にして、用意の周到なるは他人の及ぶところにあらざるなり、「鼠頭牛首」とは全く大膽小心の謂に外ならず、武藏先生が大敵を物の數ともせず、常に單身敵中に飛込みながら、其の飛込迄には十分の用意を爲すに於て、極めて細心なりしなり、岸流との勝負に、綿を包みて豫め鉢巻を用意したるなど、其一例と見るべし、要するに大膽の中に小心のところあり、大小宜敷に適ひ、初めて英雄の本領を發揮し得べし

一將卒ヲ知ルト云フ事

將卒ヲ知ルトハ何レモ戰ニ及ブ時我思フ道ニ至テハタエズ此法ヲ行ヒ、兵法智力ヲ得テ、我ガ敵タルモノヲバ皆我卒ナリト思ヒ取テコナシタキヤウニナスベシト心得、（コナストハ我ノ自由ニスルコトナリ）敵ヲ自由ニマワサントオモフ所、我ハ將ナリ、敵ハ卒ナリ、工夫アルベシ

一束ヲハナスト云フ事

ツカヲハナスト云フニイロ〳〵アル事ナリ、無刀ニテ勝ツ心アリ、又太刀ニテカタザル心アリ、サマ〴〵心ノユク所書付ル能ハズ、能ク能ク鍛練スベシ

一岩石ノ身ト云フ事

イワオノ身（即チ厳ノ義ニテ岩石ノ意ナリ）ト云フハ、兵法ヲ得道シテ忽ヶ岩石ノ如クニナツテ、万事アタヲザル所、動カザル所、口傳アリ

右書付ル處、一流剣術ノ要ニシテ絶エズ思ヒヨル事ノミ云ヒ現ハシ置モノナリ、今始メテ此利ヲ書記スモノナレバ後先ト書紛ルヽ心有テ細ヤカニハ云分ガタシ、乍去此道ヲ學ブベキ人ノ爲メニハ心記シニ成ベキモノナリ、我若年ヨリ以來、兵法ノ道ニ心ヲ掛テ、剣術一通リノコトニモ、手ヲカラシ身ヲカラシ、イロ〳〵サマ〴〵ノ心ニ成リ、他ノ流々ヲモ尋ネ見ルニ、或ハ口ニテ云ヒカコツケ、或ハ手ニテ細カナル業ヲシテ、人目ニ善キヤウニ見スルト云フトモ一ツモ實ノ心ニアルベカラズ、勿論斯樣ノ事、シナラヒテモ、身ヲキカセナラヒ心ヲキカセツクル事ヲ思ベドモ、ミナ是道ノ病トナリテ、後々マデモ失セガタクシテ兵法ノ直道世ニ朽ケテ道ノ廢ルモト井ナリ、剣術實

ノ道ニナリテ敵ト戰ヒ勝ツ事此法卿カ變ル事アルベカラズ、我兵法ノ智力ヲ得テ、直ナル所ヲ行フニ於テハ、勝ツ事ウタガヒ有ベカラザルモノナリ

風の巻

一兵法他流ノ道ヲ知ル事

他ノ兵法ノ流々ヲ書付ケ風ノ巻トシテ此巻ニ著ハス所ナリ、他流ノ道ヲ知ラズシテハ我一流ノ道惱ニ辨ヘガタシ、他ノ兵法ヲ尋子見ルニ、大ナル太刀ヲ取テ、強キ事ヲ專ニシテ其業ヲナスナカレ、或ハ小太刀ト云ヒテ、短キ太刀ヲ以テ道ヲ勤ムルナカレ、或ハ太刀數多クタクミ、太刀ノ構ヲ以テ、表ト云ヒ奥ト云ヒテ道ヲ傳ユル流モアリ、是皆實ノ道ニアラザル事此卷ノ奥ニ惱カニ書顯シ、善惡理非ヲ知ラスルナリ、我一流ノ道理各別ノ義ナリ、他ノ流ハ藝ニ渡テ身スギノタメニシテ色ヲカザリ花ヲサカセ、寶物ニ拵エタルニヨッテ、實ノ道ニアラザル事カ、又世ノ中ノ兵法劍術バカリ小サク見立テ、太刀ヲ振リ習ヒ、身ヲヒキカセテ、手ノカ、ル所ヲ以テ勝事ヲ辨ヘタルモノカ、何レモ惱カナル道ニアラズ、他流ノ不足アルトコロ、一々此書ニ書顯スナリ、ヨク〳〵吟味シテ、二刀一流ノ利ヲワキマユルベキモノナリ

一他流ニ大ナル太刀ヲ持ツ事

他ニ大ナル太刀ヲ好ム流アリ、我兵法ヨリシテ是ヲ弱キ流ト見タツルナリ、其故ハ、他ノ兵法如何樣ニモ人ニ勝ト云理ヲバ知ラズシテ、太刀ノ長キヲ得トシ、敵相遠キ所ヨリ勝ヲタクキト思フニ依テ、長キ太

刀好ム心アルベシ、是レ世ノ中ニ云フ、一寸手マサリトテ兵法知ラヌモノヽ沙汰ナリ、然ルニヨッテ、兵法ノ利ナクシテ長キヲ以テ遠ク勝ントス、ソレハ心ノ弱キユエナルニヨッテ、弱キ流ト見立ルナリ、若シ敵相近ク組合ウホドノ時ハ、太刀ノ長キホド打事モ利カズ、太刀ノモトヲリスクナリ、（手元ニ隙ナキユエズルナリ）太刀ヲニヽシテ（俗ニ云フ荷厄介ニスルナリ）小脇差手フリノ人ニ劣ルモノナリ、長キ太刀好ム身ニシテハ、ソノ云ワケハ有ベキナレドモ、ソレハ其身ヒトリノ理ナリ、世ノ中ノ實ノ道ヨリ見ルトキハ道理ナキコトナリ、長キ太刀持ズシテ短カキ太刀ニテハ必ズ負クベキ事カ、或ハ其場ニヨリ上下脇ナドノツマリタル所、或ハ脇差バカリノ座ニテモ、長ヲ好ム心兵法ノ疑ヒトテ悪シキ心ナリ、人ニヨリ小刀ナルモノモ有リ、其身ニヨリ長刀サスコトナラザル身モ有リ、昔ヨリ大ハ小ヲカナヘルト云ヘバムザト長キヲ嫌フニハアラズ、長キトカタヨル心ヲ嫌フ儀ナリ、大分ノ兵法ニシテ長キ太刀ハ大人數ナリ、短カキハ少人數ナリ、少人數ト大人數ニテ合戰ハナルマジキモノカ、少人數ニテ勝ツコソ兵法ノ德ナレ、昔モ少人數ニテ大人數ニ勝タル例多シ、我一流ニ於テ左樣ニカタスキセバキ心嫌フ事ナリ、能ク能ク吟味アルベシ

一他流ニオイテ強ミノ太刀ト云フ事

太刀ニ強キ太刀弱キ太刀ト云フコトハ有ベカラズ、ツヨキ心ニテフル太刀ハアラキモノナリ、荒キバカリニテハ勝ガタシ、又強キ太刀ト云テ人ヲ切ル時、無理ニツヨクキラントスレバ切レザルモノナリ、試シ物ナド切ル心ニモ、餘リ強ク切ラントスル事悪シ、誰ニ於テモ敵

ト切合ウニ弱ク切ラン強ク切ラントト思フモノナシ、唯人ヲ切殺サン
ト思フ時ハツヨキ心モアラズ、敵ノ死ヌル
程ト思フ儀ナリ、若ハツヨミノ太刀ニテ、人ノ太刀強クハレバ張リ餘
リテ必ズ惡キナリ、人ノ太刀ニツヨク當レバ、我太刀モ折レ摧クルコ
トアリ、然ルニヨッテ、ツヨミノ太刀ナド云事ナキコトナリ、大分ノ
兵法ニシテモ強キ人數ヲ持、合戰ニ於テ強ク勝ムト思ヘバ敵モツヨ
キ人ヲモチ、戰モツヨクセントト思フ、其ハ何レモ同ジ事ナリ、物毎
ニ勝ト云事道理ナクシテハ勝ツ事アダハズ、我道ニ於テハ少シモ無
理ナル事ヲ思ハズ、兵法ノ智力ヲ以テ如何ヤウニモ勝ツコトヲ得ル
心ナリ、能ク〳〵工夫アルベシ
一他流ニ短キ太刀ヲ用ユル事

ミジカキ太刀バカリニテ勝ントト思フコト實ノ道ニアラズ、昔ヨリ太
刀、刀ト云フテ長キト短キト云事ヲアラハシ置ナリ、世ノ中ニ強力
ナルモノハ大キナル太刀ヲモ輕ク振ルナレバ無理ニ短カキヲ好ムト可
ニアラズ、ソノ故ハ長キヲ好ミテ鑓長刀ヲモ持モノナリ、短キ太刀
ヲ以テ人ノフル太刀ノ透間ヲ切ン、飛入ン、捉マムナド、思フ心アシ
シ、又透間ヲネロウ所萬事後手ニ見エ縋ル、ト云フ心有テ嫌ウ事ナ
リ、若ハ短キ物ニテ敵ヘ入リ込マン、取ラントスル事大敵ノ中ニテ
役ニ立タザル心ナリ、短カキニシテ得タルモノハ大勢ヲモ切拂ハン、
自由ニ飛バン、狂ハントト思フトモ皆受太刀トイフ物ニナリテ、取紛
ル、心アッテ惱カナル道ニテハナキコトナリ、同クハ我身ハツヨク
直ニシテ人ヲ追回シ、人ニ飛ビハネサセ、人ノウロメクヤウニ仕カ

ケテ慥ニ勝ツ所ヲ專トスル道ナリ、大分ノ兵法ニ於テモ其利有リ、同クバ人數嵩(カサ)ヲ以テ敵ヲ即時ニ攻潰ス心兵法ノ專ヲナリ、世ノ中ノ人ノ物ヲシナラフ事、平生モ受ケツ、カハイツ(身ヲカハシスナリ)、扱ケツ、潛リツシナラヘバ心道ニ引カサレテ人ニ廻ハサル、心アリ、兵法ノ道直ニ正シキ所ナレバ正理ヲ以テ人ヲ追廻ハシ、人ヲ隨ガユル心肝要ナリ、能々吟味有ベシ

一他流ニ太刀カズ多キ事

太刀ノ數アマタニシテ人ニ傳ルコト、道ヲ賣物ニシタテ、太刀數多ク知リタルト初心ノモノニ深ク思ハセン爲ナルベシ、兵法ニ嫌ウ心ナリ、其故ハ人ヲ切ル事色々アリト思フ心迷ヒナリ、世ノ中ニ於テ人ヲ切ルコト變ハル道ナシ、知ルモノモ知ザルモノモ、女童子(ナンナワラベ)モ打叩キ切ルト云フ道ハ多ク無キ所ナリ、若シ變ハリテハ突ゾ薙(ナグ)ゾト云フ外ハナシ、先ヅ敵ヲ切ル所ノ道ナレバ他ニ數多アルベキ道理アラズ、サレドモ場ニヨリ事ニシタガヒ上脇ナド詰リタル處ニテハ太刀ノツカエザルヤウニモツ道アリ、其ハ五法トテ五ノ構ヘハアルベキモノナリ、ソレヨリ外ニ取付テ手ヲ捩(ネヂ)ギ或ハ身ヲヒネリテ飛起キナド樣々ノコトシテ人ヲ切ル事實ノ道ニアラズ、人ヲ切ルニネヂテ切ラレズ、拉(ヒシ)ギリテキラレズ、飛テキラレズ、ヒライテキラレズ、凡是等ノ事ハ曾テ役ニ立タザル事ナリ、我兵法ニオイテハ身ナリモ心モ直ニシテ敵ヲヒツマセ、緩マセテ敵ノ心ノネヂ、ヒネル處ヲ勝ツ事肝要ナリ、能ク〳〵吟味アルベシ

一他流ニ太刀ノ構ヲ用ユル事（　）

△法ヨリ入テ無法ニ出ツ一概ニ拘泥スベカラズ

太刀ノ構ヲ専ニスルコトヒガ事ナリ、世ノ中ニ構ノアランコトハ敵ノナキトキノ事ナルベシ、其仔細ハ昔ヨリノ例ヒ今ノ世ノ法ナドヽシテ法例ヲ立ル事ハ勝負ノ道ニハアルベカラズ、ソノ相手ノアシキヤウニ匠ムコトナリ、物毎ニ構ユルト云フ事ハユルカヌ處ヲ用ヰル心ナリ、或ハ城ヲ構ル、或ハ陣ヲ構ユルナドハ人ニ仕掛ケラレテモツヨク動カヌ心是常ノ義ナリ、兵法勝負ノ道ニ於テハ何事モ先手先手ト心掛ル事ナリ、構ルト云心ハ先手ヲマツ心ナリ、能ク〳〵工夫アルベシ、兵法勝負ノ道人ノ構ヲウゴカセ、敵ノ心ニナキ事ヲシカケ、或ハ敵ヲウロメカセ、或ハムカツカセ、又ハオビヤカシ、敵ノマギル、處ノ拍子ノ利ヲウケテ勝ツ事ナレバ、カマユルト云後手ノ心ヲ嫌フナリ、然ルユヱニ我道ニ有構無構ト云テ、構ハ有テカマエハナ

キト云所ナリ、大分ノ兵法ニモ敵ノ人數ノ多少ヲオボエ、其戰場ノ所ヲウケ、我人數ノ位ヲ知リ、其德ヲ得テ人數ヲ立テ戰ヲ初ムル事是合戰ノ專ナリ、人ニ先ヲ仕カケラレタル時ト我人ニ仕カクル時トハ其利不利一倍モカハル心也、太刀ヲ能構ヘ敵ノ太刀ヲ能ク受ケ能ク張ルト覺ユルハ鑓長太刀ヲ以テ棚ニ振リタルト同ジ、敵ヲ討ツ時ハ又棚木ヲ抜テ鑓長太刀ニ使フ程ノ心ナリ、能々吟味アルベキ事ナリ、

此一節、是亦武藏先生二刀一流の極意なり、凡そ兵法劍道に限らず、何事にても規則法度はあるものなり、去れば一應規則は學ばざるべからずと云へども、若し規則のみに拘泥しては身心の二つを束縛せられて自由を失ふによりて、却て道の上達は得がたき事なり、古人も法に入りて、法を出づと云へり、苟も其道を得れば、法是れ無法なれば行くところとして、心の自由を失ふことあるべからず、譬へば碁を圍むが如し、定石は學ばざるべからず、定石に據らざれば、全局の組織堅固ならず、去れど

又只管定石のみに拘はる時は、毫も變化なく、敵手より少しく、定石以外の手を打たる時は之に應ずること能はずして、周章するに至らん、剣道亦此の如し、五法三聲、流々によりてはいろ〳〵さまざまあるべしと云へども、要は一心萬事に酬應の大道理に歸着せざる無し、故に武藏先生本書の中に於て、反覆此意を致せり、此に「有構無構」の理を陳べて、重ねて一流の本意は、決して法の末にあらざる事を知らしめられたり

一他流ニ目付トイフ事

目付ト云フテ其流ニヨリ敵ノ太刀ニ目ヲ付ル流モ有リ、或ハ顔ニ目ヲツケ或ハ足ナドニ目ヲ付ルモ有リ、其ノ如ク取ワケテ目ヲ付ントシテハ、マギル、心有テ兵法ノ病ト云物ニナルナリ、其仔細ハ鞠ヲケル人ハ鞠ニヨク目ヲ付ネドモ、自在ニケルコト、物ニナル、ト云所アレバタシカニ目ニ見ルニ及バズ、又ホウカナドスルモノ、術ニモ其道ニナレテハ戸ビラヲ鼻先ニタテ、刀ヲ幾腰モ玉ナドニトル事、（手玉ニ取ルコトナリ）是レ皆慳ニ目ヲ付クルコトハナケレドモ、不斷手ニナレヌレバ自ヅカラ見ユル處ナリ、（※ウカハ放歌ニテ放歌師ト如キモノナリ）兵法ノ道ニ於テモソノ敵ト仕馴レ、人ノ輕重ヲ覺エ、道ヲ行ヒ得テハ太刀ノ遠近遲速マデモ皆見ユル義ナリ、兵法ノ目付ハ大カタ其人ノ心ニ付タル眼ナリ、大分ノ兵法ニ至リテモ其敵ノ人數ノ位ニ付タル眼ナリ、此故ニ我一流ニテハ觀見ノ二ツノ見ヤウアルコトナリ、觀ノ目ツヨクシテ敵ノ心ヲ見、其場ノ位ヲ見、大キニ目ヲ付テ其戰ノ景氣ヲ見、其折節ノ强弱ヲ見テ正シク勝ツ事ヲ得ル事專ラナリ、大小兵法ニ於テ小サク目ヲ付ル事ナシ、前ニモ記スゴトク細カニ少サク目ヲ付ルニ依テ、大キ成事ヲ取忘レ迷フ心出來テ慳

カ成ル勝ヲヲヌカスモノナリ、此理能々吟味シテ鍛練有ベキナリ

「兵法ノ目付ハ大カタ其人ノ心ニ付タル眼ナリ」の一句誠に一理萬理を貫通して、一流の眞理を道破せる言なり、武藏先生の他の劍術者に勝りて、天下後世に獨歩する所以のもの、常に心に着目するの秘要を會得せらるゝが故なり、二人相對して勝負を爲す時は、双方共に先づ其の眼に目を付くる事、普通の事なり、然るに先生は然らず、必ず其心に目を着くべしと敎ふ、而して心を見るに二樣あり、卽ち觀と見となり、觀は深く見は淺し、觀は觀察にして心を見るなり、見は淺くして心を見ること能はず、多くの人大概見の見やうを爲すも觀の見やうを爲すもの少し、之を以て一段の奥妙に至りがたし、禪家に心眼ありて、心の眼なり、世間にても盲目の人にして智力勝れたるもの少なからず、塙檢行は盲目にして、尙ほ群書類從の大著述あり、古人も眼に盲するも心に盲せずと云へり、今人多く眼に盲せずして、心に盲せり、利の爲めに盲目となりて、前後の辨へも無く眼はありながら無きに同じく、其が爲め

家を破り、身を滅すもの皆然り、是等の人々は世俗に云ふ明盲目（アキノクラ）なり、故に劍道を學ぶものは、常に心眼を以て物を觀るの心得無かるべからず、而して心眼の明と不明とは一に誠心誠意より來るが故に、誠の一字は徹頭徹尾斯道の妙諦と知るべし、二刀一流武藏先生の敎ふるところの萬理は遂に此の一字に歸着すべきなり

一他流ニ足ツカヒ有事

足ノ踏ミヤウニ浮足、飛足、ハヌル足、踏シムル足、カラス足ナド、云テ色々左足ヲフム事有リ、是レミナ我兵法ヨリ見テハ不足ニ思フ處ナリ、浮足ヲキラフ事、其故ハ戰ニ成リテハ必ズ足ノ浮キタガルモノナレバ如何ニモ慥ニフム道ナリ、又タ飛足ヲ好マザルコトハ飛足ハトブ起リアツテ飛デ居（井）ツク心有リ、イク飛モ飛ブト云フ理ノ無キニヨツテ飛足惡シ、又ハヌル足、ハヌルト云フ心ニテ捗ノ行カヌル

モノナリ、踏ツムル足、待ノ足トテ殊ニ嫌フ事ナリ、其他カヲヌ足色々左足ナドアリ、或ハ沼フケ、（フケ前ニアリ深田ナリ）或ハ山川、石原、細道ニテモ敵ト切合フモノナレバ、所ニヨリ飛ハヌル事モナラズ、左足ノフマレザル所有モノナリ、我兵法ニ於テ足ニカハルコトナシ、常ノ道チアユムガ如シ、敵ノ拍子ニ隨ヒ急グ時、靜ナル時ノ身ノ位ヲ得テ足ラズ餘ラズ、足ノシドロニナキヤウニ有ベキナリ、大分ノ兵法ニシテモ足ヲ運ブコト肝要ナリ、其故ハ敵ノ心ヲ知ラズムザト早クカカレバ拍子ナガヒ勝ナガタキモノナリ、又足フミ靜ニテハウロメキ有テ崩ル、ト云フ所ヲ見付ズシテ、勝ツ事ヲヌカシテ早ク勝負ツケ得ザルモノナリ、ウロメキ崩ル、場ヲ見ワケテ、少シモ敵ヲクツロガセザルヤウニ勝ツ事肝要ナリ、能々鍛練アルベシ

一他ノ兵法ニ早キヲ用ユルコト

兵法ノ早キト云所實ノ道ニアラズ、早キト云事ハ物毎ノ拍子ノ間ニアハスルニ依テ早キ遲キト云心ナリ、其道上手ニナリテハ早ク見エザルモノナリ、假令ヘバ人ニハヤ道ト云フテ四十里五十里行モノモ有リ、是モ朝ヨリ暮マデ早ク走ルニテハナシ、道ノ不勘成ルモノハ一日走ルモ一向ニ捗ユカザルモノナリ、亂舞ノ道ニ上手ノ歌フ謠ニ下手ノ付ケテ謠ヘバオクルヽ心アツテ急ガシキモノナリ、又皷太皷ニ老松ヲウツニ靜カナル位ヰナレドモ下手ハ是ニモオクレ先タツ心有リ、高砂ハ急ナル位ナレドモ、早キト云フコト惡シ、早キハユケルト云ヒテ間ニアハズ、勿論オソキモアシヽ、是モ上手ノスルコトハユルヽ〳〵トミエテ、間ノヌケザル所ナリ、諸事シツケタル者ノヅ

ルコトハ急ガシク見エザルモノナリ、此鍛ヲ以テ道ノ理ヲシルベシ、

殊ニ兵法ノ道ニ於テ早キト云フコト惡シ、是レモソノ仔細ハ所ニヨリテ沼フケナドニテハ身足共ニ早ク行ガタシ、太刀ハイヨ〳〵早ク切ル事ナシ、早ク切ラントスレバ扇小刀ノヤウニハアラデ、ナヤク〳〵分別スベシ、大分ノ兵ト切レバ少シモ切レザルモノナリ、ヨク

法ニシテモ早ク急グ心ワルシ、枕ヲ押コルト云心ニテハ少シモ遲キコトハナキ事ナリ、又人ノムザト早キコトナドニハ背クト云テ靜ニナリ人ニツカザル處肝要ナリ、此心ノ工夫鍛練アルベキ事ナリ

一他流ニ奥表ト云フ事（　）

兵法ノコトニ於テ何レヲ奥ト云ヒ何レヲ表ト云、フレテ極意祕傳ナド云テ奥口アレドモ、敵ト打合時ノ理ニオイテ

△武藏先生ノ本領ヲ見ルベシ他人ノ及ベザル所ナリ

ハ表ニテ戰ヒ奥ヲ以テ切ルト云フ事ハアラズ、我兵法ノ教ヘ樣ハ初テ道ヲ學ブ人ニハ其業ノ成リヨキ所ヲサセ習ハセ、合點ノハヤク行ク理ヲ先ニ教ヘ、心ノ及ビ難キ事ヲバ其人ノ心ヲホドクル所ヲ見分テ次第次第ニ深キ所ノ理ヲ後ニ教ル心ナリ、去レドモ大カタハソノ事ニ對シタル事ナドヲ覺エサスニヨッテ奥口ト云フ所ナキ事ナリ、サレバ世ノ中ニ山ノ奥ヲ尋ルニ猶行カント思ヘバ又口ヘ出ルモノナリ、何事ノ道ニ於テモ奥ノ出合所モアリ、口ヲ出シテ善キ事モアリ此ノ戰ノ利ニ於テ何ヲカ隱シ、何ヲカ顯ハサン、然ルニ依テ我道ヲ傳フルニ誓紙罰文抔ト云事ヲ好マズ、此道ヲ學ブ人ノ智力ヲウカゞヒ、直ナル道ヲ教ヘ、兵法ノ五道六道ノ惡キ所ヲ捨サセ、自ヅカラ武士ノ法ノ實ノ道ニ入リ疑ヒナキ心ニ成ル事我兵法ノ教ノ道ナリ、能

能鍛練有ベシ

右他流ノ兵法ヲ九ケ條トシテ風ノ巻ニ荒増シ書付ル處一々流々ヨリ奥ニ至ルマデ定カニ書顯スベキコトナレドモ、ワザト何流ノ事トモ名ヲ書シルサズ、其故ハ一流〳〵其レ〳〵存分有ルモノナレバ同流ニテモ少々心ノ異ルモノナレバ、後々迄ノ爲メニ流名ナドモ書ノセズ、他流ノ大體九ツニ云分ケテ世ノ中ノ道人ノ直ナル道理ヨリ見レバ、長キニカタブキ短キヲ理ニシテ、強キ弱キト傾ブキ、粗キ細カナルト云事モ皆偏ナル道ナレバ、他流ノ口奥ト現ハサズトモ皆人ノ知ルベキ義ナリ、我一流ニ於テハ太刀ニ奥口ナク、構ヘニ極リナシ、唯心ヲ以テ其德ヲ辨ユルコト是兵法ノ肝心ナリ

空ノ巻

二刀一流ノ兵法ノ道空ノ巻トシテ書顯スコト

空ト云ハ物毎ニ形ナキ所、知レザル事ヲ空ト見立ルナリ、勿論空ハ空ニシテ無ナリ、有ル所ヲ知リテ無キ所ヲ知ル、是空ナリ、世ノ中ニ於テ惡敷ク見レバ、物ヲ辨ヘザル處ヲ空ト見ル處實ノ空ニアラズ、皆迷ウ心ナリ、此兵法ノ道ニ於テモ武士トシテ道ヲ行フニ士ノ法ヲ知ラザル空ニハアラズ、色々迷ヒ有テ詮方ナキ處ヲ空ト云ナレドモ、是實ノ空ニハアラザルナリ、武士ハ兵法ノ道ヲ慥カニ覺エ、其外武藝ヲ能ク覺エ武士ノ行フ道ニモ暗カラズ、心ノ迷フ所ナク、朝々時時ニ怠ラズ、心意二ツノ心ヲ研キ、觀見二ツノ眼ヲ磨キ、少シモ曇リ

無ク迷ヒノ空ノ晴タル所是レ實ノ空ト知ルベキナリ、實ノ道ヲ知ヲザル間ハ佛法ニヨラズ世法ニヨラズ、己レ〳〵ハ慥カ成ル道ト思ヒ善キ事ト思ヘ共、心ノ直道ヨリシテ世ノ大ガネニ合セテ見ル時ハ其身其身ノ心贔負（ヒガミ）ナリ。其目〳〵ノヒズミ（ヒガミ）ニヨル、實ノ道ニハ背ク物ナリ。其心ヲ知テ直ニ成ル所ヲ本トシ、實ノ心ヲ道トシテ兵法ヲ廣ク行ヒ、正敷明ニ大キ成ル所ヲ思ヒ取テ、空ヲ道トシ道ヲ空ト見ル所也

空有善無惡。智者有也。理者有也。道者有也。心者空也。

正保二年五月十二日

新免武藏守玄信　在判

兵法五法之卷

肥後の太守細川忠利公の命によりて武蔵先生が初めて兵法三十五箇條の覺書を自書して奉りしは寛永十八年二月なり、而して五輪書は正保二年に成りしものなれば四年後なり、其の箇條文句の上に於て詳略の差ありと云へども骨子とするところは三十五箇條の外を出でず、故に先生の兵法は此の三十五箇條の覺書を以て根元とし、其他門弟の高足に書與へしもの多少の相違あるも要するに三十五箇條を詳略せしに過ぎず、本文の法書は詰り五輪書を省略したるものにして辭句の間に多少の相違無にあらずと云へども其の精神は全く同一なりと云ふも不可なし、此書は先生が自ら書して門下の最高足寺尾求馬に與へしものなるとは末尾に附記せる寺尾の言にて知るを得べし、故に五輪書を讀むもの更に此書を讀まば彼此相啓發して一層意義の詳かなるを得べし

兵法五法之巻

兵法二刀ノ一流數歳鍛錬仕ル處今始メテ筆紙ニノセ申ス事前後不足ノモノト難申分候へ共常々仕覺ェ候兵法ノ太刀筋心持以下任存出大形書顯シ候者也

一此道二刀ト名付ル事　道二刀トシテ太刀ヲ二ツ持ツ儀左ノ手ニ左シテ心ナシ、太刀ヲ片手ニテ取リ習ハセン爲ナリ、片手ニテ持得ル時ハ重、川、沼、細道、石原、人籠、駈走リ、若シ左手ニ道具ナド持タル時ハ不如意ニ候ヘバ片手ニテ取候也、太刀ヲ取候事初メハ重ク覺ユレドモ後ハ自由ニ成候ナリ、タトヘバ弓ヲ射習ヒテ其力強ク、馬ニ乘覺ェテハ其力有リ、凡ソ下々ノワザ水夫ハ櫓櫂ヲ取テ其力強シ、太刀モ取リ習フ人ハ身ニ應ジタル太刀ヲ持ベキモノナリ

一兵法ノ道見立處ロノ事　此道大分ノ兵法一身ノ兵法ニ至マデ心ハ皆同ジコトナルベシ、今書記ス一身ノ兵法モ譬ヘハ心ヲ大將トシ、手足ヲ臣下郎等ト思ヒ、太刀、刀ヲ歩卒士民トナシ、國ヲ治メ身ヲ修ムル事大小共ニ兵法ノ意ニ同ジ、兵法ノ仕立樣惣體一同

ニシテ餘ル處ナシ、不足ノ處ナク、不強不弱、頭ヨリ足ノウラ迄ヒシト心ナクバリ、片ツリナキヤウニ仕立事也

一太刀取樣ノ事　太刀ノ取樣ハ大指人差シ指ヲ受ケ丈高指、藥リ指、小指ヲシメテ持候也、太刀ニモ手ニモ生死ト云フ事アリ、樺ユル時受ル時、留ル時ニモ肝心切事ヲ忘レテ居付ヲ手足死ルト云ナリ、生ルト云ハ何時トナク太刀モ手モ出合ヒヤスク固マラズシテ切能樣ニ安ラカナルヲ是レ生ル手ト云也、手首ハカラム事ナク、ヒザハ伸スギズ、カヽミスギズ腕ノ上筋弱ク、下筋強ク持ナリ

一身ノカヽリノ事　身體ノ樺ヘハ顔ハ俯伏カズ又餘リ仰ノカズ、肩ハサヽズ、ヒツマズ、胸ヲ出サズ、腹ヲ出シ、腰ヲ屈メズ、膝ヲ屈メズ、體ヲ眞向ニシテ、肩張リ廣クシテ見ス・ルモノナリ、常住兵法ノ身即チ常ノ身ト云フ事能々吟味アルベシ

一足フミノ事　足ヅカヒ時ニヨリテ大小遲速アレドモ常ニ歩ムガ如シ、足ニ嫌フ事、飛足、浮キ足、踏ミ据ユル足、拔足、後レ先ダツ足、是皆嫌フ足ナリ、足場如何程難所ナリトモ介意ナキヤウニ能ニ落付キ、足ノ出ニ付テ能々吟味スベキ事ナリ

一目付ト云フ事　目ヲ付ト云フ事色々アレドモ今傳ル處ノ目付ハ大抵顔ニ目ヲ付ル也、目ノヲサメ樣ハ常ノ目ヨリモ少シ細キ樣ニシテウラヤカ（朗ラカノ意ナリ）ニ見ル也、目ノ玉ヲ動カサズ、敵合近クトモ如何程モ遠クノ見ル目デモ見ユル目ナリ、觀見二ツノ見樣ハ觀ノ目強ク、見ノ目弱ク見ルベシ、若シ又敵ニシラスルト云フ口アリ、意ハ目ニ付心ハ不付モノナリ、能々〳〵吟味アルベシ

一五方ノ構ノ次第

△返ニ切先ニ中段　敵合ヒ遠キ時ハ刀ヲ提ゲ、敵ノ刀屆カヌ程ニヨリ、身ヲ眞向キニ、目ノ玉ヲ動クニ立テ、（ロクトハ眞直ノコトナリ）左右ノ手ヲ前ニ出シ、太刀大小ノ及ヲ餘リ立テズ、ヒラメズ（切先ヲ橫ニ平タクセヌナリ）、少シスジカエテ（斜ニスルナリ）、懷中ヲ廣ク、少シ大小ヲ組ミタルヤウニ中段ニ持チ餘リ突出サズ、肱ヲカラメズ、コサズ、右ノ太刀先少シ上グル心ニテ、劍尖ノ中筋ニ有ヤウニ構ヘ、心ザシノ心ヲカロク、心ノ心ヲ殘シテ、敵打出ス心ヲ受ケ、敵ノ打太刀ニ當ラザルゴトク向ノ顔ニ突カケ、敵ニ匠ミヲ失ナハセ、是非モナク打所ヲ切先ヲカエシテ上ヨリ手ヲ打ナリ、其太刀前ニ捨タル如ク提ゲテ我身ヲ動カサズ、敵又打カクル所

ナ三分一ニテ下ユリ手ナ張ルモノナリ、惣別敵ノ打タント思フ心ノ頭ニ我心ナツケ、先先ト心ガクルモノナリ、此太刀何レヘモ出合ナリ、能々分別スベシ

△ギダンノ構、上段　ギダンノ構ハ右ノ手ナ耳ニ比ブルト云フ心、太刀ノ柄先開ク心ナリ、手ノ内シカズ、クツロゲズ、マヘセバニカマユルナリ、左ハサシ出サズ、少シ上中下ノ心ハ敵ノ構ニ有リ、打出ス事遅速浅深輕重アリ、何レモ敵ノ打ニユルコトナリ、表クシクハ敵ノ手ナ打ナリ、太刀筋下ヘ打事ナシ、向フヘ打モノナリ、サテ太刀筋喝咄スルトキ太刀ノ又ナ立テ敵ノ打處ノ手ナ突ク心ナリ、カケテ打上ル事、敵ノ太刀ニ當リテモ、當ラズトモ同シ事ナリ、我手前違ハヌヤウ早ク打事專ナリ、喝咄ツトク太刀筋ナレバ着ル事モアリ、敵合近クシテハナリガタシ受テ取ナリ、分別スベシ

△ウチヨクノ構、右脇　ウチヨクノ構ハ太刀ナ右ノ脇ニ捨ル心ニ構ヘ、左ハ高クナグヤウニ手ナ深ク組ミ、又ヘヌヤウニ持チ、敵打ニ當ル事是二分一ニシテ當ツル、打オトサント思フ時當ル心ニテ少シ下ナ抜キ筋カヘテ切ルナリ、早キ事肝要ナリ、太刀筋歪ムコトナク直ル所ハ喝咄、切先返シタルベシ

△重氣ノ構、左脇　重氣ノ構ニ二ツノ構ヘ有リ、表トシテハ太刀ナ前ニ捨テ構ヘ、太刀先左ヘヨセズシテ敵ノ打出スニ三分一ト云フ心ニシテアル、其ノ當テヤウ我手ナ上ゲテ敵ノ太刀先ニ手ノ無キヤウニ突キ出シテ當ツル、何レモ太刀筋切先返ヘシニ直ル心有リ、又一ツニハ切先向ニシテ我右ノ足ニ手ナ付ケ、提サグルト云フ心持ニテ敵ノ心ノ發ル所ナ打ツ、淺深强弱ハ敵ノ心ニヨルコトナリ、此太刀能々分別スベシ

△スイケイノ構、下段　スイケイノ構ハ太刀先開カズ、左ノ手ナ突出ダス、左右ノ手ナトコロナ廣ク構ヘ、肱ナ伸サヌヤウニシテ構ヘ振出スコト、敵ノ打手ナ筋カヘテ、額ノ上ニ振アゲ打事、敵ノ中筋ナ打ナリ、前廣ニ打心アリ、左ヘ筋カヘ打ツ事悪シ、太刀筋ヘ切先返ヘシニナラル事ナリ、又事ニヨリウチヨクノ構ニナスコトモアリ、分別スベシ、總テ太刀構五方ニスキズ、敵ナ打ト云フ事ハ太刀ノ道二ツナシ

一間積ノ事　間ナ積ルコト他ニハ色々アレドモ今傳ル處別ノ心アルベカラズ、何レノ道ナリトモ其事ニナレバ能ク知ルトモノナリ、大形ハ我太刀モ我ニアタラントト思フベシ、人ナ討ントスレバ我身ナ忘ルトモノナリ、能々吟味スベシ

一心持ノ事　心ノ持ヤウハ緊ラズ、カ、ニ寛クシテ意ノ心ヲ輕ク、心ノ心ヲ重ク、碧潭ノ色アリ、一滴ニモアリ、海洋ニモアリ、能々工夫スベシ

一兵法上中下ノ位ヲ知ル事　兵法ニ身構ヘアリ、太刀ニモ色々構ヲ見セ、强ク見エ早ク見ユル兵法是下段ト知ベシ、又兵法細カニ見エ、術ヲ衒ヒテ拍子ヨキヤウニ見エ、其品綺羅アリテ見事ニ見ユル兵法是中段ノ位ナリ、上段ノ位ノ兵法ハ强カラズ、弱カラズ、角ラシカラズ、早カラズ、見事ニモナク、悪クモ見エズ、大キニ直ニシテ靜ニ見ユル兵法是上段ノ位ナリ、能々吟味スベシ

一糸カヽト云事（糸ガヽトハ糸金ナリ、糸ハ大工ノ用ユル墨縄ニシテ、金ハ曲尺、即チ差金ナリト知ルベシ）常ニイトガヽナ心ニ持ベシ、（已ガ心ヲ糸金ニシテ萬事ヲ計ルナリ）相手毎ニ糸ヲ付テ見レバ强キ處、弱キ所、直ナル處、歪ム處、張ル處、タルム處、皆見ユルナリ、我心ヲカヽニシテ眞直ニ糸ヲ引テ見レバ人ノ心ヨク知ルモノナリ、其カヽニテ丸キモ、角ナルモ、長キモ、短キモ、歪ミタルモ、直ナルモ能クシル

一太刀ノ道ノ事　太刀ノ道ヲ能ク知ラザレヘ太刀心ノマヽニ振リガタシ、太刀ノムキヒラヲ辨マヘズ、或ハ太刀ヲ小刀ノ如ク、或ハソクヒ筈ナドノヤウニ粗末ニ仕ツクレバ、肝心ノ敵ヲ切ル時ノ心ニ出合ガタシ、常ニ太刀ノ道ヲ辨ヘテ、重キ太刀ノ樣ニ太刀ヲ靜ニ大切ニシテ敵ニ能ク當ルト云フ事鍛錬アルベシ

一打トアタルト云フ事　打トアタルト云フ事、何レノ太刀ニテモアレ打處ヲタヾシカト覺エ、試シ物ナド切ヤウニ思フサマ打事ナリ、又當ルト云フコトハ慥ナル打身見エザル時、何レナリトモ當ルコトアリ、當リニモ强キハアレトモ打ニハアラズ、敵ノ身ニ當リテモ太刀ニ當リテモ又當リ外シテモ苦シカラズ、眞ノ打ヲセントテ手足ヲ起シ立ル心ナリ、能々工夫スベシ

一三ツノ先ト云フ事　三ツノ先ト云フハ、一ツニハ我敵ノ方ヘ仕懸ル先ナリ、二ツニハ敵我方ヘ仕懸ル時ノ先ナリ、三ツニハ我モ懸リ敵モ掛ル時ノ先ナリ、是三ツノ先ナリ、我掛ル時ノ先ハ身ハ掛ル身ニシテ足ト心ヲ中ニ殘シ、タルマス（倦忘セヌナリ）、張ズ、敵ノ心ヲ動カサズ是懸ノ先ナリ、又敵カヽリ來ル時ノ先ハ我身ニ心ナクシテ程近キ時心ヲ

放チ、敵ノ動キニ隨ヒ其儘先ニナルベシ、又双方一時ニ懸リ合ノ時、我身ヲ强クロ(ロクハ正シクナリ)ニシテ太刀ニテナリトモ、身ニテナリトモ、足ニテナリトモ、心ニテナリトモ先ニナルベシ、先ヲ取ルコト肝要ナリ

一太刀ニカハル身ノ事(カハルハ、代ルニテ身ヲ以テ太刀ニ代フルナリ)　太刀ニカハル身ト云フハ太刀ヲ打出ス時ハ身ハ連レヌモノナリ、又身ヲ打ト見スル時太刀ハアトヨリ打ツ心ナリ、是空ノ心ナリ、太刀ト身ト心ト一度ニ打ツコトナシ、中ニ在ル心、中ニ在ル身ヨク〳〵吟味スベシ

一陰陽二ツ足ト云フ事　陰陽二ツノ足トハ太刀一ツ打内ニ足ハ二ツ運ブモノナリ、太刀ニ乘リ、ハヅレ、繼モ引モ足ハ二ツノモノナリ、足ヲ繼ト云心是ナリ、太刀一ツニ足一ツ、跡ハ居付キハマルモノナリ、二ツト思ヘハ常ニ歩ム足ナリ、ヨク〳〵工夫スベシ

一劔ヲフムト云フ事　敵ノ打カクル太刀ノ先ヲ足ニテフマユルト云フ心ナリ、敵ノ打カクル太刀ノ落付所ヲ我左ノ足ニテフマユル心ナリ、フマユルトキ太刀ニテモ身ニテモ心ニテモ先ヲカクレバイカ樣ニモ勝ツ位ナリ、此心ナケレバドタン〳〵トタガヒニナリテアシキナリ、劔ヲフムコト度々ニハアラズ、能々工夫スベシ

一陰ヲオサユルト云フ事　陰ノ影ヲ押ユルト云フ事、敵ノ身ノ内ヲ見ルニ心ノ餘リ所モアリ、不足所モアリ、我太刀モ餘リタル所ヘ氣ヲ付ルヤウニシテ、足ラヌ所ノ隙ニ其儘ツケバ敵拍子マカヒテ(亂レテナリ)勝ヨキモノナリ、サレドモ我心ニ殘シ打所ヲ忘レヤル所肝要ナリ、工夫アルベシ

一影ヲ動カサズト云フ事　影ハ陽ノカゲナリ、敵太刀ヲ控ヘ身ヲ出シテ構ユル時、心ハ敵ノ太刀ヲ恐レ、身ヲ空ニシテ敵ノ出タル所ヲ太刀ニテ打バ必ズ敵ノ身動キ出ルナリ、動キ出レバ勝ツコトヤスシ、昔ハ無キコトナリ、今ハ居付心ヲ嫌ヒテ出タル所ヲ打ナリ、ヨク〳〵工夫スベシ

一弦ヲハヅスト云フ事　弦ヲハヅストハ敵モ我モ心引ハルコトアリ、身ニテモ、太刀ニテモ、足ニテモ、心ニテモ、早クハヅスモノナリ、敵思ヒヨラザル所ニテヨク〳〵ハヅルヽモノナリ、工夫アルベシ

一尾櫛ノナシヘノ事　尾櫛ノ心ハ結ボルヲ解クト云フ義ナリ、我心ニ櫛ヲ持テ敵ノ

スボラカス所ナソレ〳〵ニ隨ヒ解ク心ナリ、結ボルト引ハルト似タレドモ引ハルハ强キ心、結ボルハ弱キ心、ヨク〳〵吟味アルベシ

一拍子ノ間ヲ知ルト云フ事　拍子ノ間ナシルハ敵ニヨリ早キモアリ、遲キモアリ、敵ニ隨フ拍子ナリ、心遲キ敵ニハ太刀合ニナルト我身ヲ動カサズ、太刀ノ起リヲ知ラセズ、早ク空ニアタルコト一拍子也、敵氣ノ早キニハ我身ト心ヲ打チ、敵動キノ後ヲ打コト是ヲ殘シト云ナリ、又無念無想ト云フハ身ヲ打ヤウニナシ、心ト太刀ハ殘シ、敵ノ氣ノ間ヲ空ヨリツヨク打ツ、是レ無念無想ナリ、又後レ拍子ト云フハ敵太刀ニテ張ラントシ突ケントスル時、如何ニモ遲ク中ニテ淀ム心ニシテ間ヲ打コト是レ後レ拍子ナリ、ヨク工夫スベシ

一枕ヲ押ユルト云フ事　枕ヲ押ユルト云ハ敵太刀ヲ打出サントスル氣ザシヲ受ケ、打ント思フ其ノ°ウノ字ノ頭ヲ空ヨリ押ユルナリ、其ノ押ヘヤウハ心ニテモ身ニテモ太刀ニテモ押ユルモノナリ、此氣ザシヲ知レバ敵ヲ打ニモヨシ、入ニモヨシ、ハヅスニモヨシ、先ヲカクルニモヨシ、何レニモ出合フ心アリ、鍛練肝要ナリ

一ネバリヲカクルト云フ事（ネバリハ粘ナリ、粘着シテ敵ノ太刀ヲ苦シムルナリ）　粘リヲカクルトハ敵ニ太刀ヲ打カケ、敵太刀ニテ受ケ早クハヅサントスル時、心ヲ太刀ニツケ、粘ルナリ、斯クスレバ敵ノ先ノ拍子違フナリ

一景氣ヲシルト云フ事　景氣ヲシルト云ハ其場ノ景氣、其敵ノ景氣、浮沈淺深强弱ノ景氣能々知ルベキモノナリ、糸カネト云ハ常々ノ義、景氣ハ即座ノコトナリ、時ノ景氣ヲ見受ケナバ前ニ向テモ勝ツ、後ニ向テモ勝ツ、能ク〳〵工夫スベシ

一敵ニ成ルト云フ事　我身ヲ敵ニナリテ思フベシ、或ハ一人取籠リ、又ハ大敵カ、其ノ道達者ナル者ニ逢フカ、敵ノ心ノ堪ヘガタキヲ思ヒトルベシ、敵ノ心ノ迷フヲ知ラズシテ弱キヲモ强キト思ヒ、道不達者成者モ達者ニ見ナシ、小敵モ大敵ト見ル、利無キ敵ニ利ヲ取付ルコトアリ、我レ敵ニナリテヨク分別スベキナリ

一殘心放心ノ事　殘心放心ハ事ニヨリ時ニ隨フモノナリ、我太刀ヲ取テ常ニハ心ノ心ヲ放チ、心ノ心ヲ殘スモノナリ、又敵ヲ儘カニ打時ハ心ノ心ヲ放チ、意ノ心ヲノコス、殘心放心ノ見立色々アルモノナリ、能ク〳〵工夫スベシ

一縁ノアタリト云フ事　縁ノ當リト云ハ敵太刀ニテ切カクルニ其間近キ時ハ我太刀ニテ張ルコトモアリ、ウケルコトモアリ、當ルコトモアリ、受クルモ、張ルモ、當ルモ、敵ヲ打太刀ノ縁ト思フベシ、切ルモ外スモ、突クモ皆打ノ爲ナレバ、我身モ心モ太刀モ常ニ打タル心ナリ、ヨク〳〵吟味スベシ

一シツカウノツキト云フ事（シツコウハ漆膠ナリ、敵ノ身ニ我身ヲ密着セシムルナリ）　シツカウノ突トハ敵ノ身側ニヨリテノコトナリ、足腰カシラ迄モ隙ナク能ク着キテ、漆膠ニテ物ヲ着クルニ譬ヘタリ、身ニ着カヌ處アレバ敵色々ワザヲスルコトアリ、敵ニツク拍子枕ノオサヘニシテ靜ナル心ナルベシ

一シツカウノ身ト云フ事　シツカウノ身、敵ニ着ク時左右ノ手ナキ心ニシテ敵ノ身ニ着クベシ、悪クスレバ身ハ退キ手ヲ出スモノナリ、手ヲ出セバ身ハ退クモノナリ、若シ左ノ肩肱迄ハ役ニアルベシ手先ニ心アルベカラズ、敵ニ着ク拍子ハ前ニ同ジ

一タケクラベト云フ事（タケクラベハ身材比ベナリ敵ノ身ノタケト比ベルナリ）　タケヲ比ブルト云フ事ハ敵ノ身ト我身ノタケヲ比ブルヤウニシテ我身ヲ延バシテ敵ノ身材ヨリ我身材高クナルベシ

身側ヘ付拍子ハ何レモ同意ナリ、ヨク〳〵工夫スベシ

一扉ノ敎ヘト云フ事　扉ノ身トハ敵ノ身ニ付時、我身ノ幅ヲ廣ク直ニシテ敵ノ太刀モ身モ立カクス樣ニナリテ、敵ト我身ノ間隙ナキヤウニ付ベシ、又身ヲソバメル時ハ如何ニモ薄ク直ニナリテ敵ノ胸ニ我肩ヲ強ク當ツベシ、敵ヲ空ニタラス身ナリ、工夫スベシ

一將卒ノ敎ノ事　將卒ト云ハ兵法ノ理ヲ身ニ受ケテハ敵ヲ卒ニ見ナシ、我身ハ將ニナリテ敵ニ少モ自由ヲサセズ、太刀ヲ振センモ、スクマセンモ皆我心ノ下知ニ付テ敵ノ心ニ匠ミヲ失ハセ業ヲサセザルヤウニアルベシ、此事肝要ナリ

一有構無構ノ事　有構無構ト云フ事、太刀ヲ取テ身ノ中ニ置ク所、何レモ構ユル心アルニヨッテ太刀居付身モ居付モノナリ、所ニヨリ事ニ隨ガヒ何レニ太刀ハアリトモ構ユルト云フ心ナリ、敵ニ相應ノコトナレバ上段ノ内ニモ三ツノ色アリ、左右脇マデモ同ジ心ナリ、能々吟味有ベシ

一場ノ次第ト云フ事　場ノ位ヲ見分ル所場ニ於テ日ヲ負フト云フコトアリ、日ヲ後ニナシテ構ユルナリ、若シ所ニヨリテ日ヲ後方ニスルコトナラザルトキハ右脇ニ日ヲナス

ヤウニスベシ、座敷ニテモ明リヲ後ロ又右脇トナスコト同前ナリ、後ノ場ツマラザルヤウニ左ノ場ヲクツロゲ、右ノ脇ノ場ヲ詰メテ構ヘタキコトナリ、夜ニテモ敵ノ見ユルトコロニテハ火ヲ後ニ負ヒ、明リヲ右脇ニスルコト同前ト心得テ構ユベキモノナリ、敵ヲ見下スト云テ少モタカキ所ニ構ユルヤウニ心得ベシ、座敷ニテハ上座ヲタカキ所ト思フベシ、扨戦ニナリテ敵ヲ追廻ハスコト弥左ノ方ヘ追マハス心、總テ難所ヲ敵ノ後ロニサセ、何レニテモ難所ヘ追カクルコト肝要ナリ、難所ニテ敵ニ場ヲ見セズト云フテ、敵ニ顔ヲフラセズ油斷ナクセリツムル心ナリ、座敷ニテモ鴨居戸障子様ナド又柱ナドノ方ヘ追ツムルニモ場ヲ見セズト云コト同前ナリ、何レモ敵ヲ追カクル方足場ノワルキ所、又ハ脇ニカマヒノアル所、何レモ場ノ德ヲ用ヰテ場ノ勝ヲ得ルト云フ心專ナリ、能々吟味シ鍛練アルベキ者ナリ

一多敵ノ位ノ事　多敵ノ位ト云フハ一身ニシテ大勢ト戰フ時ノコトナリ、我刀脇差ヲヌキ左右ニ廣ク太刀ヲ横ニステヽ構ユルナリ、敵ハ四方ヨリカヽルトモ一方ヘ追ヒ廻ハス心ナリ、敵カヽル位ヰ前後ヲ見分ケテ先ヘ進ムモノニ早ク行合ヒ、大キニ目ヲ付ケテ

敵打出ス位ヲ得テ、右ノ太刀モ左ノ太刀モ一度ニ振違ヘテ、行ク太刀ニテ其敵ヲ切リ、戻ル太刀ニテ脇ニ進ム敵ヲ切ル心ナリ、太刀ヲ振リチガヘテ待ツコト惡シ、早ク兩脇ノ位ニ構ヘ敵ノ出タル所ヲ強ク切込ミ追崩シテ其マヽ又敵ノ出タル方ヘカヽリ振崩ス心ナリ、如何ニモシテ敵ヲ一重ニ魚ツナギニオヒナス心ニ仕カケテ、敵ノ重ナルト見バ其マ間ヲスカサズ強ク拂ヒ込ムベシ、敵合コム所ヘ、ヒタト追廻ハシヌレバ拂行キガタシ、又敵ノ出ヅル方〳〵ト思ヘバ待心アリテ拂行キガタシ、敵ノ拍子ヲ受ケテ崩ルヽ所ヲシリ勝コトナリ、折々相手ヲ數多寄セ追込ミツケテ其心ヲ得レバ、一人ノ敵モ十、二十ノ敵モ心ヤスキコトナリ、能ク稽古シテ吟味アルベシ

一岩尾ノ身トナル事（岩尾ハ巖ノ義ナリト知ルベシ）　岩尾ノ身ニナルト云フハ動ク心ナク強ク大キニナル心ナリ、石ニ精アリ心ハナシ、同ジコトナリ、自カラ萬理ヲ得テ盡キセヌ事ナレバ生アル者ハヨク心有リ、降雨吹風迄モ能ク〳〵吟味アルベシ

一機ヲ知ルト云フ事　機ヲ知ルト云フハ早キ機ヲ知リ、晩キ機ヲ知リ、遁ルヽ機ヲ知リ、遁レザル機ヲ知ルコトナリ、一流ノ直通ト云フ極意ノ太刀アリ、此コト口傳ナリ

一萬理一空ノ事　萬理一空ノ處、書顯ハシガタシ自ラ工夫可有者也、

書付ル處一流ノ劍術大形此ノ書ニ記シ置クコトナリ、右兵法太刀ヲ取テ人ニ勝所ヲ覺ユルハ、先ヅ五ツノ表ヲ以テ五方ノ構ヲ知リ、太刀ノ道ヲ覺エテ總體柔ラカニナリ、心ノ機ニ出テ道ノ拍子ヲシリ、己ト太刀モ手サエテ身モ足モ心ノマヽニ解ケタル時ニ隨ヒ、一人ニ勝チ二人ニ勝チ兵法ノ善惡ヲ知ル程ニ成リ、此一書ノ内ヲ一ケ條〳〵ト稽古シテ敵ト戰ヒ、次第〳〵ニ道理ヲ得テ絶エズ心ニカケ、怠心ナクシテ折々手ニ觸テハ德ヲ覺エ、何レノ人トモ打合ヒ其心ヲ知テ千里ノ道モ一足ヅヽ運ブナリ、ユル〳〵ト思ヒ此法ヲ行フコト武士ノ役ナリト心得テ、今日ハ昨日ノ我ニ勝チ、明日ハ下手ニ勝チ、後ハ上手ニ勝ト思ヒ、此書物ノ如クシテ少モ脇ノ道ヘ心ノ歪マヌヤウニ思フベシ、縱令何程ノ敵ニ打勝テモ習ヒニ背クニ於テハ眞ノ道ニ有ベカラズ、此理心ニ浮ミテハ一身ヲ以テ數十人ニ勝ツ心ノ辨ヘ有ベシ、然ル上ハ劍術ノ智力ニテ大分一分ノ兵法ヲモ得道スヘシ、千日ノ稽古ヲ鍛トシ萬日ノ修行ヲ練トス、能々工夫アルベキ者也

右四十二ケ條

寛永十八年二月朔日

此書タルコト玄信先生若年ヨリ此道ニ志シ、諸能諸藝ニ渡リ、其道々ニ於テモ兵法ノ道理ヲ以テ自ラ其ノ極意ヲ得、天下ニ名ヲ發スル兵法者ニ打勝チ、其後日本國於ニ所々一對ニ兵法之達者一眞劍木刀ノ勝負六十餘度ニ及ブト云ドモ一度モ不レ失ニ其利一、イヨ〳〵深遠ニ至ラント朝鍛夕練シテ、歳五十ニシテ直通至極ニ到リ、是ヨリ尋子入ベキ理モナク光蔭ヲ送ル、此時迄ハ兵法ノ書タルコトヲ顯ハサズ、干茲前肥州ノ太守羽林忠利公此道數寄玉フ故、諸流ノ兵法稽古シ玉ヒシニ、其頃天下無雙ノ聞エアル劍術ノ兵法柳生但馬守一流ノ奥義ヲ究メラレ、恐クハ此理ニ誰カ如ク者アラント自贊シ玉ヒ、先生ト力ヲクラベラルヽニ一度モ勝利ナシ、因レ茲初メテ驚テ兵法ヲ先生ニ尋玉フ、先生ノ曰ク、兵法ノ心法何レノ流ニヨラズ至誠ノ道ハ我ナス處ニ隨ハザレバ眞ノ道ニアラズト、公ノ曰ク、吾不敏ナリト雖モ必ズ此道ヲ傳受セント、因レ茲初テ此書ヲ作リ奉ニ授與一因テ先生親敷公ニ兵法ノ道ヲ說クニ

公幸ヒニ兵法ヲ知ルニヨリ卽時ニ道理通達シ、吾若年ヨリ劍術ニ志シ諸流ヲ試ミ鍛練セ

シ「一ツモ眞ノ道ニアラズ、多年ノ修行此ニ敗レ無トスル哉ト感ジ悦ビ玉フコト不レ斜、然ニ吾信行如何ナル宿緣ニテカ先生ノ志シ他ニ異ニシテ因緣深カリケレバ、此道ヲ稽古シ先生ノ心源ヲ移シ得テ道ヲ得タリ、先生ノ曰ク、吾一朝ニシテ千君萬卒ニ此道ヲ指南スト雖ドモ一人モ眞道ニ移ラズ、眞道ヲ得ザレバ誠ノ傳受顯スコトナシ、信行兵法ノ智賢ク一ヲ以テ十ヲサトル、其器萬人ニ超タルガ故ニ兵法ノ通利自在ヲ得コト珍ナル哉、妙ナル哉ト感ゼシメ玉フ、去レドモ此道タルコト劍術ノ法ニチガヒテ好ク人稀ニシテ尋ヌル者無シ、尋ヌレドモ眞實ノ志ヲ以テセズ、心ヲ心トスルノ道ナレバ不レ隨ニ人之心一言フベカラズ、鼻ヲ以テ口トスルニ不レ如ト深ク祕シテ數歲ヲ經、閣々トシテ不知ガ如ク光陰ヲ送ル、于茲自信形安東之性平正俊ヲ友トシテ多年兵法ヲ修得シ、此便利一生ニ得ンコトヲ願フ、眞實ノ志吾是ヲ知レリ、志ノ切ナルハ必然トシテ至ルコトアリ、何ゾ誤ント兵法ノ眞理ヲ說顯ハシ直通傳受ノ口傳於ニ指南一ト一トシテ無ニ殘事一相傳シ、已ニ令レ到ニ至極之道一、因レ茲此師傳ノ書ヲ與フ世ニ稀ナル所ナリ、萬理一空、非通無應ナレバ名號ニ實相圓滿之兵法、逝去不絕ニ天一流一矣

寛文六丙午歲中秋中旬之日

寺尾求馬信行

兵法心氣體覺書

戰機二天流

武藏流修行心得之事

二刀一流極意條々

武藏守藤原玄信先生―寺尾求馬信行―（信行五男）寺尾藤次玄高―（嫡子）志方半兵
ヱ之經―（之經嫡子）志方半七之鄕―（之經四男）新免辨之助玄直―
（之經傳授）志方弥左ヱ門之唯→（之經傳授）岡島要右ヱ門好和→淺井栄廣（天保十年十月十八日七四才歿）

是等の書は必ずしも武藏先生の自著にはあらず、門人等が師の說を聞き平常心に記し手に存するところを傳へ記したるものなり、故に其の言全く師說と同じく毫も異說ある無しと云へども、中には自ら門人自己の見識を以て師說を咀嚼解說して多少の工夫を見るもの無きにあらず、此意を以て之を讀まば劍道を學ぶに於て利するところ少なからざる可し、書中淺井新右衞門榮廣とあるは、武藏流を汲みたる一劍道家にして岡島要右衞門好和に學び、岡島は志方之唯に、之唯は新免辨之助玄直に、玄直は志方之鄕に學びたるものなるが之鄕の父半兵衞之經の師は實に先生第一の高弟寺尾求馬信行の四男新免辨助信森の實弟なり

兵法心氣體覺書

一ツリ、イツキ、カタマリ、リキミ、スクミ、シマリ、ユルミ、大方如此ハ兵法病之自由ナラザル事ナリ、譬ヘバツリハ筋ナドノツリハエタル糸ノツリタルヤウナリ、イツキハスハリテ立ニクキヤウナリ、カタマリハ水ノ氷タルヤウナリ、スクミハ居スクミ病ニテ足ナドノスクミタルヤウナリ、此ノシマリハ、クサビシムルト云コトヽハ大ニ違フナリ、ユルミハ弱ミ怠ナリ、太刀ヲ取テ立氣體ヲ吟味シテ一々トキホドキ、氷ノトケテ本ノ水ニナリタル如ク自由之體ニ可成ナリ、打込テ太刀ノヒシ〳〵トスル事ツリシマリナリ、三六目之先ニナリニクキ事ナリ

一心氣間斷ナキ事、第一間斷ハ絕間切間也、達人ハ間斷ナシ、其以下ハ位ノ品段ニヨリ切間モ多少アル事ナリ、能々心ヲ吟味シテ大キナル透間ナキヤウニスルナリ、絕間覺ユルハ修行工夫ノ印ナリ、達人ハ敵ノ心氣僅ノ間斷モ氣ニ通ジテ其切間ノ圖ヲスカサズ勝ツ事ナリ、道ヲ不知人ハ奇妙不思議之事ニ思ヘドモ不思議ハナシ、不鍛練ナレバ間

斷ヲ見付ケザルナリ、見ツケテモ圖ヲスカス故勝タザルナリ、功ノユキタルニ法ハ絶切(ダエキレ)テ負(マケ)ニナル事ヲ覺リ、其誤ヲ早クトリ直スナリ

一稽古最初ニ體早クスルハ、靜ニシテハ勢氣發シカヌル故ナリ、其レモ人ニヨル事、體早シテハ心法之吟味ナリニクシ

一位ヲ靜ニシテ心ヲ治ムル工夫之事、位ヲ靜ニシテ氣ヲ發スル工夫之事、但シ工夫不足ナレバ靜ニスレバ心氣體緩ニシテ眠リタルヤウニ惰氣ニ落入リ弱クナリ、死氣死體ニナリ、敵ノ心氣ノ出ル頭、入ルトコロ、思フ頭、匠ム所都テ間斷眼ニカヽリテモ心ノ儘ニスル事ナラズ、敵ノ立直シ心ニ先ヲ待タル所ニ圖ヲヌカシ、打タリ入タリスル故大負ヲスルナリ、靜ニ和シタル位ヨリ早キ拍子强キ拍子ハ出ルナリ、腹ト足ノ踏ミヤウニテ早キ拍子ハナル事ナリ、工夫分別入事ナリ

一心氣體一ツモツレ行ハ眼見エズ、敵之虛實見分カザルモノナリ、ハマル事大ニ嫌フ事ナリ

一位ヲ靜ニシテ心ヲ治レハ敵ノ事能ク見ユル者ナリ

一足間廣ク踏ハ自由ナリニクシ、體モ氣モヽユルゾカシ、餘リセバケレバ惡シ、敵ノ心氣崩ル時入込時ハ大足ニフミ、亦飛掛リモスルナリ、一ガイニハ定メガタシ、敵ニヨル事ゾカシ、猥ニ無用ノ足一足モ踏ズ慥カニ先ノ足ヲ踏ムベシ、足亂ルレバ心氣慥カナラズ、猥リニ無用ノ足ヲフムハ大負也

一心氣體之三ツヲツカイ分ケル事ナリ、分カラザレバ心ハ體ニツレズト云事、如何ニ體早キ時モ心ハ早カラズト云事、體ヲ掛リテ心ヲ殘スト云事、殘心放心ノ事、體ニテ先ヲシカケテ敵ノ氣ヲ破ル事、體ヲハゲシク働カシテ心ノ動キ亂レザル事、心氣體ワカラザレバ不レ成事ナリ、工夫分別要ル事也

一氣之伸ト氣ノ越ト仕分ル事

一氣ヲ放シカクルト氣ノサキダツト仕分ル事

一恐ルレバ縮テ勇氣不レ發、敵之氣サカンニナル也

一心氣體之死生吟味シテツカイ覺ル事ナリ、惡ク心得バ死ニナル也

一心强クナリ不動シテ靜ニ、油斷ナク間斷ナク、功意ナク、時明ニナル事大本也

二氣ヲ强ノ發シテ氣之勢之事

一眞中ニ立體之事、腹ヲ出シ體之勢ヒ之事

總而不足モ、過ルモ、片付思ヒモ悪キ事ナリ、一條一理ヲ聞テハ二ツモ三モ見行クヤウニ工夫スルナリ、管ニテ天ヲ覗キ箱ノ内ニ居ルヤウニ狹々敷シテハ成リガタシ、大ニ眼ヲツケテ萬理ニ推シ廣ムルナリ、亦小キ事モ可レ知、委ク不レ見バ兵法大荒目也、習ヒ覺エタル迄ニテハ假物ナリ、自分之兵法自分ニ直シ、自悟シテ我物ト爲スベキナリ、心智直正ナレバ見誤マジキコトナリ

稽古心得

△稽古ナバ疑ホドニ工夫セヨ解タルアトガ悟ナリケリ

無智不器量大ナリ

△ウカ〳〵ト吟味モナクテ習フナバ何ヲ相手ニ教フベキカハ

△物ゴトニ疑ヒ深キ其人ハ疑ヒノミデクラシコソスレ

此疑者曲リテ昏愚ノ人ナリ

疑ハ道ノ病ナリ

古語（小疑之下有二小悟一／大疑之下有二大悟一）

△不器用モ器用モトモニ實有テ功ガツモレバ道ヲ知ルベシ

寒流帶レ月澄如レ鏡

師之口傳曰

一敵ヨリ出テモ此方ヨリ出テモ、一歩始ル處則チ勝ナリ、亦曰惡事仕盡トキハ可負樣ナシ、一切ノ惡鋪仕盡ユエガ祕事也

一三ノ色トハ敵ノ動ニ從テ應ズルヲ云ナリ、敵ノ來ルカ引カ居付カノ三ツノ色ナリ、是大事也

一太刀ノ德ヨリシテ身ヲ治メ世ヲ治ル事ナレバ、兵法ハ道理ノオコル根本也

一打合ノ利ノ事、此打合ノ利ニテ兵法太刀ニテノ勝利ヲ極ル處ナリ、兵法ノ實ヲ顯ハス太刀ナリ

此兵法ニ身ヲナスコト肝要ナリ、能々鍛練スレバ兵法心ノ儘ニ成テ思儘ニ勝ツ道ナリ、工夫第一ナリ

一底ヲ拔ト云コト太刀ニテモ身ニテモ心ニテモ拔クナリ、底ヨリ崩レタルハ我心ヲ殘スニ不レ及、左ナキ時ハ殘ス心ナリ、殘ツテハ敵崩レガタキコトナリ、能ク鍛練可有之ナリ、

一我兵法實ノ道故、敵ト戰ヒ勝ツコト常住ノ修行ニ心聊カハルコト不可有ナリ、直ナル處行フ故ニ勝ツコト疑ヒ有ルベカラズ

一一拍子トハ我レ敵ニ當ルノ位ヲ敵ノ未ダ辨ヘヌ中ニ心ニ得テ、我身モ動カズ、心モ付カズ、如何ニモ早ク直ニ打拍子ナリ、敵ノ太刀引ン、張ラン 打ント思フ心ナキ内ヲ打ツ拍子、是レ一拍子ナリ

一無念無想ノ打ノ事、敵モ打ントシ、我モ打ント思フ時、心モ身モ打心ニナリテ空ヨリ後バヤニ強ク打ツコトナリ、一大事ノ打ナリ、能々習ヒ得テ鍛練可レ有者ナリ

一流水ノ打ノ事、敵アヒニ成テ迫リ合フ時、敵早クハヅサン、早ク太刀ヲ張リノケントスル時、我身モ心モ大ニ成テ太刀ヲ我身ノアトヨリ如何程モユル〳〵ト淀ミノ有樣ニ

大ニ強ク打ツコトナリ、此打チ習ヒ得バ慥ニ打ヨキモノナリ、敵ヲ見分ルコト肝要ナリ

一石火ノ當リト云フコト、此當リハ敵ノ太刀ト我太刀ト突合程ニテ、我太刀少シモ上ラズシテ如何ニモ強ク打ツナリ、是ハ足モ強ク身モ強ク手モ強ク三所ヲ以テ早ク打ツベキナリ、此打チ度々打チ習ハズシテハ打チ難シ、能工夫スベキナリ

一太刀ニカハル身ト云フコト、身ハ行カズ太刀ニテ打コトハアレドモ大方ハ身ヲ先キニ打チ、太刀ヲ後ヨリ打ツモノナリ、能々吟味シテ打チ習フベキ者ナリ

一身ノ當リノコト、敵ノ身ギハニ入リ込テ身ニテ敵ニ當ル心、我面ヲソバメ、我左ノ肩ヲハヅシ、敵ノ胸ニ當ルナリ、當ルコト我身ヲ如何程モ強クナリテ當ルコトナリ、相拍子ニテハズム心ニ入ベシ、此コト習ヒ得テハ敵二間モ三間モハネノクル程強キモノナリ

一三ツノ受ケノコト、一ツハ敵ニ入込ムトキ敵ノ打出ス太刀ヲ受クルニ、我太刀ニテ敵ノ目ヲ突樣ニシテ、敵ノ太刀ヲ我右ノ肩ニ引ナガシ受クルコトナリ、亦強キ受ケハ敵ノ打太刀ヲツク樣ニシテ首ヲハサム心ニテ突カケ受クルコトナリ、亦敵ノ打時短キ太刀ニテ受クルニ、太刀ニハカマワズ我左ノ手ニテ敵ノ面(ツラ)ヲ突ク樣ニシテ入込ナリ、是レ三ツノ

受ケナリ、左手ノニギリコブシニテ面ヲ突クヤウニ思フベシ、能々可レ有二鍛練一ナリ

一面ヲサスト云フ事、敵ト立合ニナリテ、敵ノ顔ヲ我太刀先ニテツク心ナリ、敵ノ面ツク心アレバ敵ノ身モノルモノナリ、戰フ内ニ敵ノ身ノル心アリテハ早ヤ勝ツ所ノ位ナリ

一ハリ受ノ事、敵ノ打所ヲ我太刀ニテ張リ受クル心ハ左ノミキツク張ルニアラズ、敵ノ打太刀ヲハリテ張ルヨリ早ク敵ヲ打ツ、張ルニテ先ヲトルコト肝要ナリ、張ル拍子宜ケレバ敵ナント強ク打モ少シ張ル心アレバ太刀先ヲツルコトナシ

一合ウ拍子ヲ知リ違フ拍子ヲワキマヘ、大小遲速ノ拍子ノ内ニモ當ル拍子ヲ知リ、間ノ拍子ヲ知テ背ク拍子ヲ知ルコト兵法ノ專ナリ、此背ク拍子辨ヘズシテハ兵法タシカナラザルコトナリ、敵ノ思ヒヨラザル拍子ヲ以テ空ノ拍子ヲ實ノ拍子ヨリ發シテ合フ所ナリ祕スベシ〳〵

武藏流修行心得之事

一平日之稽古麁末無ク、行儀正シク少シモ雜氣無ク、一心不亂變動無レ之、心氣慥カニ落着修行第一之事

一常ニ稽古之節少シモ僻ミ無クスラ〳〵ト修行可致事

一中段之位者上ノ形ハ和ラカニ靜ニ見ユルトモ底ノ心ヲ拔シ申サズ、先ヲ持候トコロ平生之心持肝要之事

一相口者細利ヲ望ムハ宜シカラズ、氣ヲ大ニ持チ專ラ先ヲ第一ニ致スベシ、併シ我情強ク有リテハ本心之覺悟ニ違ウ物ナリ、極マル所唯一討ニ相決シ候ヤウニ致シ候、併シ手前之氣相治ラズシテハ成リガタシ、何レ先ヲ拔カシ不申仕懸ケ向ヲ受候而勝附ク時者後ニ成リ痿痹氣ナド付物ナリ、都テ相口ノ勝負ハ三先ニテ始終之位相極リ居ルナリ、此段能々心ヲ附ケ工夫スベキナリ

一武藏一流之儀者平日ニ氣ヲ治メ、天理ニ違ヒ不レ申處則チ極意ニテ、兵法之道理ニ叶申

儀自然之妙用也、

無二他念一致二修行一熙心之發申候處ヲ中段ノ意味ニ而吟味致ス心行專一之事

天保九年十一月十九日

淺井先生ノ仰ニヨリテ之ヲ控ヘ置ク

右先生ヨリ同十年九月二十七日於四方地在三心之書在我傳同年十月八日ヨリ御病氣差發リ同月十八日ノ夜酉ノ下刻ニ七十四歲ニ而御卒去御墓所出町內妙敎寺

御俗名　淺井新右衞門榮廣

御法名　泰達院清勇日行居士

右三心之書弘化四年五月十九日於二私宅一志方半彌ト傳申候事

二刀一流極意條々

一放心ヲ嫌フ事　別書ニモ書キケレドモ爰ニ又書附也、已ヲ治ルニモ國家之政事ニモ兵法太刀ヲトルニモ放心ハ大ナル誤也

此書附、一身太刀ヲトルノミヲ謂ナリ、荒々云フ餘ハ推テ可知也、心殘ラズ敵ニ附テ放テ、刺ン打ントスルコヱニ放心ニナリテ、一心見ノ目ニテ見ルコヱ敵ノ面體許ヲ目ガケテ、身夢中ノ如クニ成ル也　カク云トテ敵ヲ目ニテ見ズト云ニテハナシ、敵色ヲ見分クベキナリ、故ニ見觀二ツノ見ヤウ、見ノ目ヲ輕ク、觀ノ眼ヲ強ク觀ルト云事有リ、見ト云ハ目許ニテ見ル事也、觀ト云ハ心ニテ觀ル觀智ノ事也、精神腹ニ治テ強ク成ル氣ヲ發シテ見ルモノ也、如是ナレバ心法丈夫ニテ眼モ明ニ能働ク也、放心セマジトテ心狹々敷成ル間敷也　少シモ窮屈ナル事ニテナシ、勢大ニ可二心得一也、敵之體バカリヲ見テ只々打ン指ントスルユヱ、指ハ打チソムケラレ、打バ抑ヘラレ、上ヲ切レバ下ヲ切ラレ突レナドスル也、然ルニ如何シテ勝ゾトオモハヾ、敵ノ心氣ノ動トコロ、出頭入トコロ、張頭タル

ムトコロ、サキダツトコロ、タルヽトコロ、ハマルトコロ、見合スルトコロ、落シ入レントスルトコロ、ダマシタブラカサントスルトコロ、打ントスル頭、打タルアトヲスカサズ太刀ノ構身ノ構ヲ構ユルトコロ、太刀ヲ上ゲ下ゲスルトコロ、太刀ヲトリ直ストコロ、足踏ミカユルトコロ、スベテ心氣ノ變ジ替ルトコロ、スカサズ指破リ打破リ入詰メ勝者也、殘ラズハ難ニ書附一、智力募レバ悉ク知ルベキ也、勝ツ事先後ノ二ツ也、勝ノ々先、又ハ後ノ勝也、先ハ頭ヲ勝チ、後ハ打トコロヲヒツパヅシ、打ハヅサセテ、ハヅルヽト一同ニ踏ミ付テ勝トコロ也、此二ツノ間ノ變化ノ拍子限リナキ者也、是モ智力募レバ可知ナリ、彼ヨリ此方ノ心氣ヲ引出シ放心サセントテ色々ノ業ヲ仕懸ルナリ、色々ノ術ヲ仕懸ル事ハ別書ニ書附置タル也、種々ノ事ヲ仕懸ルホド早ヤ勝ツトコロ也、勝ヨキ者也左樣ノ事ヲセザル程ノ位ノ者コソハ六ケ敷相手也、夫ホドノ敵ニハ夫ニ應ジテ勝ツ也、總ジテ勝事ハ敵ノ誤ル處ヲ勝ト可心得也、故ニ己ガ心氣體ヲ正整ニスル事第一也、常ニ三ツノ者ノ誤ヲ直シ敎ル也

一殘心放心之事　此儀ハ動靜ノ道、戰ノ用ヲナ事ハ也、殘ハ靜也、放ハ動ナリ、打圖

ヲ打放也、放ト一同ニ腹慥ニナル是殘ナリ、斯ク云トテ打時腹慥カナラズト云ニハアラズ、尤モ功ノユカヌ間ハ打ニツレテ腹ノ精ヌクル事アル也、殘放動靜トイクラデモ盡ル事ナシ、陽ニ發シ陰ニ治ル、陰中ニ陽ヲ生ジ、陽中ニ陰ヲ生ジ、自然トツキル事ヲキ處也、イツ迄モ陰　イツ迄モ陽ニテハ通ラヌナリ、靜ノ中ニ動生ジ、動ノ中ニ靜生ズ、動靜ニ極リナシ、敵ニヨツテ宜シキヲ用ル也、盡クベキ者ニアラズ、功ユカバ自然ト可知ナリ、奥ニ荒々書附タリ、是ハ殘放ヨリ動靜ニ遷ル變化ヲ云タルナリ、或ハ又殘放ヲ呼吸ト思ハヾ合點行カザルベキカ、但呼吸モ極リアルベキカ、如何ニ急ニ殘放スルトテモ節之レ有リ、緩ヤカニ殘放スル處モアリ、急ナル處モ可[illegible]又殘心放心ノ習ヒ別ニ有也、重ル緣ニヨツテ云フベキ也、殘心放心ハ戰ノ利万專ナル者也、他流ニ詰テ息ヅカヒヲシ、太刀ヲ切リ分ルトヤラ定テ腹ノ息ノヌケザルヤウニトノ事ナルベシ、何トヤラ窮屈ナルヤウニモ聞ユレドモ、仕馴タランニハ左ハ有間敷カ、是ヨリ左ニ云別ル事有也　世ノ中ノ物欲等ニ心移リ放心スル事有之ナリ、勿論惡キ事ナリ、又世ノ中ノ爲スベキ筈ノ事ニモ放心ニ成テ計ラズ誤コト有リ、右ニ云如ク兵法ニモ放心ニ成テ誤ル也、如此

類ノ放心ト殘心、放心ノ習ノ放心ハ各別ナリ、心ノ字ノ有ニテ疑テ判リ兼ルカ、又是ニ似タル事有之、志ヲ放ト云フ習フ事志ヲハナレノケヨ、又志ヲハナレトイウ事ニハ無之也放レカケルト成ドモ、發ルト成トモ、伸スト成トモ心得ベキナリ、志ヲ放シカケザレバ氣淀ミ止リタルヤウニ成リ、指キシミテスラリト放レ兼ル也、其キシミニテ指ユエ拍子間ヌケニ成リ却テ切ルヽナリ、打張モキシミヒッパリテ心ノマヽニ放レ兼ネ圖ハヅレニ成ル也、淀ミ止リ居付クナド、云フ事ハ大ニ嫌ウ事也、唯可有事ナリ、他流ニ殘放ナ或ハ七分三、或ハ四分六分ナドヽトモ心ニ用ルカ

一放心之事　別書ニモ書附置ルガ又爰ニ書附也、放ト云事心法ヲハナスノハナレル

ト云儀ニテ習フノ儀ニテハ無キナリ、心ハ一身ノ主リ殘心放心ヲ習フノ放心トハ各別也、故ニ是ニハ心ノ字ヲ附ザル也、此書附ハ專ラ此儀ヲ書クベキ爲メナリ、夫レ放レト云ハ心法ニテモ雜リ、惑ヒ、闇ク、迷ヒ、亂レ、弱ク、迫リナド、妨ト成者ヲ悉ク截斷シテ拂ヒ除ク大明不動、大剛强勇ニ戰法自然ト相應シ、敵ニヨッテ動靜心ノマヽニ相叶トコロノ儀ナリ其妨ニ成ルモノトハ己ガ心ヲ吟味スレバ知ルモノナリ、如何ナル事カ他ヨリハ計

リガタキトコロナリ、然ドモ荒增シ之ヲ書記スナリ古郷ヲ思ヒ妻子ヲ思出スコト、一命ヲ思フ事、敵ヲ恐ル事、己ガ身ヲ切ラレ突カレ間敷ト氣遣ウ事、敵相ヲ疑フ事、敵ノ太刀振ヲ氣味惡ク思フ事　邪曲僞ノ手立ノ事、其外何カト匠ミ思ヒ、雜意雜念等之事、兄事ニ勝ト思フモ誤ナリ、斯樣ノ類ヲ放レテ少シモ煩動無ク、本心決然トシテ是ヨリ兵法ノ道立チ、自悟自得ノ處ナリ、今存ジヨリ之レ有リテ書附ルナリ、臣タル者ハ義ヲ以テ邪欲ノ私ヲ放レ、一命ニ不拘シテ道ヲ守リ、平日ヨリ落命ニ至ルマデ君道ヲ明ニス可キナリ　如是ニテ三軍ノ鉾先精銳ニシテ當ルベカラザルナリ、佛家ニモ放レト云事有リ、其ノハナレ樣ハ知ラザレドモ、推量スルニ俗情ヲ切斷シテ出家ノ道義ヲ立ル事ナルベシ、死前ニ敵ノ破ル、處ヲ放ト書附タリ、其破リ樣ノ心得ハ凡ソ敵ノ三分一ナリ、三分一ト云ハ三ツニシテ一ツ動ク處ヲ破ルナリ、此圖ヲ拔カセバ却テ敵ノ爲メ我三分一ヲ打ル也、況ヤ敵其太刀ヲ引取ヲ打ツ樣ヘニ成タル處ヲ猥ニ打バ却テ我三分一ヲ打ル、也、總テ敵ノ心治リ心得テ居ル處ヲ猥ニ打ダヌ物ナリ、左樣ノ處ハ敵ヲ動シテ勝ツ者也、其動シ樣ハ極メガタシ、然ドモ大略ヲ云ハ、太刀ヲ打カケテ動スナリ、但シ猥リニ打ツハ惡

シト知ルベシ、是ハ心ニ得テスルト心ニ不得シテ猥ニスルトハ大ナル違ナリ、世ノ中ノ事ニ於テモ同前ナリ、其打樣有之事也、指先ニテ動スモ同前、聲ニテモ動カシ、證ニテ詰カケ、勢ニテモ動クナリ、鐘鼓ハ鳴ハヅノ物ナリ、其外無心竹木石ノ類モ打テハ夫々ノ聲出ルナリ、況ヤ誠心不足ノ敵ニ於テオヤ、動カサバ動クベク空智ヲ戰ハシテ破ルベキ也、我三分一ヲ見セザル樣ニ、敵ノ三分一ノ出ル樣ニ勢ヲ以テ迫リ立ル事兵法ノ力量也、ホケルホド云テ心氣證自由ニナル也、譬ヘバ糸ナドノ結ボレタル樣也、或ハ何事ニヨラズ六ケ敷埒明兼タルモノガサラリト埒明キ、或ハ道理ヲ疑惑シテ心志ヲ苦シメタルモノガ一時ニ合點シタル樣也、前ニ云フ如ク心法ノ妨ト成ル者ヲ拂ヒ除テ、誠心直道ノ道理ヲ習ヒ得テ、練リ、鍛ヒテ、引キ、吊リ、張リ、キシミ、縛リ、縒リタル樣ノ不自由成ル事無クシテ、總身心ノ儘ニ動靜スル事則チ解タルナリ、常ノ時ニモ戰ノ時ニモ、其用〳〵ヲナス事動靜ノ二ツヨリ外ニ無キナリ、故ニ一足ヲモ無用ノ足ヲ踏マズ、一刀ヲモ無用ノ太刀ヲ振ラズ、動カズシテ能ク先ヲ取ルナリ、已ニ動靜ナシ、敵ノ形ニ應ジテ動靜寬急ノ勢ヲナス也、故ニ兵法ニハ本來極マリタル形ナク全ク無形也、動靜ノ道理ヲ知リ得タルモノハ勝ナリ、一ツモ曲リ違ウ事ナク皆直々ノ法也、故ニ正直ニ觀解スル事最モ肝要ナリ、智ノ事別書ニモ書タリ、兵法ノ道ト理ト利方トヲ明ニ知ル者也、智ハ水ニ似タリ、事ヲ爲ニ凝滯スル事ナク、自由ノ者也、心得有ルベキ事也、此ニ一々辨ズルニ及バズ唯邪ヲ去リ正ニ赴カバ難ナカルベシ、智ヲ用ル事緩急有リ、常ニハ戰ノ利方ヲ靜ニ工夫分別シテ心ニ納得シテ太刀打スル時ニ其用ヲナス也、此處ニハ太刀打セズ、人數ヲ下知スル事ユヱ敵色ヲ見計ラヒ才神速ヲ貴ブ也、然ドモ大將自身ニ太刀打スル時ノ儀ヲ只一言云フ也、三軍敵ノ時ハ勿論能ノ士ト變化ノ相談モ可成也、武田信玄ノ村上義清トノ合戰、先手ノ侍大將甘利備前其旗色惡シク事急ナリ、然處ニ山本勘助分別ニテ敵ヲ南ニ向ケテ武田方ノ勝利ト成タリ、敵色ヲ分別シテ變化スルハ大將ノ事也、敵ノ景氣ヲ知リ太刀ヲ知ルコトハ卽チ智ナリ、但敵ノ景氣ハ外ヲ何トモナクシテ氣ヲ隱クシ、底ニ早キ拍子ヲ持タル是陰敵也　外ニ發シ底ニ心ヲ殘シタル是陽敵ナリ、入身ノ敵有リ、引請タル敵有リ、間ノ外ヨリ切ル敵有リ、間ニ入テ打敵有リ、兵法ニモ太刀短刀有リ、其外色々樣々ノ敵有ル也、常ニ

工夫シテ敵ノ景氣ヲ知ル事尤ナリ、總體ノ氣色ハ一身ニ在リ、足ノ蹈樣太刀ノ持樣ナドニテ心得可有ナリ、心利、氣ハ、眼利、總身利、常々戰ノ法ヲ能ク鍛練シ、心氣ニ能ク得テ智モ才モ道ト一ツニ馴レテ解ケタラバ成ル間敷事ニテモ成ルコト文筆達者ノモノノ物ヲ書クニ少シノ思案モナクサラ〳〵ト書クガ如シ、急ガヌドモ早シ、其心ヲ得ザレバ行當ル事多シ、謠曲ナドモ上手ハ文句節思案モナク滯ラズ靜ニモ早クモ謠ナリ、算勘モ達者ノモノハ急ク時ハ左右ニ算ヲ置キ又靜ニモスルトカヤ、是皆其藝ヲ能ク覺エ得タル處也、行步衆人ニ勝レテ達者成者ハ急ニ走ル樣ニハナケレドモ早クシテ一日ニ十數里ヲ行、並々ノ者ハ走リテモ追附事不能也、放歌（放歌ハ放歌師トシ今ノ輕業師ノ如キモノナリ）鞠ヲ數々投上ゲテモツレ亂レザル樣ニ取ル事心氣ノ絶間ナク、眼利心ノカネ合ヲ能ク覺タルナルベシ、藝ノ道筋ハ異ナレドモ心得タルト云ハ同ジ事也、總テ何事モ能ク仕得タル者ノ爲ス事ハ急カザレ共速ク、急ナレ共モツレザル者也、兵法吟味鍛練尤也、心氣騷ギ立チ顚倒絶間アリテハ兵法ハ消失スル也、故ニ丈夫正大ニシテ無動處ノ吟味尤モ肝要也、心ニ敎ヘ心ニ受ケ、人ニハ心有リ、心ノ外ニ人ナシ、太刀ヲ佩バ兵法有リ、兵法ト云ハ心ナリ、心ノ外兵法ナシト知ルベシ

身ヲ治ルモ心也、
善ト云モ心也、
國ヲ治ルモ心也、
英雄ト云モ心也、

一此道二刀ト云事　此道二刀ト稱シテ太刀ヲ片手ニテ持ツ儀ナリ、左ノ手ニ左ノ心得ナシ、太刀ヲ片手ニテ可レ持爲ナリ、片手ニテ持チ得ルニ軍陳、馬上、川、沼、細道、石原、人込、駈走リノ時第一ナリ、太刀ヲ片手ニテ持ニ初ハ重ク覺ル也、然ドモ功積ル時ハ後ハ輕クナルナリ、但人々ノ强弱ニ從ヒ身ニ應ズル太刀ヲ持ツベキコト肝要也

一圓儀之構上段　圓儀之構ハ右之手ヲ耳ニクラブルト云心、太刀ノ柄先開ク心ナリ、上中下ノ心ハ敵ノ構ニ有リ、打出ルコトノ遲速、淺深、輕重ハ敵ノ打ニヨルナリ、太刀筋下ニ打コトナシ、向ニ打モノナリ、太刀筋喝咄スル時太刀ノ刃ヲ立テ敵ノ打右ノ手ヲ突心ニテ打ナリ、上ルコト敵ノ太刀ニ中リテモ中ラズテモ同ジコトナリ、我手前違ハヌ

樣ニ早ク打コト專ナリ、喝咄トツヾクル太刀筋ナレバツヾクルコトモアリ、敵合近クシテハナリガタシ、受テトルナリ可分別ナリ

一觀實之構中段　切先返敵合遠キ時ヒツサゲ、敵ノ力トカヌニ中ヨリ身ヲ向ニ直ニ立テ左右ノ手前ニ出シ、太刀大小之刄ヲ餘リ立テズ、ヒラメズ、筋チガヘテ懷中ヲ廣ク大小ヲ組ヌタル樣ニ持ナリ、突出サズ又臂ヲガヾメズ、右ノ太刀先少シ上ル心ニテ、敵ノ中筋ニ有ル樣ニ構ヘテ敵打出ス心ヲ受ケテ敵ノ打太刀ニアタラザル如ク、向ノ顏ニ突カケ敵ニ巧ミヲ失ハセ、是非ナク打處ヲ切先ヲ返シテ上ヨリ手ヲ打ナリ、其太刀前ニステヌル如ク提サゲテ我身ヲ不動ニ敵又打カクル處ヲ三分一ニテ下ヨリ手ヲハルナリ、總ジテ敵ガ打ント思ウ心ノ頭ニ我心ヲツケテ先ニナル者ナリ、此太刀何レニモ出合ナリ

一應極之構下段　應極之構ハ太刀先開カズ、左ノ手ヲ懷中廣ク構ヘ、臂ヲ延サヌ樣ニシテ振出コト敵ノ中筋ヲ打ナリ、前廣ニ打心ナリ、左ニ筋チガヘテ打コト惡シ、太刀筋切先返シニ直ルナリ、事ニヨリウチヨクノ構ニナスコトモ有リ分別スベキナリ

一交務之構右脇　交務之構ハ太刀ヲ右之脇ニ捨ル心ニ構ヘ、左ハ高クナキ樣ニ手ヲ深ク組ミチガヘタ樣ニ持ナリ、敵ノ打ニアタルコト是レ三分一ニシテ中ツル、打落サント思フ時中ル心ニシテ少シ下ヲ拔キ筋カヘテ切ナリ、早キコト肝要ナリ、太刀筋ユガムコトナリ、直ル處ハ喝咄先返シニ成ルナリ

一縱選之構左脇　縱選之構ハ太刀ヲ前ニ捨テ、太刀先左ニヨセテ敵ノ打出スニ三分一ニヨケテアツル、其ノ當樣ハ我手ヲ上テ敵ノ太刀先ニ手ノナキ樣ニ突出シテアツル、敵打カクルニヨツテ越シテ腕ヲ切ル、何モ太刀筋切先返シニ直ル心ナリ、亦一ツニハ切先向ニシテ我右ノ足ニ氣ヲ付ケ提ルト云心持ニテ敵ノ心ノ發ル處ヲ打ツ、淺深ハ敵ノ心ニ依テナリ、此太刀能々吟味スベキナリ、總ジテ太刀構五方ニ過ギズ、敵ヲ打ト云コト道ニツナシ、是ヲ以テ心得アルベキナリ

一三ツ之聲ト云事　三ツノ聲ト云コト有リ、敵ヲ動サン爲ニ打ト見セテカシラヨリエイト聲ヲカケ、聲ノアトヨリ太刀ヲ打出モノナリ、亦敵ヲ打テアトニテ聲ヲカクルコト勝ヲ知ラスル聲ナリ、是ヲ前後ノ聲ト云ナリ、太刀ト一度ニ大キク聲ヲカクルコトナシ

一背ク拍子ト云事　ソムク拍子ヲ知ルコト兵法ノ專ナリ、此背ク拍子ヲ辨ヘズシテハ

兵法ダシカニナテザルナリ、此拍子能々吟味スベキナリ、工夫第一ナリ

一目付ト云事　目ヲ付ルト云コト、昔ノ色々有コトナレドモ今傳ル處ノ目付ハ大抵敵ノ心ニ目ヲ付ルナリ、口ノオサメ樣常ノ目ヨリモ少シ細ンウテヤカニ見ルナリ、目玉不動敵合近クトモ遠ク見ル目ナリ、其目ニテ見レバ敵ノナスコト兩脇迄モ見ルナリ、瞰（カン）ノ目強ク見（ケン）ノ目弱ク見ルベシ、能々可有吟味者ナリ、道理ヲ得テ道理ヲ離ナレ、兵法ノ道ニモ亡ト自由有テ自ラ奇特ヲ得ルニ至テハ自ラ擊チテ自ラ當ル是實相無相ノ理也

（終）

二天記

凡例

一此書ハ豫メ先師一生ノ事ヲ錄ス家父ト川正剛若年ノ頃老健成リシ直弟子ノ人々ノ物語ニ先師徒然ノ折節自然打話シ有シ事ナリ或ハ先師自筆ノ文書等抄出スル也

一先師勝負ノコトハ數十度ノコトナレバ世說ニ謂フ所或ハ相手ノ違ヒ或ハ別人ノ勝負或ハ其手技ノ違ヒ區說多シ最モ洩タルコト多シ

一先師直弟老健ニテ正剛ニ對シ物語有シ人々ハ熊府ノ士道家角左衛門後ニ徹水ト號ス正剛劍術ノ師平藏ノ父ナリ或ハ代城ノ士山本源五左衛門後ニ圭水ト號ス中西孫之允出中左太夫等ノ噺ナリ是等ハ先師ニ從ヒテ各大形相傳モ有シ門弟ナリ殊ニ中西ハ先師病中ニ松井寄之主ヨリ附ケ置カレシ人ナリ

一岩流勝負ノコトハ長岡興長主其事ヲ取リ計ヒ在リシ故于今精シク開傳ル處ナリ又正德二年春豐州小倉ノ商人村屋勘八郎ト云者八代ニ來ル正剛遇之岩流島ノコトヲ問フ勘八委シク其事ヲ語ル勘八親族ニ小林太郎左衛門ト云フモノ長州下ノ關ノ問屋ナリ則先師其

宿セシ所ナリ彼ノ家ニ老人アリ其者先師舟渡リノ時ノ舟人也勘八度々出會シ其噺ヲ聞ニ毎回一言モ不違ト故ニ此度委シク知レリト語ル

一此ノ書ノ文體ハ其人々ノ噺ヲ直ニ書留置シ覺書ノ儘ニテ文言ヲ不改書スルナリ猶五輪ノ書等ノ中ヨリ少々書キ加ヘ一書トスルモノ也

寶暦五乙亥年二月

橘八水正脩著

此ノ書武公傳ト有シ(リ)ヲ二天記ト改メテ宇野惟貞ニ序ヲ乞ソテ全書ト爲者也

豐田景英校

序

古自日神帶八握十握等劍。而世蓋劍技起焉。日本武尊始作之三段位。源幕府(家)義增之以段。於是段位者定也。平相國(清盛)傳之鞍馬僧。鞍馬僧傳之源廷尉(義經)。而後有中條神道。神陰等諸流。行于世云。而足利臣氏之際此技最盛。而各自名家者不可枚擧。其特聞者吉岡當理二流也。吉岡雖伏。獨當理雄鳴于天下。當理者武藏父無二之流也。無二用十手器。武藏代之以刀。長短刀幷用者自武藏始矣。武藏承家業傳其妙。而不襲其爲。故其術至矣盡矣。於是大成也。可謂善人繼之志。善述人之事也。其爲人也。天資卓絶。通治國之體達軍旅之事。有文有武。以故所至諸侯無不師之。實有相將之材。而不居其職。是以於其技也精。於其道也極。正直以持身。奇變以應物。故術有三先五方。蓋三先者監機之先也五方者位段之法也。豈若衆家以其技術。于世取諸懷而與之也豐田氏三世。能學其技而淑諸人。令子俊校父祖所記。欲以示人。亦善繼志述事者也。因爲叙。

安永丙申仲冬

宇貞識

二天記

一新免武蔵藤原玄信其先

村上天皇ノ皇子具平親王ノ後胤播磨國佐用ノ城主赤松二郎判官則村入道圓心ノ末葉也、

故有テ外戚ノ氏姓宮本ニ改ム又兵書等ニハ新免ト書セリ、天正十二年甲申年暦三月播州ニ生ル幼少ノ名ハ辨助ト云フ老年ニ及ビ肥後ニ來リ居住セリ、立田山泰勝寺二世之僧春山和尚ニ縁リ道號ヲ二天道樂ト號ス、流書ニ曰我若年ヨリ兵法ノ道ニ心ヲ懸ケテ國々所々ニ於テ名高キ兵法者ニ對シ眞劍或ハ木刀ノ勝負六十餘度ニ及ブト云トモ一度モ其利ヲ失ハズ、其程歳十三ヨリ二十八九迄ノコト三十ヲ越テ跡ヲ思ヒ見ルニ兵法至極シテ勝タルニハ非ズ、自ラ道ノ器用有テ天理ヲ離レザル故カ、又ハ他ノ兵法不足ナル處ニヤ、其ノ後尚モ深キ道理ヲ得ント朝鍛夕錬シテ見レバ兵法ノ道ニ過フコト五十歳頃也、夫ヨリ以來ハ尋ネ入ルベキ道モ無クシテ光陰ヲ送ル、扨兵法ノ理ニ任セテ諸藝諸能ノ道ト爲セバ萬事ニ於テ我ニ師ナシト書セリ、一流ヲ實相圓滿ノ兵法逝去不絶ニ天一流ト稱スルナリ

赤松家ノコトハ赤松大膳太夫源満祐入道性具、嘉吉元年足利將軍義教公赤松ガ所領ノ
備前播磨美作ヲ割テ赤松貞村ニ封ゼントス爲ラル、實ハ其勢ヲ滅ゼラレンガ爲メナリ、
滿祐私カニ是ヲ聞キテ甚ダ憤怒シ同年六月將軍ヲ召待シテ忽チ弑シ奉リ播州旗山ノ城
ニ還ル、依テ山名右衞門佐持豐入道宗全是ヲ攻メ同九月遂ニ城陷テ滿祐自殺ス、其ノ
後赤松家衰微ス、慶長五年關ケ原合戰ノ時赤松上總介義祐石田三成ニ組シテ沒スルナ
リ、武藏守系圖未考

一武藏父新免無二之介信綱ト云フ劍術ヲ得當理流ト號ス十手二カノ達人也、將軍義昭公
ノ御師吉岡庄左衞門兼法ト云フモノ洛陽ノ士扶桑第一ノ劍術者ナリ、將軍ノ命ニ依テ庄
左衞門ト無二ト雌雄ヲ決セシム、庄左衞門一度利有テ無二兩度カチヲ得タリ、因テ無二
ニ日下無双ノ號ヲ賜フナリ

新免無二之介劍術ヲ修シ得テ自ラ新免ト改ム、又吉岡ト勝負ヲ決シテ日下無双ノ號ヲ賜
フ、此ノ時ヨリ新免ト改ムトモ云ヘトモ未詳

一或說ニ曰ク慶長十九年六月禁庭ニテ御能興行有シ時其席ニ於テ吉岡押ヘノ雜色ドモト
口論シ遂ニ身ヲ果スト云ヘリ

一武藏箕裘ヲ繼テ藍ヨリモ青ク、慶長元年丙申三月十三歲ノ時播州ノ劍術者新當流有馬
喜兵衞ト云者ト初メテ勝負ヲ決シテ勝之

神道流ヲ新當流ト書カ、有間大和守學之有一本作馬間流ト云フ、有間豐前守トトモ云
フ聞エアル人ナリ、有間喜兵衞ハ其家族ナルヨシ、常陸國飯篠長威齋ト云者鹿島ノ香
取ノ神ヨリ其技術ヲ受天眞正傳ト書ス是神道流ナリ

一慶長四年巳亥春但馬國强力ノ兵法者秋山ト云者ト勝負ヲ決シテ勝之于時十六歲

一同五年關ケ原合戰武藏働キ群ヲ拔ンス諸軍士知ル處也

一同九年春二十一歲ノ時都ニ上リ天下ノ兵法者吉岡庄左衞門ガ嫡子清十郎ト洛外蓮臺野
ニ於テ雌雄ヲ決ス、清十郎ハ眞劍武藏ハ木刀ヲ以テ擊之、清十郎忽斃レ息絕ル、渠カ門
弟等板上ニ助ケ乘セテ家ニ歸リテ藥治シ本復ス、其後兵法ヲ棄テ、剃髮ス其後弟傳七郎
ト洛外ニ出デ勝負ヲ決ス、傳七郎ハ豪兵ニテ五尺餘ノ木刀ヲ持チ來ル、武藏頓ニ其木刀
ヲ奪テ一打ニ擊之立所ニ斃レ死ス、依テ吉岡門弟恨ミヲ含ミテ清十郎ガ子又七郎ト組シ

數十人兵仗弓箭ヲ携ヘ下リ松ニ會ス、武藏又七郎ヲ斬殺シ徒黨ノモノヲ追退ケ威ヲ振ヒ

テ洛陽ニ歸ル、於斯吉岡ガ家斷絶ス

一同年南部寶藏院覺禪坊法印胤榮ノ弟子ニ奥藏院ト云日蓮ノ僧アリ鎗術ノ達者ナリ、武藏彼僧ニ遇ヒ鎗術ヲ試ム、僧鎗ヲ以テ立向フ、武藏ハ短キ木刀ヲ持テ立會相ヒ兩度勝負ナナスニ僧利ナシ、依テ武藏ガ技術ヲ感賞シテ院ニ停メ饗應アリ、其夜談話スルニ已ニ曙ントス武藏走リヌ

一武藏伊賀國ニテ完戸何某ト云者鎖鎌ノ上手也野外ニ出テ勝負ヲ決ス、完戸鎌ヲ振出スヲ武藏短刀ヲ抜キ完戸ガ胸ヲ打貫キ立所ニ斃レシヲ進デ討果ス、完戸ガ門弟等拔連レ各斬テ懸ル、武藏直ヲニ大勢ヲ追崩セバ四方ニ逃去ス、武藏悠然トシテ引去ル

一武藏江戸ニ至リシ時一傳流丸目主水ガ傳ニ波多野二郎左衛門ト云人アリ、武藏ニ對シ刺擊ノ理ヲ改作為ンコトヲ請フ、武藏其利ヲ論シ技ヲ改メ一轉流ト號ス、波多野後ニ入道シテ宗件ト云フ技藝卓絶シテ世ニ其名有テ門弟モ多シトナリ

一武藏江府ニ在リシ時夢想權之助ト云者來リテ勝負ヲ望ム權之助ハ木刀ヲ携フ、武藏折節楊弓ノ細工有リシガ直ニ割木ヲ以テ立向フ、權之助會釋モ無ク打テカヽル武藏一打ヲニ擊仆ス依テ閉口シテ走ル

一石川左京ト云人武藏ニ因テ道ヲ學ブ武藏江府ニ別ルヽ時像ヲ畫シテ是ヲ信仰ス其讃ヲ林道春ニ請フテ書之、羅山文集ニ見エタリ此ノ書ノ奥ニ出ス

一岩流小次郎ト云劍客アリ越前宇坂ノ庄淨教寺村ノ産ナリ、天資豪宕壯健タグヒナシ、同國ノ住富田勢源カ家人ニ成リ幼少ヨリ稽古ヲ見覺エ長ズルニ及デ勢源ガ打太刀ヲ勉ム勢源ハ一尺五寸ノ小太刀ヲ以テ三尺餘ノ太刀ニ對シテ勝ヲヲ爲ス、小次郎常ニ大太刀ヲ以テ勢源ガ短刀ニ對シテ粗技能アリ、猶鍛錬シテ勝利ヲ辨ズルニ高弟各小次郎ガ太刀サキニ及ブ者ナシ、於斯勢源ガ肉弟治郎右衛門ト勝負ヲ決シテ之ニ打勝ッ、依テ勢源ガ下ヲ駈落シテ自ラ一流ヲ建テ岩流ト號ス、其法術尤モ奇ナリ、諸國ヲ經周シテ名高キ兵法者ニ會シ數度ノ勝負ヲ決スルニ勝利不失、斯テ豐前小倉ニ至ル、太守細川三齋翁忠興公聞シ召テ小次郎ヲ停メ置キ玉ヒテ門弟出來テ指南アル、于時慶長十七年四月武藏都ヨリ小倉ニ來ル二十九歳ナリ、長岡佐渡興長主第ニ至ル興長主ハ其父無二之助ノ門人也、其

興ノ故ニ因テ來ルナリト、曾テ興長主ニ請テ曰、岩流小次郎今此ノ地ニ留リヌ其術奇ナリト承ル希クバ吾手技ヲ比ベンコトヲ、公ハ無二ガ故有リ縁テ憑ミ奉ル者也ト謹テ願フ興長主應諾アリテ武藏ヲ留テ忠興公御聽ニ達シ其ノ日ヲ定メ小倉ノ絶島ニ於テ勝負ヲ決セシム、向島ト云又舟島トモ云、今又岩流島ト云、豐前ト長門ノ境小倉ヨリ舟行一里長門下ノ關ヨリモ同里數ナリ、扨テ前日府中ニ觸有テ此度双方勝負ノ贔負及遊覽ヲ禁止アリ、興長主武藏ニ曰、明朝辰ノ上刻向島ニ於テ岩流小次郎ト仕合致スベキ由ヲ諭ス、小次郎ハ忠興公ノ船ニテ差越サルベシ武藏ハ興長船ニテ致度也ト、武藏去テアトナシ、遍ク府中ヲ尋レドモ行衞不知、皆云ク渠レ此間逗留ノ内小次郎ガ技術妙術ナルヿヲ聞及應シテ逃タリト云フ、興長主モ如何トモ爲カタナク茫然トシテ臍ヲ嚙ニ至ル、稍有テ興長主家士ニ命ジテ我ツラ〳〵是ヲ按ズルニ渠レ懼レテ逃ルナラバ何ゾ今日ヲ待タン、察スルニ渠心持有ルコトナラン先ノ日下ノ關ニ着テ翌日爰ニ來レリ定メテ下ノ關ニ至リ夫レヨリ向島ニ往カンコト必セリ急ギ飛脚ヲ立ベシトナリ、則チ飛脚下ノ關ニ至リ見レバ果シテ問屋小林太郎左衞門ト云者ノ所ニ有リ飛脚右ノ趣ヲ告ルニ武藏書ヲ呈ス、其文ニ

明朝仕合之儀ニ付私其許樣御船にて向島に罷遣之由被仰聞重疊御心遣之段忝存候然とも此回小次郎と私とは敵對の者にて御座候然るに小次郎は忠興樣御船にて被遣私は其許樣御船にて被遣と御座候處御主人へ被對如何敷奉存候此儀私には御構不被成候而可然奉存候此段御直に可申上と被存候得共御承引なさるましく候に付態々不申上候て爰許へ參居候御船の儀は幾重にも御斷申候明朝は爰許船にて向島へ渡候事少も支無御座能時分參り可申候間左樣可被下思召候已上

四月十二日　　宮本武藏

佐渡守樣

右返答ス、扨翌朝ニナリ日高クナル迄武藏寢テ不起、亭主太郎左衞門ハ無心元思ヒ辰ノ刻ニ及ベリト起シ告ル處ニ飛脚小倉ヨリ來リ船渡ノ由ヲ武藏ニ告ル、武藏無程參リ申可由返答シ手水シ飯ヲ仕舞ヒ亭主ニ請テ櫂ヲ以テ木刀ヲ大キニ削ル、其内飛脚又來リ早々可渡申急告ル、武藏ハ絹ノ袷ヲ着テ手拭ヲ帶ニハサミ其ノ上ニ綿入ヲ着テ小船ニ乘テ出ル、舟人ハ太郎左衞門ガ家奴也、船中ニテ襷ヲカケ右ノ綿ヲ覆テ伏ス、島ニハ檢使警固